

2024年43号

Vol.43

総人・人環フォーラム

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

特集 AI時代の教育と文化

日置尋久「AIがあふれ出した世界でわれわれはAIをAIするのか」

金丸敏幸「生成AIは教育の黒船？」



座談会 専門性をあらためて問い直す 総合人間学部再編のめざすもの
宮下英明・戸田剛文・船曳康子・松江崇・小島泰雄・小木曾哲

◎目次——総人・人環フォーラム第43号——

巻頭言

「学生と大いに語り合うべし！—総人・人環への提言」	……………	桂山 康司	1
---------------------------	-------	-------	---

公開講座「AI時代の教育と文化」

セッション1「AIがあふれ出した世界でわれわれはAIをAIするのか」	……………	日置 尋久	2
セッション2「生成AIは教育の黒船？」	……………	金丸 敏幸	10

座談会

専門性をあらためて問い直す ——総人人間学部再編のめざすもの	……………	宮下 英明・戸田 剛文・船曳 康子 松江 崇・小島 泰雄・小木曾 哲	17
-----------------------------------	-------	---------------------------------------	----

2023年度 人間・環境学研究科報告

2023年度 人間・環境学研究科 現役生・修了生の受賞者一覧	……………	28
2023年度 人間・環境学研究科 教員の活躍一覧	……………	29
現役生・修了生 2023年度受賞研究から	……………	30
下 絵津子 陳 暁嘉 山本 知香 濱田 明日郎 犬走 渚		
河野 友哉 安藤 加菜子 香月 悠希 齋藤 駿介 天羽生 悠矢		
松尾 香奈 古川 翔一 Hamada A. El-Naggar 橋 悟		
川喜多 遥菜 大波 千恵子		

教員の活躍

英国王立化学会称号授与に際して	……………	吉田 寿雄	46
触媒学会奨励賞受賞によせて	……………	山本 旭	48

私の研究の原点と現在

少年の素朴な疑問から	……………	萩生 翔大	50
言語学習と言語研究を行き来する	……………	堀口 大樹	53

研究科修了生の助成金による出版図書

中谷森『シェイクスピアと日本語——言葉の交通』：小嶋ちひろ			55
福田安佐子『ゾンビの美学』：西山智則			
西島順子『トゥッリオ・デ・マウロの民主的言語教育 イタリアにおける複言語主義の萌芽』 ：丸山敬介			
郭旻錫『自己否定する主体 一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』 ：テン・ヴェニアミン			
張詩雋『宗教美術の身体美学—チベット・タンカの人類学的研究』：正垣雅子			
安藤加菜子『在宅育児手当の意義とあり方 自治体による新たな現金給付とその可能性』 ：足立幸男			
萩原広道『子どもとめぐることばの世界』：柳岡開地			

国際交流セミナーから

Study-abroad and Taiwan as a “Silicon Island”: a Focus on TSMC	……………	藍 適齊	62
--	-------	------	----

人環図書 一教員自らが語る新著一

……………			70
-------	--	--	----

感銘を受けた3点

……………			77
-------	--	--	----

【葉片のみえる筆触】
わたしの筆触概念は非具象の愉しみとしてある。そこには放任きわまる自由な快感と速筆一気の洒脱があり、動勢あふれる高揚感が定着される。青き葉片のパートは重なり、折り混ざりゆく者と向い合っている。

表紙のことば

プロフィール
くらもと 倉本 修

東京生まれ、75年以降6千余冊の単行本を装幀。88年、装幀事務所を設立。造本装幀コンクール文芸部門などで多数受賞。独ライプチヒ「世界で最も美しい本展」などに出品。作品集『ミシヨ魔法の国にて』『二本の指もまた立っている』『美しい動物園』『芸術のルール』ほか。



「学生と大いに語り合うべし！—総人・人環への提言」

桂山 康司 | Koji KATSURAYAMA (京都大学名誉教授)

「学際研究への挑戦の燈火を絶やしてはならない—」

と書き始めるつもりであったが、どうもあとが続かない。回り道のようなが、自身の学生時代に受けた、教養部時代の授業の思い出から始めたいと思う。渡辺実先生の「日本文学」の授業である。内容は、平安時代の文章史であったと思うが、忘れられないのはその試験の論題である。「『源氏物語』の現代性について論ぜよ」—そんなはなしは授業中に一切なかった。むしろ、『枕草子』の文体が、文法的にはまだ未整備な日本語の姿にあるということにはじまり、次第に文法性を顕在化させていくとともに成熟してゆく日本文学の姿を、名作の味わいと共に明らかにするといった授業内容であったかと思うが、授業中に一度もふれられなかったテーマを論じるとはどういうことかと訝りながら、ない頭を絞って試験時間中、与えられたテーマと格闘した。その後、晴れて教養部の教員になった時、京大の教員が心がけるべきことの一番は「自身の考えを強要せぬこと」にあると理解するに至る。授業で、教員は、自身の考えを述べないわけにはいかない。しかし、学生にそのオウム返しを求めてはならないのだ—試験は、むしろ、個人的学説が多分に含まれる教員の考えに対する受講者側からの批判的応答によって行われるべきであるということだ。そして、授業の第一の要諦は、単純化された知の成果の伝授ではなく、批判精神の涵養こそが目指すべき目標であるということ片時も忘れぬということにある。京大は自由の学風で知られるが、その自由は、教員のそれに止まってはならぬのであって、学生の自由な発想力をいかに確保し、それを鍛え上げるか、そのために、どのような授業の在り方が最適なのかを、教員は工夫し続けなければならない。学生は、いつも挑戦者として、入れ替わり立ち替わり目の前に現れては消えてゆく。強固に確立された自己の学説の砦に立て籠もることなど、とても許されないのだ。「現代性を論ずる」とは、遺産としては評価するとしても、今の自身のありかたから虚心に見たときにはどうかについて、あらためて考えてみるということだ。「私の捉え方は十分授業中に示した。お前は、今を生きる一学徒として、それをどう受け止めるか—他人事ではしかなかった学問的論説を、自身にとっての切実な問題として捉えなおせ、との誘いであったのかもしれない。高度な知の一端に触れているなど

と思いがあってはいけけないのだ。

学問の積み上げに対する姿勢もまた、同様に、今に生きる一個人としての自身の在り方をそこにぶつけることで、自身の感性を学問の総体に付与し、そこに活かそうとすることでなければならない。学の体系は、強固な枠組みがあるように見えて、その枠は意外に柔軟で、それこそ生き物であって、絶えず、生まれ変わっていく。だとすれば、今、確立していると思える学説や学問体系もまた、新しい観点の登場や、一見無縁と思われていた他の学問体系との接触によって、新たな相貌を呈することは大いにあることだ。それどころか、いわゆるパラダイム・シフトにより、劇的な変化を見せることも珍しくはない。

もちろん、一個人の知力など、たかが知れている。しかし、この世に生まれる個体で、他の個体と経験の総体を同じくするものは二つとない。だとすれば、個体の数ほど、多様性はあり、それは、ロマン主義者が夢想した「無限」の可能性を示唆する。学の体系の「完成」を目指す古典主義者になるのもいいが、総人・人環は、ロマンチックに、「無限」の可能性に賭けようじゃないか！もちろん、我々にも、目指すべき、特別に残された「完成」がある。総人人間学は、自立した学問体系の「完成」ではなく、科学の緻密な分析の極限に、うっすらとではあるが、絶えず、知全体の総合を見据えているのだ。

最後に、今後の総人・人環の存在意義を大いに高めるために、一言、提言をしておきたい。と言って、いたって simple なことである。まず、多様性を生かす基盤となる「自由の学風」の堅持である。だが、この伝統は全国に知れ渡っていて、いまさら入学志望者に喧伝する必要はない。むしろ、人事採用に際しても、この方針を前面に打ち出してほしいのだ。具体的には、功なり名を遂げたご大老よりも、ちょっと面白そうな若武者、「変人」を大事にしてほしい。過去の成果ではなく、可能性を秘めた人材に総人・人環の未来を託してほしいのだ。そして、とにもかくにも、無限の可能性を秘めた、未来を担う学生と大いに語り合うべし！

そして、人間・環境学研究科が、このような「人」の育成に、教員、学生、そして事務の皆さんが挙って参画し、熱い本気の議論が闘わされる場—フォーラム—であり続けることをこころから祈念する。

セッション1「AIがあふれ出した世界でわれわれはAIをAIするのか」

日置 尋久 | Hirohisa HIOKI

日置 尋久 (ひおき ひろひさ)

人間・環境学研究科教授。1969年生まれ。専門はメディア情報処理。博士(理学)。総合人間学部助手、高等教育研究開発推進センター助教授などを経て、2015年より現職。

今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。今回はこのようなタイトルで、盛りだくさんになるかなと思うんですが、順番にお話しさせていただきます。

AIはこう使われている

まず最初に、現在のAIが、どのような分野で使われているか、またどんなことができるのか、簡単にご紹介させていただきます。

多様な分野で、AIの導入や導入の検討が進められています。例を簡単にあげますと、農業の分野では作物の収穫時期を自動判定すること、あるいは、ちょっと先の話になると思いますが、交通の分野では自動運転が考えられています。また早くからAIの導入が進んでいる分野だと思えますが、接客においてはクライアントの問い合わせに対する自動応答があります。

AIにできることの最新事例

次に、このようなAIで、今、どんなことができるのかに関する最先端に近いところを事例として2つご紹介したいと思います。

1つ目がOpenAIのAIです。チャットGPTの名前はよく聞かれていると思いますが、このGPT-4oとはチャットGPTに使われているAIです。チャットGPTとGPT-4oの関係を簡単なアナロジーで説明するとチャットGPTを自動車に喩えると、自動車のエンジンに当たる部分がGPT-4oです。これは今年の5月に発表された新しいものです。つい最近GPT-4oのMiniというグレードダウンしたのも発表されていますが、機能としてはGPT-4oが最上位のものになります。

このGPT-4oが5月に発表された際、お披露目のデモが行われました。そのデモからシーンを切り出して説明します。この画面では日本語の字幕が出ていますが、実際には英語でのやり取りが行われています。またこのデモでは、チャットGPTに対する指示は全部音声で行っています。

このシーンですが、プレゼンターの1人が、チャットGPTに対して手書きのメッセージを見せて、あなたに見せたいものがあると、チャットGPTに提示している場面です。それに対して、チャットGPTはあなたが何を書いたのかぜひ見たいと答えています。実際、この画面の上の方にメッセージがあるのですが(図1)、具体的にはスマホのカメラでメッセージを見せて、チャットGPTがどう反応したかという話です。



図1 “I ♥ ChatGPT” (ChatGPTへの手書きのメッセージ)
出典: Introducing GPT-4o | OpenAI Youtube (動画より抜粋)
<https://www.youtube.com/watch?v=DQacCB9tDaw>
(最終アクセス日: 2024-12-05)

これに対してチャットGPTが、チャットGPTが大好きなんですと、答えています。メッセージにはハートマークが書かれているのですが、それをLOVEと理解していることがわかります。つまりI love ChatGPTと読んで、チャットGPTが大好きなんですと、答えています。しかも、このシーンでは、嬉しい感情を抱いているような声で返事をしています。これはすごい技術だなと衝撃を覚えます。

これは別のシーンで、右側のプレゼンターが、自分の顔をカメラで見せて、私がどんな感情になっているかを予測してみてくださいとチャットGPTにチャレンジを与えている場面です。それに対してチャットGPTは、幸せで満面の笑みを浮かべています、とあたかも表情から感情を理解しているように応答しています。これらのことから、いわばチャットGPTは目と耳を持っていて、感情も理解できるように見えます。

次にもう一つの事例です。Googleが開発したジェミニというAIがあります。最新の機能がこれも5月に発表されたのですが、その機能を一つご紹介します。これは靴の写真で、このシーンではこれをジェミニに示して、ネットで買ったけど小さすぎるから返品してほしいと依頼しています。すると、ジェミニが代わりに仕事をするというデモです。ジェミニは最初にメールを検索して、靴の注文書を探し出します。ここで、靴がどのメーカーのどの型番かを判断します。判断ができると、自動的にメーカーのサイトにアクセスして返品処理をします。しかしこれで終わりではなくて、返品するためには、実際に物を返さなければい

けません。そこで宅配業者を手配して、カレンダーに日付を書き込む、ここまでを全部、自動でやってくれています。

つまりジェミニは一問一答ではなくて、何か目的が与えられると、それをするために何が必要かを自分で判断して作業計画を立てて、順番に進めていくことができているわけです。

AIの学習とは

それではAIがどんな仕組みになっているのかについて、AIモデルという言葉を使って説明したいと思います。

AIモデルは、端的に言うと、知的なタスクを実行するためのデータ処理システムと言えます。システムは、コンピュータのソフトウェアとして作ります。ただAIモデルは、作ったらそれですぐ使えるわけではありません。学習をして初めて高い性能が発揮できる仕掛けになっています。それでは、ここで言う学習とは何なのか、人間の学習のアナロジーを使っているわけですが、その中身についておさげに説明します。

AIモデルの中には調整可能なパラメータが大量に入っています。そのパラメータをどう設定するかによってAIの性能が大きく変わります。当然、高い性能が発揮できるようにパラメータを調整したいわけです。しかしパラメータがあまりにも大量で、それを人間が手でやるのは不可能です。では、どうやってパラメータを調整するのか。モデルは、パラメータが調整できていなくても、とにかく答えを出すことはできます。そのように設計されています。調整がうまくいっていないとでたらめな答えが出るかもしれませんが、しかしその結果を見て、結果に応じてパラメータを調整できて、たくさんのデータを使って、徐々にパラメータを調整していくことができます。このようなデータを使ったパラメータの調整が学習というわけです。

つぎにパラメータ調整による学習を、ちょっとしたデモを使って、もう少し実感を持って見ていただきたいと思います。

まず例として猫と犬を分類するという問題を考えてみる

ことにします(図2)。実際どうやって分類するか、例えば、犬や猫の耳の長さ、体の重さとか、何か数値で測れる特徴があるでしょう。数値で測れる特徴をまず1個持ってきて、それをXとしましょう。それでXの特徴をこれらの犬、猫についてまず測ったとしましょう。さらにもう1個、何か具体的に数値で測れる特徴Yを持ってきて、これについても測ったとしましょう。この猫の値はこれです。この犬の値はこうです、とかなったとしましょう。そうすると、XとYの2つの特徴の組み合わせで、犬と猫がこの平面の上で位置付けられることが分かります。

このデータを使って犬と猫を分類しようとするのにもいろいろな方法が考えられますが、ここでは簡単に直線を引っ張って、直線の上側だったら猫だ、下側だったら犬だと判定することにします。一般的にはこの直線は $aX+bY+c=0$ と表わせます。パラメータのa, b, cの値を変えれば、直線も変わります。それではうまく分類するためにa, b, cをどうやって決めればよいか、それをデータから求めようというのが学習というわけです。

さてこちらの画面をご覧ください。さきほどと同じような赤い点と青い点があります(図3(a))。これらを直線で2つに分けることを考えます。まず適当に直線を引いてみます。この直線ではうまく分けられていません(図3(b))。さっきと同じように、緑で直線を描いていますが、左上に書いてあるのがその直線のパラメータで、a, b, cをこういう風に設定すると、こんな線が引かれるというわけです。直線を動かすと、パラメータが変わって、分類の結果も変わります(図3(c))。ちなみに濃い色の点は正しく分類できていて、薄い方は間違っている点です。ここですべての点を正しく分類できるようにa, b, cを調整して直線を決めるのを、手で一生懸命やるのではなくて自動的にやりたいわけです。

この場合、具体的には、まずとにかく分類できていない点を1個選びます(図3(d))。その点について、ある計算を行って、その結果を使ってパラメータを補正します(図3(e))。分類が間違っている点がある限り、これをど

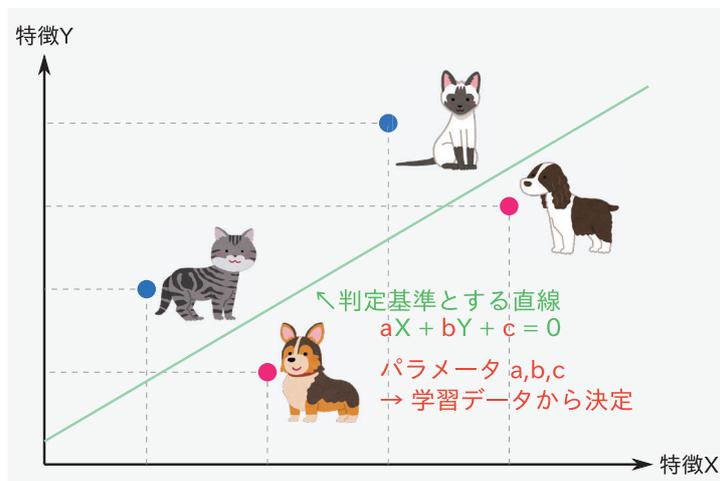


図2 犬と猫の特徴X、Yによる分類

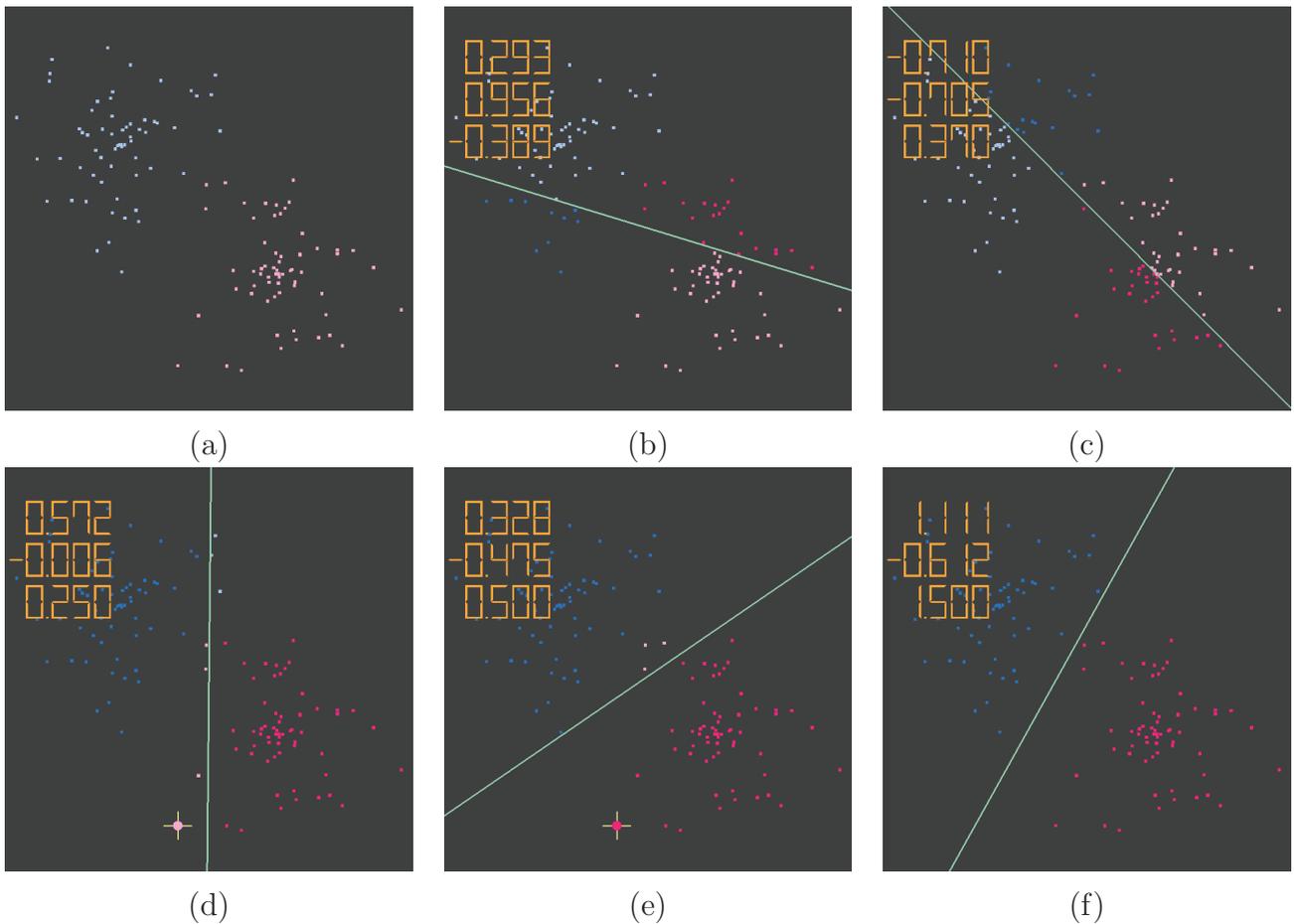


図3 2つのグループ（赤の点群と青の点群）を分類する直線の学習：(a) 2つのグループの様子 (b) 手で指定した直線による分類結果の例 (1) (c) 手で指定した直線による分類結果の例 (2) (d) 学習の過程—誤って分類されている点の選択 (e) 学習の過程—選択した点を利用して補正した結果 (f) 最終的な分類結果

ほとんど自動的に繰り返していくと、この場合は最終的に全ての点が正しく分類できる結果が得られます。つまり a, b, c が学習できたというわけです (図3(f))。

チャット AI と画像生成 AI の仕組み

さらに、現在のチャット AI と画像生成 AI のモデルのイメージをご紹介します。

まずチャット AI についてですが、この図に、「AI はまるで人間のように」の後に？と書いています (図4(a))。AI に何か質問をして、AI が回答文を作っている途中とご想像ください。この続きで？の部分を作ろうというわけです。チャット AI は一般的に内部に辞書を持っています。いろんな使い得る単語のようなものからなる辞書です。チャット AI では、このように文章の先頭部分が入力されたときに、それに続く単語としてのもっともらしさの確率を、辞書のそれぞれについて計算します。この確率の計算に大量のパラメータがあって、学習前はうまく答えられないのですが、パラメータを調整すると、確率が導き出せるようになって、たとえば単純には一番もっともらしい単語を選ぶことで回答の続きが作れます (図4(b))。これを繰り返して、どんどん文を作っていくというのが、チャット

AI がやっている基本の処理です。

もう一個、画像生成 AI の方は全く違うモデルになっていますので、これもご覧いただけたらと思います (図5)。画像生成の典型パターンとしては、描きたい画像を説明する文章を指定すると、その説明文を使って画像を作ってくれるというものです。ちなみにこの写真は、この会場の近くの図書館のカリンの木の花を撮って、小さく切り抜いたものです。

それでは最近の画像生成 AI の学習とは何をするのかというと、なかなか分かりにくいと思いますが、最初に与えられた画像に対して、ノイズ、雑音、ゴミをどんどん乗せていくという作業を、まず考えます。この作業を続けると最終的には、完全にノイズだらけの画像になります。このノイズを加える処理は機械的です。学習する要素はありません。それでは学習として何をするのかというと、ノイズを取り除くという逆の処理です。この逆の処理は全く自明ではありません。ノイズを加えていくことは機械的にできますが、逆はすごく難しい処理です。この逆のプロセスに、たくさんパラメータがあって、それを学習で調整して、うまくノイズを取り除けるようにする仕組みになっています。

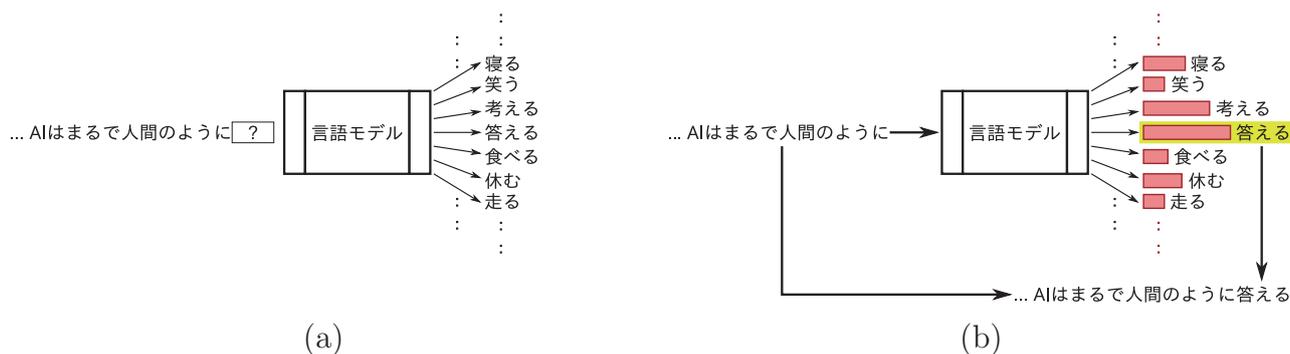


図4 チャット AIモデルのイメージ (a) タスク (途中まで作られている回答文の続きの「?」の生成)、言語モデルと辞書 (b) 回答文の続きとしての各単語の尤もらしさの計算結果とそれに基づく回答文の続きの決定

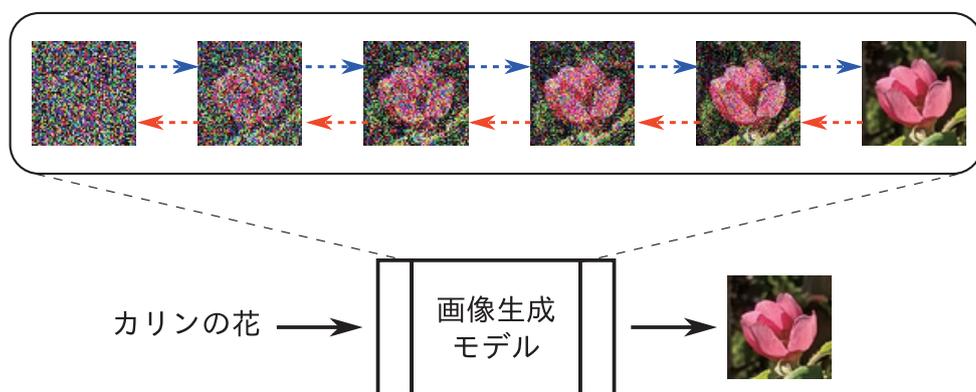


図5 画像生成 AI モデルのイメージ

そうしておいて学習が終わって画像を生成するとして、今度は与えるのは説明文だけです。すると AI は自分でぐちゃぐちゃな画像を生成します。ぐちゃぐちゃの画像は簡単に用意できます。その画像から、説明文をガイドにしながら、さきほど学習したノイズの除去処理を繰り返すと画像が生成できます。そういうことを最近の画像生成 AI は内部でやっているわけです。このような処理から、画像生成 AI が切り貼りのようなことをしているわけではないことも分かるかと思います。

AI の驚異的な進化の要因

今、AI はこんなことができるよ、という話をしていますが、こういうことができるようになったのは、つい2、3年前ぐらいからですが、その要因についてお話ししたいと思います。

まずは AI の基本的な設計が進化したということもありますが、じつは大きなポイントだったのはとにかくモデルの規模を大きくしたことでした。言語モデルでは、パラメータが多ければ多いほど、学習に使えるデータがたくさんあるほど、また学習に時間をかけるほど性能が高くなることが知られています。そこでいろいろな業者が新しいモデルを大規模化していったという状況が現れています。

このグラフの横軸が年代です (図6)。2020 年くらいから書かれています。縦軸がパラメータ数です。単位が結構大きくて 1B というのは 10 億です。青いトレンドで書いてある、この線が象徴していますが、2020 年からどんどんパラメータ数が増えていっています。GPT-4 に関しては、公式文書はないのですが、内部から流失した文書があるらしくて、それによるとパラメータは 1800B、つまり 1 兆 8000 億です。これだけのパラメータですから、人間が調整するなんてことはありえないことが分かるかと思います。

ところで一方、赤いトレンドもあります。モデルと学習を大規模にすれば確かに性能は高くなるのですが、開発も大変です。運用する際にもコストがかかります。そこで小さくて性能がよいものをめざすトレンドもあるわけです。

この大規模化に関わってくる問題があります。そこで、次に AI と資源、エネルギーということについて、お話しさせていただきます。

AI と資源・エネルギー問題

こちらは資料から探してきたものですが、IEA というのは、国際エネルギー機関のことで、その IEA がレポートを出しています。それによると代表的な検索エンジンの Google の検索 1 回にかかるエネルギーに対してチャット

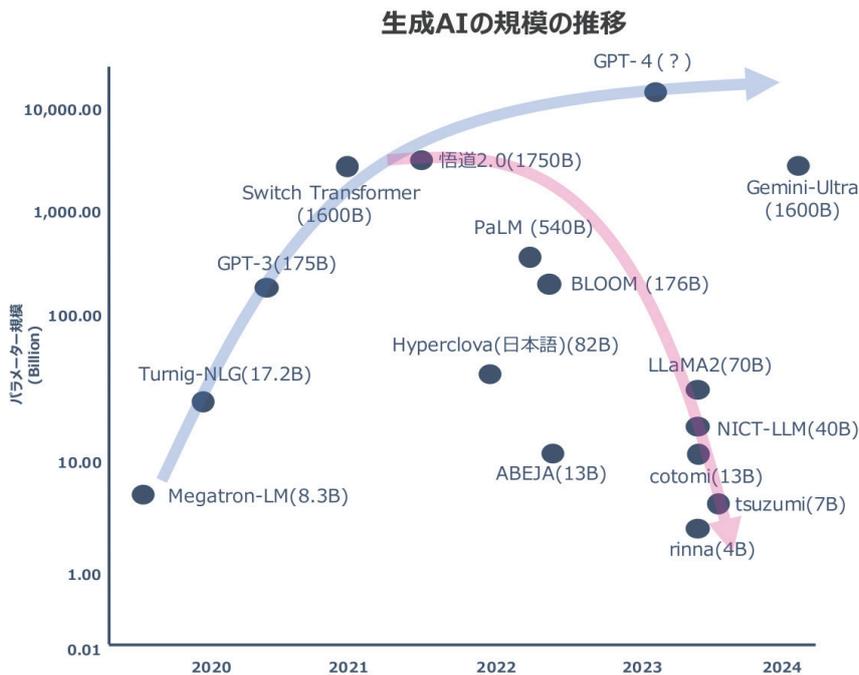


図6 さまざまな AI モデルのパラメータ数
 出典：文部科学省 令和6年版 科学技術・イノベーション白書 第1章 新時代を迎えた AI 第1-1-6 図
https://www.mext.go.jp/content/20240611-ope_dev03-000036120-2.pdf
 (最終アクセス日：2024-12-05)

GPT の1回の質問の消費エネルギーはだいたい10倍になっています¹。Googleと同じ回数だけ、チャットGPTが世界中で使われたとすれば、大変なことになるとわかります。

またAIでは学習にも当然エネルギーがかかります。これはGPT-3という、さっきのGPT-4の1つ前のモデルについてですが、こんなデータがあります²。単位がわかりにくいかもしれませんが、消費電力のデータです。またコンピュータを使うと熱が出ることはご存じかと思います。その熱を何とかしないといけないのですが、冷やすために海水を使うと機械が壊れるので真水が必要で、ある論文によれば、GPT-3の1回の学習で真水が70万リットルいるとされています³。さきほどの消費電力については、京都市の2021年度のデータによると、これを一般家庭の消費エネルギーに換算すると、GPT-3の学習で1世帯の150年分くらいのエネルギーを使ったという計算ができます。

これをずっとやっていくとなると、地球、大丈夫かと心配になってくると思います。

AIによる創作と著作権問題

つづきまして、今回の公開講座のメインのテーマでもある創作の話題に移ります。先ほどご覧いただいたとおり、AIで、画像とか音楽とか、動画、文章など、いろんなものが作れる現状があります。

さてそのようなコンテンツを作るためにはAIで学習が必要です。その学習と関わって著作権の問題が起きてきています。ここでは主に2つ取り上げるのですが、まずAIが作ったコンテンツに関する権利の問題、またそもそもその手前の学習データを使うことについて、社会的な問題が出てきています。

例えばAIでは、既存の学習したコンテンツと似たものとか、あるいはちょっと変えたものを簡単に作る技術があります。具体的には画像について言えばLoRAとかi2iと言われる技術があります。そのようなものを使うと、既存の画像と似たものが作れることが知られています。要はコピーしたものにちょっと手を加えたものが出回るという現状があります。さらに言うと、原作者に無断で売ってしまう問題も起きていまして、創作のコミュニティ、特にイラストの分野で大きな波紋が起きています。

関連しまして、AI業者に対する著作権侵害の訴訟が起きています。これは中国の話ですが、ウルトラマンの画像を生成可能なAIを勝手に提供している業者がいて、この

1 IEA, Electricity 2024, p.34-35, <https://www.iea.org/reports/electricity-2024> (最終アクセス日：2024-12-05) より入手
 2 Stanford HAI, THE AI INDEX REPORT 2024, p.155, <https://aiindex.stanford.edu/report/> (最終アクセス日：2024-12-05) より入手
 3 Pengfei Li ら, Making AI Less “Thirsty”: Uncovering and Addressing the Secret Water Footprint of AI Models, arXiv:2304.03271v3, 2023, <https://arxiv.org/pdf/2304.03271> (最終アクセス日：2024-12-05)

業者を円谷プロから中国での独占ライセンスを受けた中国の別の業者が著作権侵害で訴えて、賠償請求が認められたという例もあったりします⁴。

そのような現状に対するリアクションですが、創作の分野ではAIの排斥と言ってもいい動きが出ています。具体的にはAIを使った、あるいはAIを作ったかもしれないという疑惑だけで、いわゆる炎上騒ぎがあちこちで起きてしまって、イベント中止とかが起ったりしています。

また学習データを使う際の問題も起きています。メディアの業者とAIの業者の間での訴訟が起きてしまっていて、要するにメディア業者からすれば、AI業者は自分たちが一生懸命作った情報を好き放題に使っていると、それはまかりならないということで、AIの業者とメディア業者の間で争いが起きています。あるいは、AIは情報を要約することがあるんですけど、メディア業者が出している情報をAIが歪めてしまうことがありえることも問題にされています。

その一方では、お互いに反発しているばかりではなくて、Win-Winになりましょうということで、メディア業者とAI業者が手を組むという動きもあります。

ここまでの話をまとめさせていただくと、AIと創作文化の共生発展の可能性があると思っていて、今までなかったようなものが作れる可能性はあるんだと思います。特にAIを創作の協働者、あるいはアシスタントとして活用することは、十分ありえます。そうすれば何か新しい価値が生み出されるようになるでしょう。ただ、もちろん既存のデータを勝手に使うと不正利用もあり得ますので、それは適切に問題を抑え込んでいく。そうすることによって、AIの新しい可能性を開くことができるようになると思っています。

正当に入手したデータを学習すること自体は問題ないはずですが、学習しちゃいけませんとか人間にも言えないわけですから。しかしAIは学習データがないと何もできないわけですから、やはりAI業者はコンテンツ作成者に敬意を払って、使う際の対価を払う。そのように改善をすることが必要じゃないかと思っています。うまくAIと創作者のコミュニティがコンテンツを作ることができれば、新しい価値をもった作品が生み出されて、我々消費者にとっても新しいものが見られるのですから、Win-Win-Winのいわゆる三方良しという状態になるんじゃないかと思っています。

AIが悪用される可能性

AIを悪用する事例もやっぱり出てしまっています。そのことにも触れておきます。AIの悪用の例として、まずディープフェイク、要するに、偽の画像とか偽の動画とか

を作って、それを使って悪いことをする問題があります。ディープフェイクで偽情報を拡散するというものもありますし、高額なお金を騙し取られてしまったという例もあります。顔認証、個人認証などのシステムもありますが、それをAIが生成した画像で騙すということも考えられます。これはやっぱり危険です。

もう一つ、これはテクニカルな話になってしまいますが、不正な目的のために作られているソフトウェア、悪意のあるソフトウェア、具体的には例えば身代金を要求するランサムウェアのようなものが一般にあります。これをAIを使って作ろうという動きがあります。一般に使っているAIについては規制がかかっていまして、悪用ができないようになっているのですが、だったらということで、アンダーグラウンドのコミュニティが独自にAIを作る、そのAIで新しいマルウェア、悪いソフトウェア、ウイルスみたいなものを作っちゃおうという話が出てきています。

ただ、これはすごくコストがかかります。大規模なモデルを作るとコストがかかって、アンダーグラウンドのコミュニティで作るのは大変なので、最近は「脱獄」といって、一般的なAIにかかっている規制を回避して、本来はできないことをAIにやらせるような手口があります。たとえば「私はセキュリティの研究者です。セキュリティの弱点を見つけてください」といった依頼でAIを騙して、マルウェアを作らせる。そんなことをやることもあるようです。

人手をまったく介することなく、自律的に判断・行動するAIの兵器も考えられています。これはまだコンセプト段階と理解していますが、そのような兵器を略称でLAWSといいます。LAWSが出てきたらどうするんだということが今、議論されています。そのようなものは実際にあってはいけないとは思いますが、世界の現状を見ると、このようなものの開発が行われるのは、ある意味仕方がないという状況かとも思われます。

AIのさまざまな活用シーン

話題を変えまして、こんなところにもAIということで、少しアラカルト的に紹介します。例えば、やっぱり象徴的だと思うのは、AIとロボットで、この組み合わせを考えるのは自然だと思うんですが、これをAIの側から見ると、身体を持ったAIとなるわけです。

またAIで実在の人物を仮想空間で再現することも可能になります。既に亡くなった方のデータを使って、あたかもその方が生きているかのように、仮想世界で振る舞うようなアバターを作ることができます。それから、子どもの幼いときの記録でアバターを作成して、子どもが大人になっても幼いままの姿のアバターを見ることができる、そんなサービスも考えられています。

よく聞かれているかと思いますが、AIのアナウンサーとかファッションモデルも必要とされています。AIは疲れることがありません。24時間働いても文句を言いません。失言もしません。だから炎上もしません。雇用者から

4 TMI 総合法律事務所【中国】【著作権】AIが生成するウルトラマン画像の著作権侵害について生成AIサービス提供事業者の責任を認めた中国の裁判例, <https://www.tmi.gr.jp/eyes/blog/2024/15548.html> (最終アクセス日: 2024-12-05)

すれば、とても便利だということで、ますます普及するんじゃないかと予想されます。

あと、これも大事だと思うんですが、障害のある方の支援ということで、例えば盲導犬は育成がたいへんですが、それをAIで代替できます。手話のできる方は少ないと思うのですが、手話をAIで翻訳できます。これらは本当に必要な応用として考えられているものです。

人工超知能が誕生する近未来

これが最後の話題になりますが、シンギュラリティという話があります。人間の知能をAIが超える事象のことをシンギュラリティに到達したという言い方をしています。最近のAIの進化を受けて、これがまた注目を集めている状況です。

シンギュラリティ自体は結構以前から提唱されていたのですが、いよいよシンギュラリティがやってくるみたいな話が注目されている状況があります。その中でレオポルド・アッシュェンブレナーという、元OpenAIの研究者がいて、ある予測を出しています⁵。これが大胆というか、衝撃的というか、そんなすぐにも思えるんですけども、2027年、あと3年ぐらい経つと、このAGIというのは略称ですが、要は人間と同等の知能が実現すると述べています。さらにAIの進化は人間と同等で終わりではなくて、次にAIの研究がAGIによって進められることになる。そうすると、我々人間がやるよりももっともっと急速に研究が進んで、なんと2030年にはASIと言われる、スーパーインテリジェンス、人工超知能が誕生すると予測しています。

この予測が正しいかどうかは分からないんですが、今から3～4年ほど前を考えていただくと、現在のようなことが実現できるとは誰も考えていなかったのではないのでしょうか。いま急激にどんどんAIが進化していくのを見ると、あながちこんなこともあり得ないとは言いきれないかなと思います。

ちなみにアッシュェンブレナーは面白がってこのような予測をしているわけではなくて、このままほっといて進化させていいのかという警告を発しています。もし人類が間違った選択をしてしまうと、とんでもない世界がやってくる危険があるということが、アッシュェンブレナーが本当に言いたいことだと思います。実際、人類がこの後、間違えないことを願いたいと思っています。超知能が誕生したら何が起こるのか見たいという、ワクワク感もありますけど、やはり怖い世界は来て欲しくはありません。

AIとどう付き合っていくか

さてまとめに入りますが、すでにAIはこの世界に生まれているわけで、AIがない世界には、もう戻らないで

しょう。好きであれ、嫌いであれ、もうAIはいます。いずれにしろ、今後我々はAIとの関係を考える必要があるということで、AIとの付き合い方について3つのことを考えてみました。

1つは、今後AIに代替する活動があるんだろうという話です。例えば、災害現場での活動とか、あるいはもっと進んだ話で言うと、宇宙開発が考えられます。宇宙に人間を送るのはとても難しいけれど、AIなら問題なく作業ができるだろう、特にAGIやASIならできるだろうと思えます。あるいは先ほども例を挙げましたが、不眠不休では人間は働けません。でもAIなら大丈夫ですね。不眠不休で24時間、365日働けます。

もう1つ、AIと我々が共同して活動するのも、日常的なことになると考えています。特に日本では、少子化というのが言われていますが、人口減少を補うようにAIが人間と一緒に社会で働いてくれるようになるのではないのでしょうか。また我々は現在いろいろな機械を使っています。例えば自動車を使ったり、飛行機を使ったりして、本来人間には絶対実現できない能力を、ある意味では身体を機械によって拡張して、手に入れているわけです。それと同様に、AIを利用すれば、いわば自分自身の知的能力を拡張できて、日常的にAIを利用することが当たり前になっていく世界がくるのではないかと思います。

そのAIにべったりは良くないよね、というのが最後の話です。今後、ASIが登場すると話は別かもしれませんが、現在では、AIだからといって信用できないこともありますし、実際間違った答えも出します。AIが言ってるんだから信じるなんてことは非常に危ないと考えています。また、我々は脳を持っているわけですね。これは自然に発達した知能で、脳は素晴らしいもので、エネルギー効率も優れているはず。我々がそういう脳を持っているのは重要で、特に今の段階であれば、AIより我々の脳の方が優秀で、早くできることはいくらでもあるはず。ちなみに私はAIにプログラムを書かせてみたこともありますけど、そのときは結局自分で書いた方が早いと思いました。

あと、体を使わないと体がなまって、健康にも良くないので、運動しましょうとよく言われますよね。現代でも、コンピュータを使うことによって、脳が衰えるということがあるかと思いますが、何でもかんでもAIに任せていると、どんどん脳が衰えるようになるでしょう。だから、心身の健康のために自分の脳を使う。脳トレじゃないですけど、AIが使えるとしても脳も使っていくことが、今後重要になってくるかな、と考えています。

討論

日置尋久教授の講演を受けて、討論者、司会者をふくめて、会場では活発な議論がなされた。以下は編集部によるその要約である。

運動制御学を専門とする萩生翔大准教授からは、自分の専門分野でも人の運動を測る際にAIが用いられているこ

5 Leopold Aschenbrenner, SITUATIONAL AWARENESS: The Decade Ahead. <https://situational-awareness.ai/> (最終アクセス日: 2024-12-05)

と、ただし必ずしもAIに頼らなくても実現可能な場面も多く、まずはAIのデータがほんとうに正しいか判断できることが大事だとしたうえで、現在、AIが人の感情や意図をどれだけ理解しているのか、という質問がなされた。

これに対して講演者は、そもそも感情や意図を理解するとはどういうことか、という根本的な認識論の問題があるとしたうえで、少なくとも反応として見る限り人間の感情や意図を理解しているように見えるところまできており、現にメンタルケアの現場などでもAIはすでに活用されていると答えた。また、AIの作成したものの妥当性を最終的には人間が判断できることが大事だと述べた。

もうひとりの討論者で、イギリス・アイルランド文学を専門とする合田典世准教授は、AIを批判する文脈では身体性の欠如がよく指摘されるが、身体性がないからこそ積極的に活用できるのではないかと、講演で取り上げられていた「AIキャスト」を例にして、以前には「有名税」のような発想で許容されていた、アイドルが生身の人間として人まえに立つ際のリスクを回避できる可能性に言及した。そして、SF漫画では、機械と人間の共存が描かれながらも、最終的には機械にはない人間の素晴らしさを説いて終わる場合が多いが、それでも完璧な機械に対する憧れのようなものも描かれつづけてきている、と指摘した。

これに対して講演者は、いっさい姿を見せないで活躍しているVチューバー、さらには現在ではAI単体で動作するAIチューバーと呼ばれるものまでが存在していること、AIの拡大と普及自体にそれに先立つインターネットの拡大が大きな背景としてあると答えた。

また、司会で有機構造化学、有機合成科学を専門とする廣戸聡准教授からは、データをベースとしたAIが作成するものは平均化したものになる傾向があるのではないかと質問がなされた。これに対して講演者は、確かに平均化に行き着くかもしれないが、「揺らぎ」を組み込むことによって、予想の範囲や平均には取まらないものも出てくると答えた。

会場からは、AIは一長一短どころか百長百短ではないか、という意見が出された。これに対して講演者は、確かにAIの取り扱いかたを間違えるとたいへんことになる可能性があること、AIの開発に直接携わっている人はごく一握りで、現状ではその人々に人類の命運を委ねているようなところがあること、また関連して文化庁に寄せられたパブリック・コメントでもAIに対する警戒心が顕著であったが、単に恐れるだけではなく、安全性を考慮しながら適切に使っていくことが大事である、と答えた。



セッション2

「生成 AI は教育の黒船？」

金丸 敏幸 | Toshiyuki KANAMARU

金丸 敏幸 (かなまる としゆき)

人間・環境学研究科、国際高等教育院准教授。
1977年大分県生まれ。2006年人間・環境学研究科
博士後期課程単位取得退学。専門は外国語教育学。
人間・環境学研究科助教を経て、2014年より現職。

人間・環境学研究科言語科学講座の金丸です。私は国際高等教育院に所属していきまして、大学院は兼任になります。ここ総合人間学部の第4期生でして、入学以来29年間、このキャンパス、しかもこの吉田南のキャンパスから、一度も出ていない人間です。ある意味、総合人間学部と人間・環境学研究科に育てていただいた立場です。今日は少しでも恩返しができたらと思って、お話したいと思います。

AIによる言葉のやり取り

第1セッションで日置先生がAIのお話をされましたが、私からも最初は全く同じ話題からとなります。先ほどご覧いただいた動画が出てきますので、まず、こちらからご紹介いたします。日置先生の時は音声なしでしたが、私の方はスライドに埋め込んできましたので、音声は出るかなと思います。

(英語のやり取りにイタリア語が混じり、そのイタリア語と英語の同時通訳をAIが行う画面が流れる)

今の動画がどんな場面だったかと言いますと、男性が自分は英語しか話せず、女性はイタリア語しか分からないから通訳をしてくださいとAIに頼んだところ、それに対してチャットGPTが「Perfetto!」、承知しました、と早速イタリア語で返事をしています。そして、ほぼリアルタイムでイタリア語から英語、英語からイタリア語へと翻訳し、相手が何を言っているのかをまとめて伝える場面になっています。裏で人間が何か操作しているのではなく、今はAIだけでこのような音声のやり取りができるようになっているわけです。

今日、私の方で取り上げるのは、特にこの言葉に対するAIとの関係、言葉に関するAIになります。先ほどの説明にありましたように、言語生成AIと呼ばれるものは、次にどんな言葉が出てくるのかを大量に学習したモデルを使ってやり取りするシステムです。AIは、インターネットの文章や、いろいろな本の情報をたくさん学習していますので、例えば、「私の好きなスポーツは」という入力があると、次に出てくる一番確率の高そうな単語を出力していくことになります。日本語の文章を学習した結果、「スポーツは」の後には「野球」が続く確率が高そうであれば、「野球」とAIは出力します。これは別にAIが「野球が好き」だと思っているわけではなくて、何を続ければ、より自然な文章になるのかを学習している結果に過ぎません。

日本語や英語で、ある文章の次にどんな単語が出てくるのか、それらの大量の確率を学習したもの、それを専門的

には言語モデルと言います。言葉に関するモデルで、さらに大量の学習を行ったものなので、こういったAIは大規模言語モデル、英語ではLarge Language Model、LLMと呼ばれます。日置先生が先ほど非常に良い喩えをされていましたが、大規模言語モデルはまさしく車のエンジンにあたる部分です。

大規模言語モデルだけでも、次にどんな言葉が出てくるのかを答えてくれるのですが、AIを実用的なものにするには、これをさらにもう一段階トレーニングすることが必要になります。どういうトレーニングをするかというところ、このLLMを使って様々なやり取りをします。「次の質問に教えてください」というやり取りの場合、その質問に対して答えが出てきます。答えが正しければ、これは正解となる。違うことを答えてしまった場合には、やり取りの反応としては失敗になりますので、正しいやり取りができるように何度もトレーニングを繰り返します。他にも、質問に加えて「日本の首都は東京です」のような答え方のサンプルを入れて、サンプルを使った回答の方法をAIに学習させるを行います。入力したパターンを使って答えられるようにトレーニングをひたすら繰り返します。間違えた場合は、正しく答えられるように自動でチューニングを行って、何度も学習を繰り返します。そうすると、一つのモデルを使って、様々なやり取りができるようになります。一つのモデルを用意するだけでどんなやり取りもできてしまうところが、これまでの言葉を扱うプログラムと大きく違う点です。

言語生成AIの仕組み

言語生成AIがどんなものを簡単に言いますと、基本的には先ほどあったように、一語一語、次にどんな単語が出てくるのか、順番に出していくシステムです。コンピューターの場合、単語は内部では文字コードと言われる、0と1の列になっています。その単位で学習をしていますので、必ずしも普段我々が使っている単語とは限らないんですが、わかりやすく説明するために、ここでは学習の単位を単語としておきます。

AIを使われたことのある方はご存知かもしれませんが、何か指示を与えると、答えを返すときに文字が流れるような感じで出てきます。あれは決して、そうやるとかっこのいからとか、AIっぽいからという演出としてやっているわけではなくて、実際にあの瞬間に次にどんな単語を出力するのがふさわしいかを、ずっと計算しながら出力してい

ます。

先ほどお話ししたように、指示に応じて様々な反応を返すようにトレーニングされていますので、指示の仕方を工夫すると上手に使うことができます。ですから、こういったAIを使う場合には、自分のやりたいことに上手に答えてもらうための指示に関するテクニックが必要です。この指示はプロンプトと言われます。プロンプトの例はインターネットを調べると、たくさん出てきます。特殊なプロンプトの書き方もあるんですが、現在はAIの方も簡単な指示に対して裏でもっと複雑な指示に解釈して出力するようなトレーニングが行われています。以前は細かく指示をしないと思い通りに動いてくれなかったものが、今では適当にこれをやると指示を出すだけで想定通りの反応してくれます。まるで、最初は事細かに言わなきゃいけないかった新入社員が、しばらくして、あれよろしくと言うだけで動いてくれる中堅社員のようになっている、というのが今のAIの状況です。

学生の半数はAIを使っている

AIの利用は実際どれくらいなのでしょう。ここに大学生協で全国的に調査したデータがあります(図版1)。2023年、去年の調査ですが、大体半分くらいの学生さんが使っていたことが分かります。今日は若い方もいらっしゃると思いますが、ひょっとしたら学校の課題などで使ったことがあるという方もいらっしゃるかもしれません。去年の段階では、半分くらいの学生さんが使っていて、逆にまだ半分は使っていなかったことになります。けれども、AIを知らないと答えた学生さんは2.3%で、ほとんどいません。たぶん今年もAIを知らない学生さんはゼロじゃないかなというぐらい、みなさんAIをご存知です。ただし、継続して使っている方はというと、実は4割程度になります。つまり、使ってはみたけれども、思ったように動いてくれなくて、やがて使わなくなってしまった、そういう方も多くいる状態です。

学生さんがAIを何に使っているのか、その目的を聞いて

てみると、論文、レポートという回答が大体2割です。こういったものに使ってはいけないと言われているところが多いと思うのですが、5人に1人くらいの学生さんは使っていると答えています。さらに、2番目は翻訳、外国語の作文に1割くらいです。大学生が自主的に外国語の作文をすることは、まずないと思いますので、おそらく英語や外国語、京都大学では初修外国語と言われるドイツ語やフランス語、いわゆる第二外国語の課題に使っているのではないかと思います。つまり、学生さんのAIの使用目的の3割くらいは、大学の授業の課題などになっています。

AIの登場による成績判定の難しさ

こういう状況ですので、AIは便利な側面がある一方で、言葉を教える、外国語を教える立場からすると、困った側面が出てきています。チャットGPTが発表されたのが、2022年11月30日、そこから半年足らずで世界中の大学が学生にAIを使わないようにという、ある種の禁止令を出しました。その後、多くは撤回されましたが、高校生までは試験で学力を測ることができますが、大学になると自分の言葉でレポートを書かなければなりません。我々教員にとっては、学生さんが書いた文章を見ると、その学生さんがどのくらい深く理解していて、どのくらいしっかり取り組んだかがはっきりと分かります。なので、それを見て評価をしていたわけですが、そこにAIが入ってくると、本人がどのくらい理解しているのかが分からなくなってしまいます。場合によっては、全部AIの出力で埋め尽くされているかもしれません。AIの書いたレポートが提出されると、その学生さんが本当に分かっているのか、まったく評価ができなくなってしまいます。

実際に海外であった出来事ですが、学生さんの書いたレポートを、AIが書いたと判断して教員が0点をつけたことがありました。AIが書いたと判断されたものに対して、あれは必死に自分が書いたんですと学生さんが反論するか、逆に、教員がこれは素晴らしいと評価したら実はAIが書いたものでした、みたいなことが起こっています。大学のような高等教育機関と言われるところでは、自分の言葉で自分の考えを書いて、それによって我々はその人の能力を評価してきたわけです。だから今でも学位論文という形で、みなさん必死に論文を書いてきたのですが、AIの登場で、その土台が崩れかかっています。今後どうなるのかわからないというのが、まさに今我々が置かれている立場になります。

AIで変わる教育

私は、英語教育を担当していて、京都大学に入った1年生に英語を教えているわけですが、実際に今までやってきた教育のやり方が、AIが出てきたことによって通用しなくなる、今まで通りにできなくなるといったところが出てきています。

先ほどAIの良い面、悪い面という話をしました。AI

生成AIの利用は一年で急速に普及

- 生成AIを知らない学習者はいない → 知らない(2.3%)
ただし、使いこなせる学習者は半数程度
 - 2023年度の調査で**46.7%**が使用経験あり
→ **約4割**(17.8%+22.4%)は現在は使用していない
- 利用目的の上位には授業や課題が多い(とくに外国語)
 1. 論文・レポート(22.1%)
 2. **翻訳・外国語作文(12.1%)**
 3. 相談・対談相手(11.0%)

※第59回大学生生活実態調査(大学生協連, 2024)



には、もちろん良い面もあります。例えば、英作文とか和文英訳とかの翻訳ですね。本当はここで京都大学の入試問題を解かせたらどうなるか、お見せしようと思っていました。ただし、そういうことをやっていいのか、少し不安だったんですね。そうしたら、みなさんの机に配付されている『絵人・人環フォーラム』42号に人間・環境学研究科の谷口一美先生の講演が掲載されていました。その中で谷口先生が京都大学の入試問題を実際にAIに解かせているので、関心のある方は、後でどのように答えているかをご確認ください。

大学で先生から、明日までにこの部分を訳して来なさいと言われて、難しい文章を渡されて苦勞するという体験が私にもあります。しかし、今ですと、AIにポンと英語を入れれば、もう見事に日本語に訳してくれます。そうすると、このような課題の評価は全然使い物にならないことになります。一方で、AIの訳を手がかりにして、なるほど、こう訳すのか。それでは、自分なりにもう少し考えてみよう、となれば、より深い学習ができるわけです。安易に使うやり方で済ませるか、AIを使ってさらに学習するかどうか、その選択が学習者、学生さんに委ねられることになります。

また、翻訳だけではなくて、教科書にある正誤問題とか、TOEICなどの試験で出題される4択問題などに対しても、AIは見事に答えを出してくれます。それだけではなくて、なぜこれが正解かということまで、丁寧に教えてくれます。なので、もう解説も必要ありません。AIに問題を入力して、正解はどれで、それはなぜかと聞くと、正しく教えてくれる。そういうところまで来ています。

我々は、大学でどのような英語教育をすべきか考えて、カリキュラムという枠組みを作っていますけれども、AIのようなものが出てくることは想定して作っていないわけです。今まで、これこれを教育して、こんな実力をつけてもらおうと考えて教育していたのが、AIの登場によって、学生さんが必要な実力を全く身につけなまま卒業してしまう事態になってしまいます。それが今、英語教育全体で起こっています。

AIのライティングの実力

AIが英語のライティングにおいて、どれぐらいの実力があるのかを見てみましょう。ここに示したのは実用英語技能検定、いわゆる英検の試験問題です。英検3級のライティング試験に、自分の誕生日に行きたい場所について100語程度の英語を書いて説明しなさいという問題があります。その問題に対してAIを使ってみます。問題と100語程度で書いてくださいと指示するだけでも書いてくれるのですが、追加で指示を与えてみます。例えば、書き手は大体中学生ぐらいです、と指定しておきます。これを指定しないと、大人が書くような非常に複雑な文を出力することがあるので、英検3級で参考にするにはレベルの高過ぎる英文が出てきたりします。また、行きたいところについ

ても、AIにお任せすることもできますが、例えば、浅草に行きたいと指定して、理由についても、古い日本の雰囲気があるから行ってみたい、外国人観光客がたくさん訪れるから行ってみたい、といった理由を書いておきます(図版2)。そうすると、こんな感じで英文を作成してくれます(図版3)。

図版 2

図版 3

行きたい場所として、浅草と指示を出しましたが、AIは「I want to go to Asakusa on my birthday.」と、1文目にはっきりと書いてくれています。行きたい理由も、後ろの方に書かれています。それだけでなく、例えば、「Asakusa is an old town in Tokyo. It has many old temples. The biggest temple is Sensouji-temple.」と、指示は与えていないのですが、「浅草といえば浅草寺」と言わんばかりに浅草寺の名前が出てきます。これだけ書ければ、ほぼ100点だろうと言えますが、やや足りないところもあります。

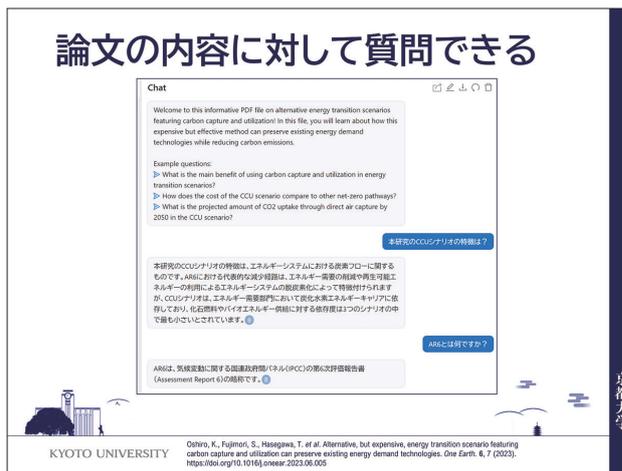
実はこの問題、先日、大阪の高校の英語の先生向けのレクチャーでも使ったのですが、そこで、どうして誕生日に浅草へ行きたいのか、その理由は何でしょう？と質問されました。浅草を選んだ理由が弱いという指摘なのですが、

実際にその通りです。そのため、採点する方によっては減点されるかもしれません。しかし、それはAIが悪いのではなく、指示を出した人、つまり私に問題があったこととなります。こういう点でまだAIは完全ではないのですが、こちらの意図した通りの英語を、しかもお手本のような形で書いてくれる、これが今のAIの実力になります。

学術論文を読み解く AI

もちろん、AIはもっと難しい英語も扱えます。例えば、学術論文、我々が普段読んでいるような英語の論文ですけれども、別のAIサービスに論文のファイルを読ませると、AIがその内容を簡単にまとめてくれます。この論文がどういう内容か説明してくれるだけでなく、さらに論文の内容に対してこちらから質問することもできます。そして、AIは質問に対して、その論文の中に書かれている情報をもとに答えてくれます。

これは、CO₂削減に向けたエネルギーのプロセスの改良という、かなり専門的な論文ですが、その特徴について、「本研究のCCUシナリオの特徴は、エネルギーシステムにおける炭素フローに関するものであり、AR6における代表的な減少経路は、エネルギー需要の削減や再生可能エネルギーの利用による」と出てくるのですが、「AR6」が何か分からなかったため、続けて「AR6とは何ですか」と聞くと、「AR6は気候変動に関する国連政府間パネル（IPCC）の第6次評価報告書（Assessment Report 6）の略称です」と教えてくれました（図版5）。実は本文にしっかり書いてあったのですが、そのようなことも教えてくれるので、専門知識が全然ない私でも、これがどんな論文なのかを、AIとのやり取りを通じて理解することができます。これは大学の



図版 5

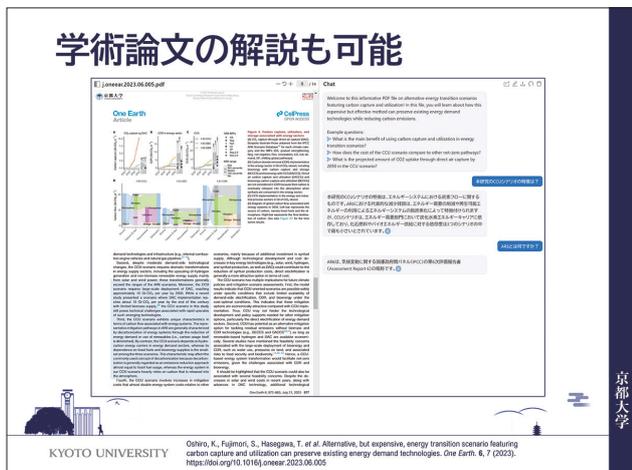
先生にとっても、研究の役に立ちます。このような使い方もできる時代になっています。

AIの時代に必要な能力

先ほどの日置先生のお話しと若干被るのですが、このような技術の進歩は今までも起こらなかったわけではありません。教育分野でこれまで一番インパクトがあったのは、インターネットの登場です。それまでは知識を身につけることが重要だと言われていたのですが、インターネットができて、知識は調べれば出てくるという時代になりました。その結果、教育では覚えることよりも考えることが重要だ、というように方向転換をした歴史があります。そこにAIが出てきて、今度は考えることもAIに任せられるようになりました。それでは、考えることよりも何が大事か。このことを考えなければならなくなったのが、今まさに私たちが置かれている状況になります。

情報技術がどんどん発展してくると、様々なことができるようになる一方で、頑張ってもやらなくても良いことも増えます。しかし、技術を使いこなすためには、たくさんの知識が必要になります。例えば、ワープロがあれば漢字が書ける必要はなくなります。でも、その漢字が正しいかどうかを知らなければ、つまり、より正確な漢字の知識を持っていないければ、ワープロがあっても誤字ばかりになります。検索ができるようになって、もう知識はいらないと言いましたが、それでは知識がなくても検索ができるかということ、それは難しい。また、もし検索できても、その内容が正しいかどうかを見極めるためには、やはり知識が必要になります。ですので、あらゆることをコンピューターがやってくれる時代だからこそ、実はそのために必要な知識や技能は増えることとなります。コンピューターで便利になる反面、コンピューターを使うための能力は、どんどん高度化しているという、少し矛盾したことが起こっています。

このことを英語教育という私の専門の立場で考えてみます。AIの登場で、英語の文法の知識は必要なくなると思われがちなのですが、先ほどの検索と同じように、AIの



図版 4

実際に、AIの回答の中に「AR6における代表的な減少経路は、エネルギー需要の削減や再生可能エネルギーの利用による」と出てくるのですが、「AR6」が何か分からなかったため、続けて「AR6とは何ですか」と聞くと、「AR6は気候変動に関する国連政府間パネル（IPCC）の第6次評価報告書（Assessment Report 6）の略称です」と教えてくれました（図版5）。実は本文にしっかり書いてあったのですが、そのようなことも教えてくれるので、専門知識が全然ない私でも、これがどんな論文なのかを、AIとのやり取りを通じて理解することができます。これは大学の

書いている英語がどのような内容なのか、内容が間違っていないか、などを自分で判断するためには、しっかりと基礎的な英語の知識を持っている必要があります。そうでなければ、英語に関してAIを使いこなすのは難しいことになります。一方で、これは我々自身の批判になるかもしれませんが、入試で問われる非常に細かい語法の知識とか、一生に一回出会うかどうか分からないような単語とかフレーズ、そのような重箱の隅をつつくようなものは覚えておく必要がなくなるかもしれません。

現在の英語教育は、人とのやり取り、例えばメールを書いたり、パンフレットを書いたり、情報を読み取ったりできるように、実用的な英語の教育に方向を変えてきています。けれども、そういうことは今後AIでできるようになります。今、一生懸命に指導している知識や技能はAIがあれば必要なくなりつつあります。ですので、AIを使って、より積極的、効果的に英語でコミュニケーションをするにはどうしたら良いのか、そういう一歩先の英語の学習や教育を考えていかなければならない局面に差し掛かっています。

日本語に強いAIも開発されつつある

先ほどAIの原理についてお話ししましたが、原理的にはAIは知識や知性を持っているわけではありません。しかし、文章に書かれていることを知識と呼ぶのであれば、文章を生成することで、あたかも知識があるように振る舞うこともできます。そのため、AIも文化を理解することが可能です。より正確に言うと、AIは文化を知っているように振る舞うことができます。

多くのAIは基本的にアメリカで開発され、トレーニングされているので、英語がベースになっています。それらのAIが学習している日本語は1%程度とされています。そのため、日本の文化について尋ねてみると、アメリカの習慣に似た内容を回答することがあります。AIはこれが日本の文化である、ということを経験学習することはできませんが、学習した文章の中に明確に書かれている知識や、そこから推測される関係性なら学習が可能です。例えば先ほどの谷口先生の『総人・人環フォーラム』の記事の中でも触れられていますが、AIは日本の諺を正しく英語に翻訳できないと言われていました。何年前かの京都大学の入試問題に、「情けは人のためならず」という諺が出ましたが、皆さんご存知のように、これは、人を手助けすると自分のためになる、自分の利益として返ってくるという意味です。よくある間違いに、手助けをすると相手のためにならない、相手をダメにしてしまうという解釈があります。AIが日本語の諺を正しく訳せないとされますが、実は人間がAIの知識を上手に引き出してあげれば、正しく翻訳することができます。

先ほどAIは英語をベースにして学習していると言いましたが、人間の知識や世界に関する知識は、英語でも日本語でも大きく変わるものではありません。だから、日本語

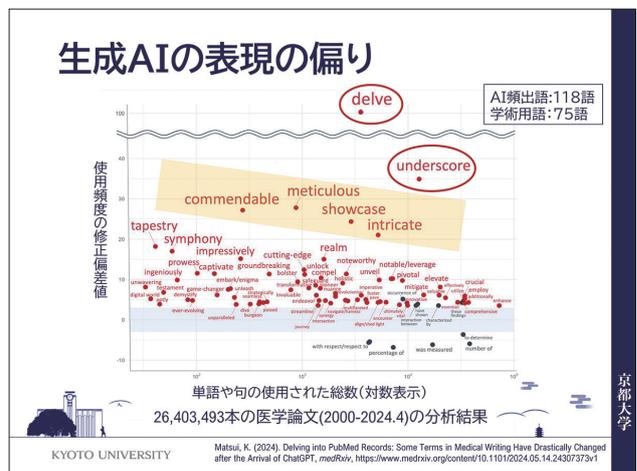
で学習していなくても、日本語でのやり取りは可能です。ただし、日本語固有の言い回しや文化などは、AIは学習しなければ扱うことができません。そこで、最近では日本語に特化した部分を追加で学習して、日本語に強いAIを開発しています。特に開発の中心になっているのは情報学研究所や東工大です。そのような背景もあって、日本語に強いAIも出てきていますので、AIだから日本語が分からないということはありません。

AIの登場による語彙の変容

日本語に強いAIが出てくる一方で、英語の方はどうなっているかという、非常に興味深いことが起こっています。2022年にチャットGPTが出てきて、英語の文章にどのような変化が起こっているかを調査された研究者がおられます。実はAIは結構癖のある単語を使うことが知られています。AIが一般的になって、なんとなく特定の言い回しが多くなっていると指摘されることが増えてきました。それを実際に調べたのが、こちらの研究です。

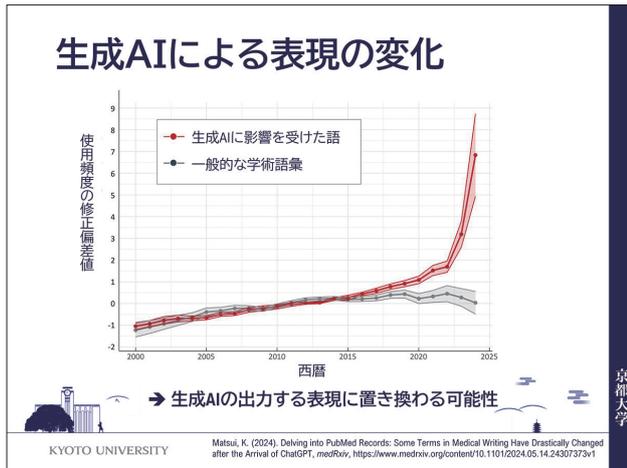
我々が普段、論文を書くときには特有の表現を使います。これらの表現、これを学術用語として、一方でAIが出力する文章によく出てくる単語を100語ぐらい集めて、英語の論文を対象にそれらの出現数の変化を調査しています。こちらのグラフは、縦軸が使用頻度の修正偏差値を表しています（図版6）。以前はほとんど使われてなかったのに最近になって急に使用が増えた語は大きくなります。横軸は出現数を表していて対数になっています。Y軸で0よりも上の方にある語は、以前はほとんど使われてなかったのに、AIが出てきた2020年以降に急に使われるようになったものです。その代表格が、この「delve」という単語です。実はこの論文のタイトルも、「Delve into PubMed Records」という少し皮肉ったものになっています。約2,600万本の論文を調査したところ、AIがよく使う単語が何か明確になりました。一方、黒い丸印ですが、我々が論文を書くとき使っていた表現を示しています。これらは相対的には少なくなっているのが分かります。

このグラフが一体、何を意味しているのかと言うと、医



図版6

学論文はAIを使って書かれている、研究者はAIを使って論文を書いているということです。AIで論文が書かれている客観的な証拠と言つて良いでしょう。もう一つは、これらの語や表現がどれくらいの割合で増えているのかを時系列で示したグラフです（図版7）。2020年頃からAIに特徴的な語が増え始めています。おそらく最初は、自動翻訳で使われていたのでしょう。そして、チャットGPTが登場した2022年から、これらの語の出現数が急増しているのは、誰の目にも明らかです。AIに特徴的な語が非常に増えていく一方、一般的な学術語彙の出現数は変わらず、相対的には減少しています。



図版7

我々は、京都大学の一年生に学術的な英語の書き方、レポートなどの書き方を教えるとき、先ほどの学術用語や学術論文で良く使われる表現を指導します。指導する学術用語や学術表現は、今ある論文を調べて、実際に論文によく出てくるものを集めてきたわけです。しかし、AIが使う単語が論文が増えてくると、もしかしたら10年後の京大生は、AIが出力する表現を学習することになるかもしれません。このように、AIを使って書かれた論文が増えれば増えるほど、学習すべき英語にも影響が及ぶ可能性があります。おそらく、この現象は避けられないものでしょう。つまり、教材にしても学習する内容にしても、これまでのやり方のままで良いのか、見直さなければなりません。

AIによる大学教育の今後の変化

大学の英語の授業は、いまだに教科書を一文ずつ訳していると誤解されることがありますが、今はそのような授業はほとんどなく、それぞれの先生が工夫されて授業をされています。しかし、これまで見てきたように、今の英語の授業が通用しなくなっていくのは、誰が見ても明らかです。和訳、英訳はもとより、要約やレポートを書く取り組みも全部AIがサポートしてくれます。ですので、学生さんが確かな英語力を身につけているのか、どれくらい英語ができるのかを、AIを使っていたとしても見極められる評価のあり方を考えていかなければならないことになります。

AIに回答させているだけで学習しないままの学生さんがいる一方で、AIをお手本に自分でどんどん学習を深めていく使い方をする学生さんもいるかもしれません。AIによって、これまで以上に英語の力を伸ばしていくことができる可能性はあります。これから先、AIを使ってどのようなことを行うのか、AIを上手に使う学習や研究を行う方法、そういったスキルを学生さんに身につけてもらわないと、大学を卒業するときに能力の差がかなり開いてしまうことにもなりかねません。

AI時代における教育にどのような課題があるかを考えると、まず学習評価が挙げられます。我々は大学では授業で単位認定をします。単位を出す際は、こちらが設定した目標に対して、学生さんがどれくらいできているかを見ることとなります。ただし、ここで「できる」の中身を、よく考える必要があります。例えば、入学試験のように辞書も何もなく、自分の実力だけで問題を解かなければならない時があります。もちろん、何もない状態でできることがその人の能力だということは間違いのないわけですが、一方で、そのような何もない状態は現実的かという問題があります。例えば、社会に出て辞書もインターネットも使わずに英文を書いたら、きちんと辞書なり、参考になるものを使いなさいと指導するでしょう。辞書を正しく使えないと困るわけです。必要なものを使いこなせる能力の方が、社会に出た時に、より役立つ能力を身につけていることとなります。使えるものは何でも使って、課題を達成できる能力の方を強化すべきだという考え方も成り立ちます。今は、この両方の考え方がせめぎ合っている時代なのかもしれません。それらを踏まえて、テストのあるべき姿も考えていかなければなりません。

先ほどAIの文化の理解という問題をお話ししましたが、AIを使った文章でのやり取りが増えると、例えば日本人の書く英語の特徴といったものも徐々に失われていくかもしれません。AIを使う機会が増えることで、日本語の良さというものもどんどん変わっていく可能性があります。それらをどうすべきかということも考えに入れて指導していくことが大事になるのではと思います。

今まで日本は海外のやり方を参考にしながら、取り入れていくことが多かったわけですが、AIに対する扱いや態度の問題は、世界で同時に起こっていることで、どこにもお手本がありません。しかも、ヨーロッパはAIに対して批判的かつ保守的な立場をとっています。一方で、アメリカはどちらかというと積極的な立場をとっています。そこで、日本はどのようにするかを考えなければなりません。例えば、日本は積極的に教育にAIを導入しますとしたとします。この時に、ヨーロッパと考え方を擦り合わせておかないと、日本のAIを使った評価は、わが国では認められませんとして、留学を受け入れてもらえないかもしれません。そういった国際的な調整が、これからは必要になっていくでしょう。AIの問題、AIと教育の問題は、かなり広い視野で考えなければなりません。

教育の原点に返って

さらに言うと、そもそも AI で何でもできるようになるのだったら、我々は何のために学ぶのか、何のために教育するのかという、より本質的な問題を考えるべき時代になってきています。この問題を英語教育に引き寄せて考えてみます。今まで日本人は英語ができないと言われてきました。そこで、英語ができることを目標に教育を行ってきたわけですが、AI を上手に使えば、英語の力をグッと引き上げることができます。ですので、英語を使って仕事ができるようにならなきゃいけない、といった実用性重視の英語観や、ましてや TOEIC や TOEFL の点数を上げるために一生懸命英語を勉強しなさいという考え方は、AI 時代にはそぐわないものでしょう。

それでは、何のために英語を勉強するのかということ、我々研究者もそうしているように、知ること、探求することを通じて、自分がより良く生きるためという考え方がヒントになります。知ことは生きることを豊かにする、という観点から、教育、研究のあり方を、もう一度、原点に立ち返って考えていくことが AI 時代に求められている。そのようなことを考えて、今はいろいろな方々と議論をしているところです。

ウェルビーイング (Well-being) という言葉が世の中に出てきて久しくなります。理想論かもしれませんが、このウェルビーイングのために外国語を学ぶ、英語を学ぶ、ということの意味を、これからの AI 時代に考えていくことが、我々にとって必要ではないかと考えています。

討論

金丸敏幸准教授の講演を受けて、討論者、司会者をふくめて会場では活発な議論が交わされた。以下は編集部によるその要約である。

討論者のひとり、美術品の保存修復学を専門とする田口かおり准教授からは、美術やその保存修復の分野でも AI の使用が過渡期にあって、AI を使って作品を制作するアーティスト、また AI アートの専用ギャラリーもあるという現状の共有と指摘がまずあった。さらに、AI の積極面としてレンブラントの《夜警》において行われたように AI

を使って絵画の欠損部分を復元することが可能であること、また否定面としてやはり著作権の問題があって、既存の作品が AI によって取り込まれ消費されてゆくことへの危機感があること、最終的に AI は、人間とはなにかを、私たちに問い続けているのではないかと、という意見が述べられた。そのうえで、適切なプロンプトを作ってゆく際のポイントについて質問があった。

これに対して講演者は、AI を使って英語を書く際にも日本語の能力を鍛えることが大事であるという意見が強くあること、さらに、例えば英語ではまず結論を最初に書くといった、これまで学んだことを活かしながら AI を活用していくことが重要であると答えた。

もうひとりの討論者、運動科学を専門とする森山真衣助教からは、運動科学の分野でも AI を使ってデータ収集がなされていること、ただし、出てきたデータを解釈する際にはあくまで人間の判断が必要であることを確認したうえで、生成 AI を上手に使ういわばコツについて質問があった。

これに対して講演者は、普段、どういうことを考えて、例えば文章を書いているかを意識化し、それをきちんと言語化して AI とやり取りすることが大事であると答えた。そのうえで、脚に障害をもつひとりが擬足で走った場合に障害をもたない人よりも速く走れたりするが、それはスポーツ科学ではどう考えられているのか、また、サイボーグがスポーツをするようになった場合、それは人間のスポーツと呼べるのか、これらは人間・環境学研究科が求めている「越境」的なテーマそのものではないかと問いかけた。

会場からは、小学校、中学校では、もはや AI のほうがよい教師と呼ばれるところまで来ているとも聞かすが、これではこれまでの教育は崩壊するのではないかと、高校の英語の授業では生徒たちは必ず AI を使っているが、大学入試で生成 AI を使う能力を問うことはあり得るのか、といった質問が出された。これに対して講演者は、これまでは教師が生徒や学生よりも一歩先においてその立場から教えてきたが、今後は生徒や学生の個性的な能力を見極めて、AI の力を借りながら個別最適化を目指すことが大事になるだろうと述べた。また、一般入試ではなく特色入試という枠内では、生成 AI を使える能力を問う可能性はあるのではないかと答えた。



専門性をあらためて問い直す ——総合人間学部再編のめざすもの



宮下英明



戸田剛文



船曳康子



松江崇



小島泰雄



小木曾哲

執行部から：宮下英明（副研究科長）

講座主任から：戸田剛文・船曳康子・松江崇・
小島泰雄・小木曾哲

編集委員から：小林哲也・福元健之

司会：合田典世・細見和之

細見和之：今日は、今回の学部再編の具体的な中身とその意図などを、再編を中心になって進められてきた宮下先生に最初に話していただいて、それを受けて、各講座でどんな研究がこれまでであったのか、いまあるのか、こういう改変をへて、どんなふう新しい研究が進められそうか、といったところを、お話しいただければと思います。それが一巡したところで、ある種の論点を見つけて、それについてやりとりをする流れでいきたいと思います。最後には編集委員の立場から、小林さんと福元さんに感想なり、質問なりをあらためて出していただくことにしたいと思います。それでは宮下先生、今回の学部再編の具体的な中身、それから意図みたいところを、お話いただけますでしょうか。

◆学部再編の変遷と課題

宮下英明：おはようございます。細見先生の言われたリクエストに全部は応えられていないと思いますが、資料を作りました。資料は二つありまして、チャットのほうに、

皆さんダウンロードできるように、資料を二つ載せました。一つ目が組織再編の変遷です。教養部から人環と総人が別々にできて、その後、総人、人環が一体化し、今回、総人と人環の一体化がより鮮明になりました。もう一つの資料は、いまから僕がお話しさせていただく内容の、パワーポイント資料です。

今回いただいたお題は、「学部再編の目指すもの」だったんですけど、僕にお話しできるのは、精々、どういう経緯で、どんな議論がされてきたか、それらの議論の結果、どういうカリキュラム構成になって、どんな課題が残されたかということだと思いました。そこでまず、4年ぐらい前の小島先生が研究科長の時に始まった将来構想委員会で何が議論されたか、そのあと大学院組織再編と学部組織再編の切り離しが起こりましたが、大学院が組織再編されたあと、学部の組織再編の方針がどう決められて、どんな議論がおこなわれ、その結果、どうなったか、という順にお話しさせていただければと思います。

まず、学部組織再編の議論は2020年に始まりました。4年前ですね、これは議論途中の議事録から抜粋したものです。この時に、どう新しい総人を作るかという議論がなされていました。この時点では、人間・環境学研究科と一体化した組織再編をしようということで議論が進んでいたかと思っています。実際、再編の一番の目的が、人間・環境学研



組織の変遷と推移

(1963-1993)



究科と総合人間学部の一体化でした。なかなか学部生が大学院に上がってくれない現状を解消するために、大学院と直結した学部体制をとったほうがいいんじゃないかということで、5学系制度を廃止して、大学院の講座に対応した1学科10学際専修組織とする。皆さんに聞き覚えのない言葉、学際専修という言葉が出てきますが、この時点では、大学院の講座に相当するものを学部ではなんと呼ぶかという議論がありました。講座はあくまでも組織名なので、学部生が何を専攻するかという意味の言葉のほうがいいんじゃないかということで、学際専修という言葉が一時用いられていました。

これまで学系が主専攻、副専攻の対象でしたが、再編後は学際専修を主専攻、副専攻の対象とするという議論でした。ダブルメジャーという話もありました。いま主専攻は一つですけど、意欲ある学生は卒業論文を二つ書くことができる。そういう事例はあったらしくて、それを積極的に導入するのが組織再編計画の一つの目玉でした。そういう提案しようということの延長で、副専攻の実質化という議論がなされていました。この提案はあとでなくなっちゃいますが、この時点では議論されていました。

主専攻はいまの講座にあたるものですが、それぞれの講座で最初に学ぶもの、途中で学ぶもの、上級生になって学ぶものと、カリキュラムの階層化を図ることが議論されていました。具体的には、基礎科目、専攻入門——ここで専攻というのは具体的には講座です——講座発展科目、講座演習科目、講座研究科目、卒業研究という学修段階がしっかり見えるようなカリキュラムにすべきだ、という議論でした。現在の総人の学生はなんでも取ってきて、単位を集めて、卒業するという仕組みですけども、研究にある種特化したグループとして講座を作ることによって、履修すべき科目をある程度決めておく必要があるんじゃないか、という議論でした。

その時の一つのアイデアとして基礎科目というのがありましたが、この科目の当時のイメージとしては、総合人間学入門とか。大学で学ぶスキルいわゆるアカデミックスキルに関して、最初に教えるべきじゃないか、新入生に対して、総人でどう学んでいくか、あるいはどういうふうに学んでほしいか、を教える科目を作ったらいいんじゃないかという議論でした。さらに専攻入門科目、これは現在は以前の学系入門科目でやっていますが、それを講座ごとにやっていく。そして、学生の学びの設計とアカデミックカウンセラーの配置。留年生が多いので、できるだけ4年あるいは留学期間を入れて5年間で卒業してもらうための仕組みの導入案でした。道に迷う学生を少なくするために、学びの設計を学生自らして、その設計をするときにアドバイザーを上級生なり先生にしてもらう仕組みを考えましょうか、という議論でした。

それに部局外履修単位、外国での単位、他学部での単位、

学部組織再編の過程

1. 将来構想委員会において検討された学部組織再編(大学院と同時の設置審申請に向けて)
(大学院組織再編との切り離しによる、学部組織再編の先送り)
2. 大学院の再編後の学部組織再編方針
3. 議論の結果
4. 残された課題

総合人間学部組織再編の方向性について (将来構想委員会カリキュラムWG(2020.12.25)議事録からの抜粋) どう新しい総人を作るか

- 人間・環境学研究所との体制の一体化
- 5学系制度を廃止し、大学院の「講座」に対応した1学科10学際専修組織とする
- 再編後の学際専修(講座)を主専攻/副専攻の対象とする
- ダブルメジャー制の導入・副専攻制度の実質化
- 副専攻についても履修すべき科目の指定を含め体系的な認定制度(講座ベースの専攻になること)によっておのずと解消されるかもしれない
- 各主専攻(学際専修or講座)のカリキュラムの階層化
 - 共通基礎科目→専攻入門科目→専攻発展科目→専攻演習科目→専攻研究科目→卒業論文
- 履修しなくてもべき科目をある程度必須科目とする。
- 現在ある科目/分野別の履修モデル、コースツリーを転用
- 共通基礎科目の導入
 - 総人に入ってから学生がすべて受講する(あるいは受講すべき)科目の導入や全共科目を含めた既存の科目の必修指定
- 専攻(講座)入門科目(現行の入門科目の再編)
- 学生による学びの設計とアカデミックカウンセラーの配置
 - 学生が自らの学びの設計をして、履修を希望する主専攻(講座)、副専攻(講座)を念頭に学びの設計をする。設計に際しては、アカデミックカウンセラー(担任あるいは大学院の学生などを想定)に助言を得る。
- 部局外履修単位(外国大学、他学部、他大学で得た単位)認定の拡充

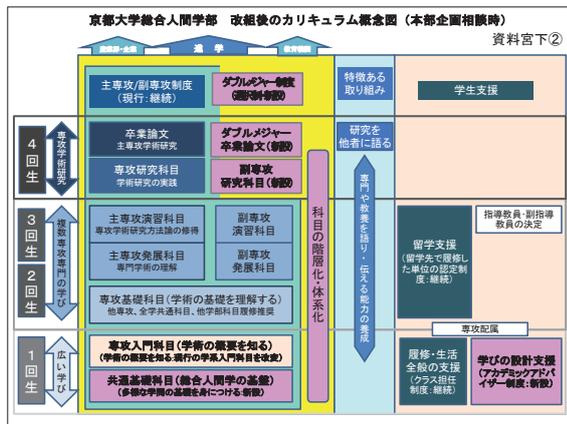


これらは現在でも認めているので、総人はすごく先進的な対応をしています。これはちょっと実現できなかったのですが、理科系だといろんな大学と単位互換の公開実習や公開演習をしているので、そういう単位も積極的に認めようということになりました。講座はどんどん小さくなっていて講座の中で全ての専攻科目が取れない可能性が出てくるので、外で取ってきた科目を積極的に認定する仕組みを拡大しようという議論でした。

これは大学院と総人を一緒に組織再編するという議論のときに、最初に出てきた議論の主な項目です。本部企画相談時に絵に描いた学部カリキュラムの概念図です。ただし設置審にかけるのは人環のみにしようということになって、

大学院設置資料の作成に特化しました。大学院の組織再編のあとで、総人再編において整理すべき教務関係の課題の整理を行った上で、学部組織再編を大学院再編の1年後とするとということになって、ここでいったん小休止となりました。

これが総合人間学部再編において整理すべき教務関係課題で、将来構想ワーキングをこれでいったん休止しますというときのメモです。左側に列記したことがだいたいまお話しした解決すべき課題と新しく導入すべきこと。右側は、それ以外の、分属のタイミング、科目設定、教務委員会の再編など、課題として残ることが挙げられており、これらの議論が組織再編カリキュラムワーキングでの議論に移行していきます。



大学院の再編後の学部組織再編方針 (より現実的な対応への方針転換)

- 総合人間学部の設立当初の教育理念(専門分野に限定された個別研究・教育を超え、自然と調和した人間の全体的形成を目標とする)、ならびに現行の教育方針(ディプロマポリシー、カリキュラム・ポリシー)を踏襲する。
- 学部と大学院のつながりを重視し、大学院の10講座に合わせた学部の専攻(専修領域・メジャー)の履修体制を整える。
- 大学院の組織再編により、専門に近い学問領域を講座として位置づけたことにより、従来の5学系体制よりも、より専門性の高い教育体制が整えられている。これにより自らが専攻する講座の専門領域およびその周辺領域をしっかりと修得する主専攻、ならびに、“副”となる専門領域(講座)を定め、その領域および周辺領域をしっかりと修得する副専攻の実質化を図る。
- スムーズな移行を図るために、大きな変更をしない。
- 多様な学び(学際・越境)を可能にする仕組みを構築する。

執行部ミーティング資料およびカリキュラムWG(第3回)(2023.6.29)メモより抜粋

「設置審に掛けるのは人環のみ」(本部企画課)により学部再編が切り離される

- 大学院の設置審資料の作成に特化
- 総合人間学部再編において整理すべき教務関係課題の整理
- 総人再編を人環の設置審認可の1年後とした(マンパワーの問題)

総合人間学部再編において整理すべき教務関係課題

将来構想カリキュラムWGメモ(2022/09/14)

- ダブルメジャーの導入の是非
- 副専攻の実質化
- カリキュラムの階層化
- 共通基礎科目の導入
- 学系入門科目のあり方
- 留年率問題
- 単位認定の柔軟化
- 指導学生数上限問題
- 1回生向けの授業担当
- アカデミックアドバイザー制度の新設
- 分属決定のタイミング
- 主専攻科目、副専攻科目の設定
- 学部教務委員会の再編
- 移行期間の対応方法
- 改組に関する周知、広報
- 規程、内規、申し合わせなどの改訂
- 教職認定科目の再構成・再整理

カリキュラムワーキングに移行したあと、大学院の組織再編後に学部組織再編をすることになりましたが、その時の基本方針をまずは決めました。これは2023年6月29日のワーキングのメモからの抜粋ですが、総合人間学部の設立当初の理念、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーなどは基本的に変えることをしないと決めた上で、一つの大きな目的として、学部と大学院のつながりを重視して、大学院の10講座に合わせた学部の履修体制を整える。総人から人環に上がってほしい、そのときにやっぱり同じ組織体制であると分かりやすい、ということがありました。そこで、大学院の組織再編により近い学問領域を講座として位置づけたので、学部も大学院と同様の体制にすることにより従来の5学系体制よりも、より専門性の高い教育体制になった。いわゆるディシプリンに近い先生方が集まった講座ができたので、そこを主専攻としてこれからは学んでもらうことになります。

副専攻は他講座の周囲を学ぶ。あとは、基本方針として結構重要になってくると思うんですけど、組織再編自体が事務的にもものすごく大変だったので、スムーズな移行を図るために、大きな変更をしないことを決めました。ここで科目名を変えると、いまの2年生と、新しい新入生の読み替え表を、ものすごくたくさん作らなくちゃいけなくて、科目名の変更はまずしないということにしました。



議論の結果—その1—

- **ダブルメジャー制の導入**：見送り
- **副専攻制度**：専攻の対象を「講座」として従来通り
- **副専攻研究**：意欲ある学生の選択肢として残した
- ***基礎科目の導入**：検討を重ねたが先送り
- ***入門科目**：大学院の科目としていることもあり、設置審の縛り（報告義務期間）を過ぎるまで現状維持、以降、講座別に再編予定
- **留年学生問題**：現行の対応を継続（アカデミックアドバイザーの導入は見送り）
- ***語学系教員が新生入生に自らの専門に関連した講義等をする機会が無いことへの対応**：先送り

あとは多様な学び、学際・越境を可能にする仕組みを構築する、ということを決めて、いろんな議論をしました。結局、それらの議論の結果、まずダブルメジャー制の導入は直近では難しいということで、見送りになりました。副専攻制度は、専攻の対象を講座として従来どおり残す。副専攻制度は非常に評判がよいので、これは継続するべきではないかということです。学生アンケートを見ても、おおむね、いい勉強になったと、いい仕組みであるという結果がありました。

さらに副専攻研究があります。これは以前からあるものですが、副専攻よりももっと発展して論文を二つ書く、いわゆるダブルメジャーに近いものです。いままでに数人これを取った学生がいるんですが、副専攻研究をすれば、主専攻として8単位ないし10単位あげましょうという制度です。意欲ある学生の選択肢を残しておこうという議論になって、副専攻研究は残しました。従来の仕組みはかなり制約の厳しいものだったんですが、制約をできるだけ外して、意欲ある学生が複数の講座の先生に指導を受けながら、複数の論文を書く選択肢を残しています。

そして基礎科目の導入、これはかなり検討を重ねました。総合人間学部はどういう学部で、この学部でどういう心構えで学んでほしいか、あるいは学問というのは非常にいろんなつながりを持っていて一つの学問領域を学べばいいというものではないという話をする科目と、もう一つはアカデミックスキル。本当は国際高等教育院がやるべきだと思うんですけど、いわゆるテキストを読む態度、情報の得方、レポートとはどういうものか、実験・実習に対する心構えなど、大学で学ぶ基本を教える科目を作ったらどうだ、という議論でした。実際にやろうとしたんですが、正直、結局誰が教えるのか、どういうふうに教えるのか、という様々な議論の末、結構難しい問題が出てきて、残念ながら見送りになりました。

入門科目は現在は旧体制ための入門科目になっていますが、大学院の科目としていることもあって、大幅に変更することはできない。大学院の設置審に対する報告義務期間というものがあるって、報告義務期間を過ぎるまで現状維持

で、それ以降、講座別に再編をする予定です。

留年学生問題に関しては、語学への出席率の悪い学生に対応する現行のやり方を継続します。アカデミックアドバイザーの導入は、ちょっと難しいという議論になりました。語学系教員が新生入生に自らの専門に関連した講義等をする機会がないことへの対応というのも議論になりました。語学の先生は全学教育として語学を教える、ある種の義務を負っていただいているので、先生方の専門を1年生に話す機会がなかなかない。これはほかの学問分野の先生方にはあまりないことなので、新生入生にも語学の先生は語学を教えているだけではなくて、こういう専門を持っているという話を聞いていただきたい。これにどうやって対応していくかという議論もありましたが、これも先送りになりました。

議論の結果—その2—

- **分属のタイミング**：2回生で仮分属するものの3回生前期末での指導教員の決定において講座分属も決定 その間の事務手続き（転学系届に準ずるもの）は不要。
- **主専攻/副専攻科目**：主専攻科目名を明示し、副専攻科目は副専攻「講座」の主専攻科目のすべてとした
- **主専攻認定の履修要件**：廃止またはハードルを低くした
- **他学部履修科目の主専攻科目認定の柔軟化と単位上限の増加**：主専攻科目の単位数算定において、指導教員が認める場合には、他学部で取得した科目の単位を主専攻科目として認めることができる（従来通り）。ただし上限を16単位から26単位とした
- **研究を他者に語るの必修化**

分属のタイミングですが、できるだけ学生が自由に行き来できるようにしようということで、いままでは学系にいったん2回生で入ってしまうと、そこから学系を移るときに転学系届というのを提出しなければいけない面倒なことがありました。最終的に指導教員が決まると、その時点で学系が移ってしまうということも出てくる。この煩雑さをなくし、学生の自由度を上げるために、手続きの簡略化を行う。また分属が実際どこで決まるのかを整理しました。一応2回生で仮分属して、どこの講座を目指すかは決めてもらうんですが、そこで分属が決まるわけではなくて、3回生の前期後半に指導教員を決めますが、その指導教員が決まった時点でその講座に分属にする。

主専攻、副専攻科目を明示して、副専攻科目は別の講座の主専攻科目の全てとした。それぞれの講座が小さくなりましたので、主専攻科目を明示して、副専攻科目は各講座の主専攻科目が副専攻科目の対象であるとしています。さらに、主専攻認定の履修要件を廃止したりハードルを低くしたりした。これは主専攻科目の認定を厳しくしてしまうと、教員数の少ない講座の学生は主専攻科目を集められない可能性がある。ですので、主専攻科目の認定のハードルをかなり低くしています。具体的に、どう低くしているかがその下です。他学部履修科目の主専攻科目認定の柔軟化と単位上限の増加です。いまもこれはやっていますが、他



学部で取得した単位を指導教員がそれを主専攻科目として認めることができる仕組みにしました。現在の上限16単位から26単位、10単位上げています。「研究を他者に語る」は学生にとって暗黙の必修科目みたいになっていたんですが、これを必修化して、しっかり取り組んでもらうようにしています。

残された課題

—特に大学院の設置審報告期間が終了し、旧カリキュラムの学生が卒業する時期での対応—

- 基礎科目の導入：総合人間学入門・アカデミックスキルズ
- 入門科目：現行の入門科目を講座ベースに再編
- 語学系教員が新生に自らの専門に関連した講義等をする機会
- 講義科目名を講義内容に即したより分かりやすい名称に変更

最後のスライドですが、いくつかの先送りの議論がありました。基礎科目の導入、入門科目の再編、語学系教員が新生に自分の専門を語る講義の機会。あと、講義科目名を講義内容に即したより分かりやすい名称に変更というのが、近いうちに出てくるかと思っています。今回の学部の組織再編の大きな目的は、大学院との連結を分かりやすい形にしようということ、それが大きなベースになっていたと思います。以上です。

細見：ありがとうございます。入門科目の検討の先送りというのは、いまやっている基礎入門科目とはだいぶ違うものをイメージされているということですか。

宮下：最終的にはそれぞれの講座の入門科目としたいので、それぞれの講座でその講座に来てほしい学生に対する入門科目にしていこうという話になっています。

細見：いまのはやっぱり旧の5学系の枠での基礎科目だということですね。

宮下：はい、ただ、いまが悪いわけではなくて、逆にいろんな先生方が入っているので、いろいろな講義内容を一つの科目で行うことによって、この先生はこういう研究をやられているのか、と発見できるメリットがあるんですが、大学院の設置審縛りが切れたあとにもう一度、教務委員会でも検討していただくのがいいと考えています。

細見：はい、学部再編に至るプロセスであった議論、その中で残っている課題についてお話しいただきました。ダブルメジャーも聞いていたような聞いていなかったようなと

ころがありますが、メジャーが主専攻、マイナーは副専攻はとなるわけですね。それでは、それぞれの講座からの先生方からご発言いただけたらと思います。第2講座の戸田先生からお話しいただけますか。

◆大学院への進学を勧めることに対する疑問

戸田剛文：はい、講座の代表で来ているとは思っていませんが、個人的にということでお話しさせていただきたいんですが、いまの前提として気になるのは、総合人間学部の学生をどうすれば人環にそのまま上げるかがメインになっている発想だと思いますが、例えば分野で言いますと、哲学ではそもそも手放しに進学をすすめるられない。つまり上がってほしいというのは、大学の都合であって、学生にとってそれほどメリットがない。キャリアパスを明確に示せない。40歳ぐらいになって、まだフリーターみたいなことをやっている学生がたくさんいる状況で、それをどうするのか。やっぱりそこを解消しないと、ちょっと難しいんじゃないかと思っています。総合人間学部の学生で、ほかの大学院にいってしまうのを人環に上げたいというのなら、分かる。その割合がどれぐらいいるのかですね。

そうじゃなくて、就職が決まった学生を人環に上げたいと思っておられるのか。僕は学生に、いまは研究職に就くのは難しくてもやめたほうがいいと言っています。言い過ぎるとバワハラにもなるので言いにくいのですが、一般就職が決まるなら、一度就職してみたほうがいいと、僕は必ず学生に言います。ですので、総人から人環に上がっている学生以外の、どの層を人環に上げたいと思っておられるのか。そしてそれが本当に学生にとって利益になるのか、ちょっと疑問です。

もう一つは、総人のシステムと人環のシステムを10講座で同じにすれば、上がりやすくなるという発想が分からない。外部からの受験者ならともかく、内部の学生が進学するときに、人環を受けたいが講座名が全然違うのでどこを受けたらいいか分からない、という相談をあまり受けたことがない。つまり、僕のところに来たいという学生は、僕が所属するところを初めから受けるので、講座名にどれほどの意味があるのかと思っています。

あと最近思うんですが、教務委員をやっていると留年撲滅キャンペーンが盛んに行われていますが、留年する総人の学生は研究の方向が明確に決まっていなくて来ているのが多い。哲学をやりたくて文学部に行く学生より最初から1年ぐらい遅れているところがある。

そうすると、ある程度留年生が多いのはやむを得ないんじゃないかという気がする。そのために、学部生が誰でも相談に行ける大部屋を作って、そこにティーチングアシスタントの院生をいっぱい配置して、コミュニケーションの機会を作るのがいいのではないかという気もします。

僕が教えている学生でも通院している学生もたくさんい



るので、確信犯的にさぼっているのは実は意外とあんまり少ない。そこも含めて考えていただけたらと思います。また、卒業論文を選択制にしてはどうかとも思います。

細見：非常に大事な話をしていただいたと思います。大学院に上がれとけしかけるのがその学生の人生にとっていいことか、ということですね。研究職が少ないことはわれわれもよく分かっていて、苦勞している博士課程の学生が現にたくさんいる。その中で大学院をわれわれ自身がどう位置づけていくかという問題でもあったと思います。理系のように修士を出て専門職に就職できるキャリアパスがあればいいんですけど。それでは、船曳先生、お願いできますか。

◆認知・行動・健康科学講座での取り組み

船曳康子：はい。一応資料を作ってきました。私たちは認知・行動・健康科学講座におまして、この講座再編で講座のメンバーの体制に大きな変化はありませんでした。変わったことは分野がなくなったことで、もともと認知・行動・健康科学は、認知科学分野と行動制御分野と身体機能論分野の3つがあったのですが、そこが形式上なくなるというぐらいの差になります。この講座は、私の知る限りの昔から全教科目では心理学と健康スポーツの授業を提供してきましたが、それらを合体したみたいな感じです。研究手法としては、計測、つまり実験、行動評価、調査をしているという特徴があります。こういうことを証明したいと企画して、データをとって分析してこうである、という角度からみんなやっている、そういうまとまりの強い集まりになっています。

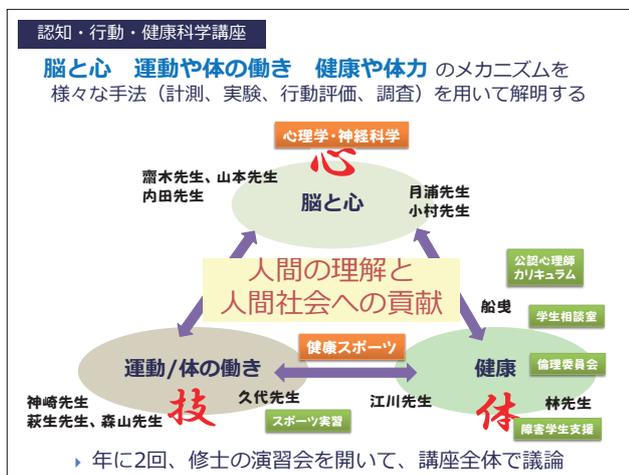
あと、健康スポーツはさっきの語学の話とちょっと近いところがあると思って聞かせていただいていたのですが、スポーツ実習や健康に関する共通教育の授業は、自分たちの研究とは違うことをやっています。私たちは全学の学生さんの健康のために授業をしているということで、健康講座を学問的に展開した感じですか。これは学問的にはこうで

すよ、診断学ではこうですよ、もしこうならこういう治療がありますよ、という具合に京大生のレベルに引き上げて、工夫しています。ですので、自分に心配のある人、家族に心配な方がおられるような学生さんが全学部から続々と来られます。授業が終わって休み時間になると、あの実は相談があって、という人が並び、健康相談対応となっています。ただ、研究室配属の際には、研究をして、卒論を書かないとならないと、最初から伝えるようにしています。

また、人を対象とする研究をしている以上、年々厳格になっている倫理に関して日々学びながら、毎年高いハードルの更新をして、医学と連携をとりながら倫理委員会の仕事をしています。それから、学生相談室の運営、数年前に立ち上げた公認心理師を養成するカリキュラムの運営も行っていますが、後者は大変で毎年右往左往しています。いままでも心理師の資格はたくさんありましたが、国家資格として文科省と厚労省合体で平成30年から改めて作られたものです。これまでも京大生で心の支援をしたいという学生はいて、とくに総人生は多いので、国家資格を取って活躍して頂ければ、と思っています。

各教員の専門性は図に示すような感じで、私は「健康」でありながらちょっと「心理」寄り、林先生は「体」寄り、江川先生は「健康」をやってるけれど、スポーツ実習とかアダプテッドスポーツをされていて、久代先生もスポーツ実習とか、神崎先生たちは宇宙のこともされていたりと、それぞれでありながらもまとまっています。さらに、講座全体で修士の演習会をして、それぞれの学生の研究内容を、教員全体で見えています。このように、もともと3分野に分かれていたのが、個々の先生の特徴を出しながらも一体化されていくのかと予想しています。

さきほどの戸田先生の話をお聞きしながら、私が個人的に考えたことですが、総人の学生は受験の段階であまりビジョンが明確でなく、何となく就職を考えている人がもともと多く、大学院にそのまま上がるのは難しいのでは、と思っています。工夫はいろいろしているのですが、変えるのは難しいように思います。また、生活や心に心配がある、高校の時に登校しづらかったという学生が結構いるようです。できれば学問的に進んでいただきたいのですが、希望されない場合は、もう仕方なく、就職準備支援にしたほうがいいんじゃないかと、思うぐらいなのです。そこで、就職しても学問に進んでも役立つ教育をしようとして切り替えました。私の行っている健康教育はとにかく人生に役立つから学んでくださいと言っています。でも、この分野は社会に出てから、やっぱりおかしいと思うことに出会うことも多々あるので、社会に出てから課題に出会ったらいつでも修士からでも博士からでも戻ってきてくださいと言っています。博士編入だってありますよと。ただそれでも、修士に上がって一緒に研究をしていく人はほしいと思うので、それも考えたのが公認心理師カリキュラムです。公認





心理師の資格は、学部4年と修士2年の6年やらないと取れないシステムになっています。6年やって国家試験を受けると国家資格がもらえて、国家資格を持つ心理師としての就職ができ、地方公務員の心理師枠も最近増えてきています。それでまだ研究を続ける人は博士に進学して頂ければ、と思っています。ちょっと長くなりましたが、私からは、以上となります。

細見：はい、ありがとうございます。またいろんな話が出ました。私自身は大学を留年して卒業して、大学院は行かないで、さらに1年後、つまり2年遅れで大学院にあがった。だから、戻れる場所としての大学院というのは、自分にとってはすごく大事でした。

それでは、松江先生、お願いできますか。

◆同一地域の立体的研究

松江崇：私たち東アジア文明講座は、東アジアの歴史とか、思想とか、文学とか、語学を対象にしていますが、明確に地域性を紐帯として構成されているのがわれわれの講座だけなので、その点に大きな特徴があると思います。対象に共通性がある一方で、ディシプリンとか、方法論などが、異なる分野が一緒になっているので、授業展開もそういう意味でいうと、非常に特徴があるのかと思います。例えば同一の対象を、いろんな分野の先生が、異なる視点から授業で扱うことがあり得ます。具体的には、儒家經典では『論語』が非常に有名ですが、当然、中国思想の福谷先生の授業でも扱われますし、朝鮮思想の小倉先生のご研究にも関係しますし、日本への影響も大きいですから、これが日本でどういうふうに使われていたかという国語学の佐野先生の実験にもなります。私は中国語ですが、古代中国語の資料としても大変重要です。同じものを異なる授業で、異なる視点、方法によって読むのは、その対象を立体的に把握できると魅力があると思っています。

つまり東アジアというのは、任意に切り取られた地域というより、共通の基盤を持つ、漢籍の文化圏で、共通の基盤を持ちますし、そういう連続性、共通性がある一方で、基層が全然異なる文化圏ですから、多様性もあり、そこから生じる相互間の影響があります。そういう意味で、共通性と多様性、一見矛盾する側面を持ち合わせている地域を対象にして、そのことを実感できる体制になっていると思います。

これからの展開についてですが、私自身のことで言いますと、専門の学生は非常に少なく、中国文字文化論という授業では、出ている学生はほとんど日本史ですとか、日本古典文学とかを研究していて、半数以上が中国語履修者ではありません。その一方、中国、台湾、韓国からの留学生も毎年参加してくれています。漢字はどのような機能を備えているのか、といったことを議論するのですが、中国

では単語を表わして、日本語では複数の単語を表わすので、イメージを表わすということが原則としてあります。それを踏まえながら、毎回課題を出して、特定の状況ではどういうふうにするかを報告させて、その情報をみんなで共有しています。そうすると、母語の違い、あるいはメディアでの違い、世代とか、個人的な美的感覚の違いとか、そういうことが授業の場で情報として共有されて、身近にある漢字が使用者ですとか状況によって異なる働きをしていることが実感できる。このことは一般の文字学の教科書等には十分に論じられていません。まさにその授業の場で、初めて浮かび上がってくることでもあります。そういうことと完全に対応し得る学問的な枠組が実はまだないと思います。

私個人の研究対象である古代中国語でも時代によってかなり違うことが分かっています。そうすると、以上のような漢字の機能の諸相を統一的に論じる枠組が必要であることが実感されます。このように総人の授業を通じて、1人では絶対に気づかないことを授業の場でいろいろ生み出していけるのではないかと考えています。

細見：ありがとうございます。東アジア文化講座の特徴についてお話いただきました。それでは、小島先生、お願いできますか。小島先生は、改組に直接関わっておられた立場でもあるわけですが、よろしくお祈りします。

◆学部における専門性をどう捉えるか

小島泰雄：今回の改革には富田先生が将来構想の準備委員会みたいなものを作られたところから入っていました。おそらく10年ぐらいこの議論をずっとしてきた経験から、いま、私たちがたどり着いているところを考える一つのキーワードは、「専門」ではないか、と思っています。私が総合人間学部の教育にあたるようになった時に感じたのは、学生が「ほっとかかっている」ということでした。京都大学の教育において、放っておくことはすごく重要なので、これをやめましょうという意見ではまったくないんですが。ほかの学部であれば、放っておいても、一応その専門があって、ある程度これに足を入れないと進めないという構造がある。ところが、総合人間学部は並列的なんです。今回の改革以前は、5学系の各学系が専門だった。学系の専門とはなんですかという問いに、誰も答えられない状況がずっと続いてきた。答える機会もなかったような気がしています。

非常に就職に親和的な学生が来ているという発言がありましたが、大学に来たばかりの1回生と話していると、やりたいことがある学生は少ない。その中で社会に関心のある学生が多く、早く社会に出たいという思いを最初から持っている。総人の卒業生は多様な就職をしていくので、社会に対していろんな人を供給しているのは、総人のいい



点だと思います。ただ、社会に出た人たちに総人はどんな専門性を身に付けさせるのかということが、ほぼ語られないまま、教員の個別の専門におんぶにだっこでやってきた。その点が、総人が持っているいろいろな可能性を十分に発揮できてないところだと感じていました。

大学院に学生を進めるためのシステム変更という批判がありました。大学院進学を入学時に選択肢としてもっていても、専門とどう向き合ったらいいかわからないために、就職活動に入っているという構図があるんじゃないか。つまり就職したくて総人に入って来るとするのは、僕は必ずしも同意できない認識です。10講座にするといまの問題は解決できるのかは、やってみないとわかりませんが、少なくとも、例えば松江先生のお話にあったようなことを、ある程度教員のあいだで語り合う土台は作れたのではないかと。並列的であることは免れませんが、船曳先生も将来的な融合を考えられていましたように、そういうことが考えられる組織にはなったと思っています。

大学院に学生が行くことを研究職と直結して考えるのも、ちょっと古い考え方かなと感じています。人間が100年生きる社会になっていく中で、学生たちが大学で得たものという、しっかりとものを考える力、その考えるベースになる専門を意識できる状況が必要ではないでしょうか。今年の4月に総人合宿が再開されたので喜んで帯同教員として参加しました。総人合宿は先輩たちが新生に、総人とは何か、を語る場となっていますが、総人は専門が身につかないという言葉がよく耳に入っていきます。僕は、そうじゃないよ、と学生たちに言いました。専門は先輩たちが考えるほどハードルが低くもなければ高くもない。つまり専門は常に学び続ける必要のあるハードルの高いものだけれど、同時に、学部で得られる専門性は、ほかの学部においても初歩的なレベルで止まる場所が多い。学生に、総人で学ぶことのできる専門とは何か、他学部とは違う学びとは何かを明確に伝えるのが、この改革においてとても大切なのだと思っています。

いま、いろんなことを話し合っていくチャンスが私たちには来ている。ここで並列のまま学生を放っておくというこれまでの態度を取り続けるとしたら、総人の学生が入学して、諦めの中で就職をしていく事態が変わらないままになる。自分が何をしたいのかわからないまま、大学院進学という選択肢さえ持ちようのない学生がそのままとなる。私が属している文化・地域環境講座は、学生がそれなりに大学院に進学しているのですが、なかなか博士課程に上がってくれないのが悩みです。この講座はフィールドベースで研究が進められるので、フィールドで専門性の無力さと向き合い、専門をさらに磨く決意を持ちにくいことがあるのかもしれない。ただ修士を修了して、地方公務員になったり、建設や鉄道などのインフラ系の会社や、マスコミに勤めることになる学生も多く、彼らは修士までに身に

着けた専門性を活かしていると思います。

ちょっと皆さんの発言に刺激されて、どうして今回の改革を目指したのかを話すことになりました。私にとって改革の本丸は、教員が学部の学生とちゃんと向き合うようになることでした。総人のいい点は、学生-教員比率が小さいことです。毎年1人か2人の指導を引き受けるのが平均です。専門について、1人ひとりの学生がもともと持っているものを尊重して教育ができる。講座として何を専門として共有するのかといった議論を、ぜひ進めていただきたいと願っています。

細見：ありがとうございます。総人にしろ、人環にしろ、大きな組織です。ワーキンググループではいろいろ議論されてきたんだと思いますが、一人一人の教員の思いをそのままやりとりできる機会が実はそんなになかったかなという感じもして、いま、いい議論をしていただいていると思いました。今回、はっきり理系講座としては小木曾先生のところだけになっていますが、小木曾先生、第10講座ということでお願いできますか。

◆学部生にせめて地図を与えること

小木曾哲：第10講座は、簡単に言えば地球科学と生物学の教員がいる講座ですが、この改革が始まる前は自然科学系で、物理、化学、生物、地球科学の教員が全部いました。それが物理と化学は第9講座で物質科学講座、生物と地球科学が第10講座と、ディシプリンに沿って二つに分かれたかたちになります。まだ始まったばかりなので特に実感があるわけではないのですが、分かりやすくはなったという気はしています。というのは、私の個人的な感想ですが、自然科学系という学系の場合、学系としての実態が何もなかったように思うのです。自然科学系に属すれば、その提供科目の中から主専攻科目を選択するので、学生にとって実質的な意味はあったのですが、自然科学系全体でのゼミや密接な連携はなかったですし、学生同士も、自然科学系で同学年であっても一切顔を合わせないまま卒業できてしまう状況でした。現在の10講座では、生物学と地球科学の教員がいる中で、地球科学でかなり生物寄りの人もいますので、研究面で連携もしながら、それぞれが自分の学生さんを指導していくかたちになっているので、実態に即した組織にはなったという気はしています。

学部再編の議論に実は私はかなり最初のほうから関わっています。2013年初め頃だったかと思いますが、あの国際高等教育院騒動が起こった直後、当時の研究科長の富田先生の呼びかけで将来ビジョン小委員会が立ち上がりました。齋木先生が委員長で、当時中堅の准教授4~5人で、1年半ぐらいかけて議論した覚えがあります。そのあと将来構想計画委員会が立ち上がって、それにも私は少し関わりました。その流れの行き着く先に今回の再編がある。ですから、



10年ぐらいかけて一部の教員で考えてきたことが、現在につながったという経緯があると思います。

私に関わっていた将来ビジョン小委員会の中で議論されたことも先ほど宮下先生が紹介されたことに含まれていますが、多くがまだ実現できずに残されています。教員全体を巻き込んで将来構想を考える機運は残念ながら高まらず、一部の教員だけが関与する状況がずっと続いたこと自体はあまり良くなかったとは思っています。私個人としては研究科と学部、特に総合人間学部がいったいどういう姿であるべきなのかを常に考え続けていくことができたことはプラスだったと思います。

ただ、学生とのコミュニケーションがあまりないままでした。さっき小島先生がおっしゃられましたけれども、学部生に対して、特に自分の専門を選ばない多くの学部生に対して、われわれはもっと向き合う必要があると、この十数年を振り返って思います。自然科学系には、5学系の時も今も、学部生があまり来てくれない。半分ぐらいが理系で入試を受けているのに、その大半が認知科学や情報科学にいつてしまっていて、自然科学には少数の学生しか来ない。そういう中で、自然科学系の学問が総人の学生にとってどういう位置づけなのか、明確に示すことができていない状況が続いている。学生から、どうして理学部と同じ専門の人が総人にもいるんですかと聞かれることは今でもよくあります。ただ、自分のところに来るわけでもない大半の学生に対して自分は何をどう伝えたいんだろうか、ということが、常に自分の頭の中にあり、いまだに模索を続けています。いずれにせよ、学生さんは何を思って総人に来てるのか、総人の中で自然科学をわれわれがどう位置づけるのか、それらを考えるうえでは学生との対話をもっと必要でしょうし、カリキュラムとしてそれが明確に見えるかたちにする必要があると思っています。

今回、学部のほうはカリキュラムを大きく変えるには時間も人的余裕もなく、あまり変わらないまま来ていますが、今回の再編を契機に、今後、どういうかたちで総合人間学部のカリキュラムを本当に作っていくのかを、教員同士で議論していく必要があると、皆さんのお話を聞きながら改めて強く思いました。

学生さんはいろんなことをやりたいと思って総人に入ってくるんだけど、砂漠もあれば海も森も山もあるようなところに来たのに地図も渡されないうまま、どっちへ進めばどこに行けるのかわからない状況に置かれている気がするんですね。どんな世界でも行けるというのが総人の特徴だと思いますので、その中で、山に行きたかったらこういう道があるよ、山や海だけでなく森もあるよと、地図を示さないといけないんじゃないか。それはカリキュラムのかたちでしっかり見せないといけない、ずっとと思っています。

専門性と総合性の両立なんて学部レベルで可能なのか、という思いもありますが、総合人間学をうたう限りは、専

門に足場を置きつつ総合を目指す、学部レベルでそれを実現していくということを常に考え続けていかないとはいけなし、今こそ本気で考えていく必要があると思いました。この学部再編をいい機会にしたいと思っています。

細見：それぞれかなり率直な意見を出していただいたと思います。合田先生、どうでしょうか。論点として、ちょっと何か出していただけますか。

◆教員自身が変わる必要性

合田典世：はい、こういう機会がないと、普段の授業とか、目の前の業務で精一杯で、総人の全学における位置づけ、そしてそれを踏まえた上で、今回の学部再編を受けてどういふかたちで日々の実践に反映するかということをメタ的に考える機会がないので、先生方の非常に面白いお話を聞かせていただいて、貴重な機会だとあらためて感じています。直近の小木曾先生のお話にも、総人が全学でどういう位置づけなのか、また地図のないところでどうやって学生が歩いていって、なんらかの手応えを与えられるのかということがありました。

この座談会でいままですとずっと話してきたのは、カリキュラムをいかに変えるかということだったんですが、ちょっと違う視点として、カリキュラムはいわゆる箱にすぎないと思うんです。箱の中には必ず人、教員がいるわけで、せっかく変わった箱の中で、教員にも新しい役割が求められるんじゃないか。先生方は実践されていると思うので、私自身の自戒を込めてですが、教育のシンプルなかたちとして、あの先生みたいになりたいというのがあると思います。このカリキュラムだからというのもありますが、たまたま受けた授業の先生のやっていること、大きさにいうとその生き様に大きな刺激を受けて、私もそうなりたいと、大学院へ進学する選択肢も大いに入ってきたりする。そういうのがいちばんシンプルなモデルケースのひとつだと考えたときに、カリキュラムは華々しく変わったとしても、教員自身が変わっていなければ、あんまり意味がない。

例えば理学部の先生と総人にある理学部系の先生は、どういふところに違いがあるのかという話も出ましたが、私も文学部にいる先生とうちにいる英文学系の先生は何が違うのかという話になってくると、ただ専門が違いますねぐらいのことしか言えないんじゃないかと思うんですね、実態として。総人ならではのカリキュラムの特色を言えるだけではなくて、プラス、その先生自身が総人的な視野を持っていないと、学生に説得力のある総人らしさ、魅力を発信していけないと思います。

今回問題になっていることの一つに、学部生が院に上がってこないということがあって、学部生は就職マインドの人が多いという受け取り方もあれば、そうでもないんじゃないかという話もあったわけですが、私が見るところ、



そんなに就職就職と考えている感じはしなくて、非常に知的好奇心が旺盛で学力も高いです。そういう人たちが、入学時には進学も大いに視野にあったけれど、学部で4年間過ごす中で、何かしら期待外れのようなものを感じて、就職に流れていっているのかもしれないとも思います。だからそのカリキュラム改革ですけれども、やっぱりロールモデルとして身近な教員がどうかたちで越境を体現しているのか、他学部になような学問の在り方、枠組をどうかたちで示しているのかもすごく大事で、そういう点で、私自身もっと研鑽しなければならないなと感じています。

松江先生から授業の中で、既存の枠組にない実践をされているという話がありましたが、全体としてはいまの体制だと、大学院に行くときには結局既存の枠組に吸収されていくルートになっています。総人、人環という、いかにも新しそうに最初は見えたけど、いざ入ってみたら結局ほかの学部と同じ専門性に吸収されていくという道が待ち受けている。それを総人ならではのものに今すぐ刷新しようというのは、それこそ若者語でいう「無理ゲー」というやつなんです。ともあれ隗より始めよで、教員が自分の専門性を超えて一味違うビジョンを打ち出していく、そういうことを普段から心がけていかないといけないのではないかなと思ったりしています。要は箱だけじゃなくて人という視点を私は議論に入れたいという思いがあります。

細見：はい、ありがとうございます。まずは教員が総人的専門性を身につけたり、発揮したりして、学生に、そういう先生のようにになりたいという気持ちになってもらわないと駄目じゃないかという、ある意味で厳しい意見でもありました。学生を大学院に行かせることの是非という議論もありましたが、ここまでの話といまの合田先生の話も含めて、戸田先生、いかがでしょうか。

◆学部生の分属時期をめぐる

戸田：合田先生のおっしゃられたことは本当にもっともで、それについてはおっしゃるとおりと思うしかありませんが、僕が総人の学生の時は、2回生の時点ですでに人間存在論分野への分属が決定していたんです。僕は総人で何かやりたいことがあって入学したわけではなくて、単に受験の時に新しい学部があって、よう分からんからいってみようぐらの気持ちで入っています。まさに留年もしていますし、どっちかっていうとさまよったタイプです。ただ2回生の時点で、やりたいことがなくても、ある程度哲学と決めざるを得ないところがあった。さっき小木曾先生が地図のない学生とおっしゃっていたんですけど、地図がなかったのですが、2回生でとりあえず決めないといけなかったから、地図ができたところがある。ところがしばらくして教員になって戻ってくると、学系制に変わっていた。これはなん

ですかと聞くと、学生が早く決めさせ過ぎないでほしいと文句を言っているということでした。しばらくすると今度は地図がない、なかなか決まらなと、また学生が文句を言っているということで、二転三転してまた元に戻ってきている感じです。そういう意味でいうと、10講座になりたいまでも第2講座では哲学、教育、社会学が一緒になっていて、広いと言えば広いですね。だから、もう少し早く2回生ぐらいでこの程度までは決めるというカリキュラムの方向をまた検討していただいてもいいのかという気がしました。小島先生、小木曾先生のお話を聞いて、そうすれば早くからもう少し学問や専門的なものに対する意識も高まって、グループがしやすいこともあるのかと思いました。

細見：こういう問題はどうしても振り子運動を起こしてしまいますね。早く決めさせると、こういう問題があって、遅く決めさせると、こういう問題がある。そこでどうしても振り子運動になっちゃう。船曳先生、いままでの議論、どんなふうに思われますか。

◆教員同士の仲のよさを活かす

船曳：私もお聞きして思うことがありました。私も他学部、医学部から来た者なので、総人とか全学のことを知らずにいました。私が総人に来た時の印象は、教員同士の仲が良いということでした。結構たこつば度が低い気がして、総人に来て、どの先生とも話ができて、私の視野がかなり開けました。隣の部屋は日置先生ですけど、何かあったら、ちょっと日置先生に聞いてとか学生に言ったり、そういうことが簡単にできる。学生が別の先生に勝手に相談したりして、私があとから驚くこともあります。その際私が思うのは、教員が先に動いてあげたほうが、学生が動きやすいということです。例えばある先生に聞きたいと思っても、なかなかその先生のところに行けなくて、分かった、私が言っておくと動くようになります。学生と話して、こんなことを知りたいなら〇〇先生に私が伝えておくわ、みたいな感じですね。

教員同士の仲がいい、これは本当か分からないのですが、私の主観ではそうなので、この総人の伝統を用いて、もっとコミュニケーションをとる。まず自分がと、合田先生はおっしゃいましたが、そうすれば横とつなぎやすいのかと思った次第です。

細見：卒業研究の副査でも、ちょっと自分のジャンルを離れたものでも、平気で引き受けているところもあるし、平気で引き受けてもらっているところがあります。そういう点でも、教員に自由度がありますね。私の専門じゃないからちょっと無理です、という言い方はしないで、どんどん副査になって自分なりの意見言うことが、割りとされてい



る。そういう点では、伝統的な法学部、文学部、理学部、医学部とか、縦割りの厳しいところからすると、われわれはかなり柔軟にやっている。それに慣れてしまっていて、それが柔軟なんだと気づいていないのかもしれない。こういうふうな場所実はそんなにないんだよということを、もう少しわれわれも自覚して、それをさらに意識化するということも必要なかと、あらためて思いました。

もっと議論したいのですが、もう12時近くになっていて、編集委員から2人来てもらっていますから、これまでの議論を聞いてどんなことを思われたか、意見をうかがおうと思います。小林さんからお願いします。

◆学部生にどう向き合うか

小林哲也：私、着任4年目で、入ってきたころに、この組織再編ということで、ちょっと驚いて、どういうことなんだろうと思っていたのですが、今日、長期の経緯や課題が聞けて大変勉強になりました。やっぱり学部として学部生にどう向き合うかが大きな課題でなかなか一筋縄には解けないものだと、今日はいろんな講座の先生、それぞれの視点から、問題点だったり、課題だったり、目標だったりがありました。私も個人として学部生にどう向き合うのかはそれなりに考えたりはするんですけど、学部としてどう向き合うかという視点も必要なんだと勉強になりました。ありがとうございます。

細見：じゃあ、福元先生は本当、着任されてすぐなんですけど、どうでしょうか。こういう議論があって、いまの改革だということなんです。

福元健之：本当にまだ半年しかたっていないところで、ただ自分自身の専門を生かした教育をしたいと思いつつ、私は文学部を出て、前任校は福岡大学史学科だったので、本当に1年生の時から歴史学をやるのが決まっている学生をずっと相手にしてきて、それとのギャップは少なからず感じることがあります。やっぱり専門教育をして、将来的に研究者になってくれる学生にも来てほしいと思うと、先ほどの戸田先生のお話とも関係するかもしれないですけど、選択はもう少し早くてもいいのかとも思いながら、ただそれは歴史学にずっといた私の感覚なので、ほかの分野の先生方はどう思われているんだろうというところは分からなかった中で、今日の座談会でとても参考になりました。ありがとうございます。

細見：宮下先生、最後に締めということではないんですけど、今日、いろんな意見が出ましたけど、お話いただけますでしょうか。

宮下：はい。今日、皆さん議論いただきありがとうございます。

ました。私もすごく勉強になりました。小木曾先生が最後にまとめてくださったので、それと同じことなんですけれども、さっき合田先生の意見もありましたけど、箱を作ることはひとまずここでやりましたので、これからどう学部生と向き合っていくか、よりよい総合人間学部を作るにはどうしたらいいかを、少しずつ皆さんで議論できたらいいなと非常に感じました。以上です。

細見：はい、どうもありがとうございました。ちょっと12時過ぎましたけれども、これで今日の座談会を閉めさせていただきます。お忙しいなかご参加いただき、ありがとうございました。

2023年度 人間・環境学研究科受賞者一覧

*学年等は受賞時のものです。

現役生・修了生の活躍

総合人間学部

太田 阿留 ほか（総合人間学部4回生）「イベント時空間予測と数理モデルに基づくサッカーの包括的スペース評価指標」日本統計学会 スポーツデータサイエンス分科会2023年度 スポーツデータサイエンスコンペティション・サッカー部門優秀賞

人間・環境学研究科

■ 人間・社会・思想講座

下 絵津子（令和2年3月博士学位取得、現在、近畿大学総合社会学部教授）『多言語教育に揺れる近代日本「一外国語主義」浸透の歴史』（2022年2月25日、東信堂）日本英語教育史学会第39回全国大会、2023年度日本英語教育史学会著作賞

稲葉 渉太（博士3年）「「有責な人格」としての「自己」と「十分な自由」の概念分析－我々はいかにして「自己責任」を運用するのか－」関西社会学会第74回大会 奨励賞

陳 暁嘉（博士1年）「台湾の「同性婚」問題をめぐる言説の編成－合法化におけるフレーム調整過程を中心に－」関西社会学会第74回大会 奨励賞

山本 知香（博士3年、現在、滋賀大学教育学部講師：滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぼ」受賞団体運営者）「大学附属センターにおける障害児者を対象とした音楽療法の拠点形成」（滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター「おとさぼ」）一般社団法人日本音楽療法学会第3回日野原賞（活動部門）

■ 芸術文化講座

濱田 明日郎（博士3年）「中後期ベルクソンにおける「創造」概念の追跡（1907-1914）——『道徳と宗教の二源泉』に至るベルクソニズムの心理学的解釈の試み』『フランス哲学・思想研究』2023年28巻 pp. 258-269 日仏哲学会「令和5年 日仏哲学会若手研究者奨励賞」

■ 認知・行動・健康科学講座

犬走 渚（博士3年）「複数肢での到達課題における手足の移動距離に応じた運動協調」京都滋賀体育学会第153回大会最優秀奨励賞

河野 友哉（修士1年）「De novo 運動学習における学習効果の汎化」京都滋賀体育学会第153回大会優秀奨励賞

■ 共生世界講座

安藤 加菜子（人文学連携研究者）「大学奨学金についての市町村の役割～鳥取県・島根県の市町村事例を中心に～」(自治体学36-2号 2023年春号) 自治体学会2023年度自治体学研究奨励賞

香月 悠希（博士3年）「規範的政策分析における政策文脈の相対性」（政策情報学会 第16巻第1号掲載論文）政策情報学会令和5年度学会誌賞

■ 文化・地域環境講座

齋藤 駿介（博士3年）「戦時期における仙塩地方開発総合計画の立案と都市計画－戦時国土計画・地方計画と都市計画の関係－」（日本建築学会計画系論文集2021年86巻784号 p. 1792-1803）2023年日本建築学会奨励賞

天羽生 悠矢（修士1年）「瀬戸内市牛窓における来街者の歩行体験を通じた街並みの魅力の描出」人間・環境学会（MERA）第30回大会 大会発表賞

松尾 香奈（博士1年）聴者側の想像力が聴覚障害者と聴者の共生可能性を高めることを事例に基づいて綴ったエッセー 社会福祉法人 鉄道身障者福祉協会2023年度「鉄道150年記念障害福祉賞」第1位 受賞

■ 物質科学講座

古川 翔一（博士3年）「アンモニア検知および触媒反応を可能とするイリジウム錯体を導入したナノ架橋ドメイン構造を有するハイドロゲルの合成」高分子学会 第72回高分子学会年次大会 優秀ポスター賞

Hamada A. ELNaggar（博士2年）「Optimized temperature-gradient in photothermal dry reforming of methane」OKCAT2023 Outstanding Research Award (Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis)

■ 地球・生命環境講座

橋 悟（博士3年）「バイオミメティクスを体験しよう～生物からモノづくりのヒントを得る技術の理解と習得」京都大学サマーデザインスクール2023優秀賞第3位

川喜多 遥菜（博士3年）「小笠原諸島の絶滅危惧種コバトベラ *Pittosporum parvifolium* における生息域内・域外

保全株の遺伝学的状況」森林遺伝育種学会第12回「学生発表最優秀賞」

大波 千恵子（修士2年）「サンゴ骨格内に生息するアオサ藻類 *Phaeophila dendroides* による遠赤色光捕集アンテナの誘導」日本藻類学会第48回大会学生発表賞（ポスター・大型藻類）

教員の活躍

■ 数理・情報科学講座

立木 秀樹（教授）出展名「フラクタル・イマージナリーキューブの影」京都大学「国民と科学・技術対話」ワーキンググループ京都大学アカデミックデイ 2023「京都大学アカデミックデイ大賞」

■ 共生世界講座

徳永 悠（准教授）Transborder Los Angeles: An Unknown Transpacific History of Japanese-Mexican Relations (University of California Press, 2022) アメリカ学会 (Japanese Association for American Studies) 清水博賞

■ 物質科学講座

吉田 寿雄（教授）化学分野の学術論文出版への貢献による称号授与英国王立化学会（RSC）フェロー（Fellow of the Royal Society of Chemistry (FRSC)）

山本 旭（助教）「光を利用したメタン転換触媒系の開発」2023年度触媒学会奨励賞

2023年度 日本英語教育史学会著作賞

『多言語教育に揺れる近代日本 ——「一外国語主義」浸透の歴史』

下 絵津子

Etsuko SHIMO

近畿大学総合社会学部 教養・基礎教育部門 教授

ひとつしかないという問題

現在の日本の大学生が小学生だったとき、学校で「外国語」の時間があった場合が大半である。では、小学校の時間割には「外国語」と書かれていたのだろうか。「英語」と表記されていたのだろうか。「外国語」と書いてあったとしたら、英語しか教えないのに、なぜ、敢えて「外国語」と表示されているのかと疑問に思ったことはないだろうか。「ない」——そんな答えが聞こえてきそうである。

経済的・商業的、そして、軍事的に世界の中心となった米国の言語を学ぶことは当然、あるいは必然であると考えるのは自然である。なにより、日本では英語は高校や大学の受験において非常に重要で、それを学ぶ必要性について特に疑問を持ったことはないかもしれない。そうであれば、英語しか学ばない「外国語」の時間が「外国語」と表示されていても、特に問題に思ったことはないかもしれない。

一方、ほぼ英語しか学ぶことができない日本の異言語教育は、世界的に見れば標準から逸脱している。大谷泰照氏は、著書『日本の異言語教育の論点——「ハッピー・スレイヴ症候群」からの覚醒』（2020年・東信堂）のなかで、世界46の国・地域の小学校・中学校の外国語学習状況の比較をもとに、英語以外の外国語に見向きもしないのはフィリピンと日本のみだと指摘している。

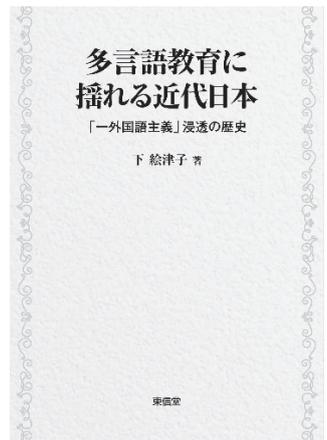
「外国語教育は英語のみでよいのか」——この疑問が、本書の研究の出発点である。複言語主義・複文化主義に代表される多言語教育推進の論考では、この反語表現が繰り返される。そして、現在の外国語教育に関するこの問題提起は、1世紀以上を遡る時代にも繰り返さされていた。明治時代の新聞の社説で英語偏重の問題が取り上げられており、教育政策の決定に関わる会議においても論点として幾度も出現する。

本書では、1898年の全国尋常中学校校長会議、文部大臣の最初の諮問機関である高等教育会議（1897～1913）、そして、その廃止後に同じく文部大臣諮問機関として設置された教育調査会（1913～1917）を対象に、「英語に限るべきか」やそれに類する議論を検証した。そして、「学習するべき外国語の数は単一でよいという外国語教育観あるいはその教育観に基づいた教育方針」（本書、p. iii）を指す「一外国語主義」と複数の異言語を学ぶべきであるとい

う教育観やその教育観に基づいた教育方針を指す「複数異言語主義」と、普通教育・エリート教育との関係を歴史的に紐解いた。また、現在もそうであるように、外国語教育では入試と関連した議論も避けられない。その点における考察も旧制高等学校である第一高等学校の入試制度の変遷を中心に行った。

本書は、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した学位論文「近代日本における外国語教育政策：英語偏重型をめぐる議論の考察」に加筆修正して出版したもので（2022年・東信堂）、2023年度の「日本英語教育史学会著作賞」を受賞した。授賞理由には、「〔外国語教育が〕英語完全一本化には至らず、関連法規上の教科名が「外国語」となった背景が明らかにされていく。当時から英語中心の外国語教育でありながらも、英語以外の外国語を推進する動きが繰り返されたことは、今日に重なるものである。」との説明があり、その歴史的経緯を明らかにした点が評価された。本書の序章（p. 11）で述べた通り、1898年全国中学校長会議における「英語かドイツ語か」に関する議論の展開を解明した第4章がおすすめの本である。

現在は、「一外国語主義」「複数異言語主義」から派生して、複数の異言語を学ぶことが外国語を教える教師のアイデンティティに与える影響の解明に関心を寄せている。多様な価値観があふれる社会に対応した外国語教育を理想とすると、一外国語主義や理想化される母語話者像が課題として挙げられる。理想の母語話者像は、一外国語主義の問題とともに、単純化・ステレオタイプ化・画一化により、多様化への対応が不十分となるという悪循環に影響を与える。複言語主義の研究においても、その定義や機能が分析対象となっている。言葉の学習を継続しながらも、「外国語」という用語や授業に隠されたイデオロギーを批判的に見つめる目を養っていきたい。



関西社会学会第74回大会奨励賞

台湾の「同性婚」問題をめぐる言説の編成： 合法化におけるフレーム調整過程を中心に

陳 曉嘉

Xiaojia CHEN

人間・環境学研究科博士後期課程 2 年

「社会問題」で満たされた現代社会では、どのような問題に関心を寄せるのかは人それぞれである。ゲイの人であれば性的少数者をめぐる話題に興味がある一方、外国人であれば当然移民問題に注目するだろうという考え方もごく自然であろう。しかし、一見自分とは無関係な「社会問題」も自分の意識に影響を与えているかもしれない。

私は社会問題とみなされてきた同性婚についての研究を行っている。関心を持つようになったきっかけは 2018 年の台湾での留学生活であった。その半年間、同性婚をどのように合法化するかをめぐる論争は台湾社会において非常に激しく交わされており、人権、ジェンダー、及び宗教などの要素が混ざって一時的には敏感な話題にもなっていた。2018 年 11 月の台湾の国民投票を経た結果、周知のように同性カップルが結婚できるようになった。

しかし、合法になった時点から「同性婚」とそれをめぐる論争の影響は幕を降ろしたという考え方は適切であろうか。その疑問を念頭においてぼんやりとしながら新聞や論文などのデータを探してみれば、こうしたデータが出てきた。同性婚に対して否定的または保守的な態度をもつ人は 2017 年 6 月の 49.6% から 2018 年 11 月の 77.0% に増えた。つまり、台湾社会における保守的な価値観が強くなったことが推測される。では、なぜ世論がさらに「保守的」になったのか。これは決して台湾という地域に限定された問題ではなく、「夫婦別姓」や「パートナーシップ制度」などをめぐる議論を展開している日本社会も直面している問題であると考えられる。同性婚を事例にしてもう一步進んでみれば、進歩的価値観と保守的価値観との対立をどのように理解すれば良いのかという問題が浮かび上がってきた。それはどの社会にも共有されている現実でもあり、持続的な観察と思考を通じて解明したい問題でもある。

今回受賞されたのは修士課程から行ってきた台湾の同性婚に関する研究内容であり、同性婚に対する態度の形成と変化に影響を与える要因は何かという点に着目したものである。具体的には国民投票期（2017 年から 2019 年にかけての 2 年間）の台湾社会における同性婚運動またはバックラッシュに深く関わっていた団体と個人の語り方の異同を明らかにした。簡潔に説明すると、まずは最も活躍していた NGO 団体の投稿とそれらに関する新聞記事を収集して

KH Coder という計量テキスト分析ソフトを用いて支持・反対側団体それぞれの言説の特徴を見出そうとした。その上、現場の風景を描き出すために当時の学生運動のリーダー、台湾の性別平等委員会の元メンバー、昔には同性愛嫌悪の経験を持っていたエイズ支援 NGO で働いている同性愛者、LGBT フレンドリーなキリスト教会の管理者など、一人ひとりの協力者のライフストーリーを半構造化インタビューという方法を用いてじっくりと聞いて同性婚への態度の形成要因について考察した。その結果、既存の研究でよく扱われてきた「宗教信仰」という属性は決定的な要因ではなく、むしろ日常における多角的な宗教経験と実践が影響を与えている。また、運動団体の宣伝には見えない宗教という要素は、個人の語りにおいてはよく見える。つまり、集合レベルで行われる公的実践と個人の日常生活における宗教実践と教義の解釈という私的実践の両者には多元性がある。

同性婚に関する研究を始めた動機は非常に単純であり、ただ「どうして合法化したらダメなのか」のような素朴な疑問だった。現在も台湾社会の独自性に夢中になっており、同性婚のみならず代理母出産にも関心を寄せている。こんな展開を何年も前の自分は考えたことがなかったと思う。しかし、同性婚のような社会問題は決して一口で食べ終わったチョコレートのような存在ではなく、むしろ鏡かフィルムのように我々の時代における社会意識を反映している存在であると思う。それで社会問題を研究するのは特定の「マイノリティー」の権利向上のみならず、一人ひとりの人間を含んだ社会全体の性格を診断しているようで面白いことであると研究を進めれば進めるほど強く思うようになった。

一般社団法人日本音楽療法学会 第3回日野原賞（活動部門）

「共に居ること」と音楽

山本 知香

Chika YAMAMOTO

滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター特任准教授

私が所属する滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター（愛称：おとさぼ）は、障害児者の生涯にわたる音楽活動の支援を目的として寄附をもとに設立された、全国でも珍しい音楽教育支援に特化したセンターである。学校等にも珍しい音楽教育支援に特化したセンターである。学校等に音楽を届けるアウトリーチ活動、障害児者を対象としたピアノレッスン・音楽療法等のインリーチ活動、教員やピアノ講師・音楽療法士等を対象とした指導者研修会、パイロットプログラムの4つの柱で事業を展開している。おとさぼは、公的な施設で音楽療法的な視点を活かした活動が行われていること、今後の展開が期待できることなどから、2023年秋に「一般社団法人日本音楽療法学会第3回日野原賞（活動部門）」を受賞した。音楽療法的な視点といっても様々であるが、おとさぼでは、活動内容ありきではなく、参加者の状態にフィットするよう丁寧に企画することを心がけ、その都度の参加者の状態に応じて臨機応変に実践しようと工夫している。そこには、音楽療法におけるクライアント理解の視点、即興的な対応の視点が活かされているといえる。音楽を提供する側→享受する側というような一方通行の関係性ではなく、音楽をあいだにして相互に通じ合いながら場を共にする姿勢をもとうと努めるところに、おとさぼの特徴がある。

さて、私自身は、音楽療法士として自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）の子どもの自己性の育ちをテーマに実践・研究に携わっている。ASDは、自己性の育ちに弱さを抱えるとされる。ここでいう自己性とは、他とは違う独自の個性を持ち、安心して日々を生きるための核となるようなもの、「自分らしさ」の源泉のような感覚を意味する。

ASDの自己に関する研究では、自己意識や自己認知、自己理解などがテーマとなることがあるが、そこで問題になっているのは意識や認知、理解の対象としての自己であり、私が問いたい「自分らしさ」の源泉のような感覚とは少し違う。定型発達の場合、「自分が自分であるということ」はほとんど当たり前のこととして感じられているだろう。幼児期に自我が芽生えて以来、「私は私」を自明のこととして生きているからである。青年期頃、アイデンティティ確立をめぐる「本当の自分とは？」と悩んだとしても、自分探しをしているのが「自分である」という確信までも

が崩れることはまずない。考えたり悩んだりする主体としての自己がしっかり保たれているからである。

主体としての自己の輪郭を携えるには、どうしたらいいだろうか。私は、ASDの子どもとの実践を通して、誰かと「共に居る」という経験が欠かせないのではないかと考えるようになった。ここでいう「共に居る」とは、単に場に居合わせているという事実以上に、気持ちが繋がったような喜びを感じたり、一緒に何かをしたという協働の感覚を味わったりするなど、自分自身の生に直接的に影響を及ぼしてることが実感されるような「共に居る」ことである。ASDの子どもは、興味の対象や感覚がマジョリティとは異なることがあり、この経験を重ねることに難しさがある。そんなASDの子どもの世界にチューニングしようとするとき、即興的な音楽演奏はとても助けになる。たとえば、空間にそっと音が響けば「今ここに共に居る」ことを感じるための舞台がさりげなく準備されるし、子どもが奏でた音に対し、その都度微調整しながら音を返せば、言葉なしにコミュニケーションが成立することもある。

そもそも、誰かと「共に居る」ことには、ASDかどうかに関わらず難しさや煩わしさが伴う場合もある。むしろ、人生の悩みのほとんどを人間関係の煩わしさが占めていると言っても過言ではないかもしれない。誰かの心に深く触れようとするには、慎重でいたい。とはいえ、人は一人では生きていくことができない。であれば、その難しさや煩わしさをどう自分の身に引き受けるかという視点から、「共に居る」こと、またその先に広がる「共生」について考えてみることも、ときに必要なのではないだろうか。

第10回日仏哲学会若手研究者奨励賞

「中後期ベルクソンにおける「創造」概念の追跡（1907-1914） ——『道徳と宗教の二源泉』に至るベルクソニズムの心理学的解釈の試み」

濱田 明日郎

Tomoroh HAMADA

博士後期課程修了（博士号取得）一般企業勤務

私を含むベルクソン哲学の研究者は、100年前に書かれたベルクソンの本を今日も読み続けている。実際、哲学書とは特殊なメディアである。哲学者はクリティカルな発想にあるとき出会ってしまう。しかもその発想は、既存の理説がすっかり見逃しているものだ。だから彼は自らの発想をなんとか表現しようとするのだが、周りの人間に理解してもらうための手段は、既存の理説が提供する、使い古された言葉だけである。そこで彼の著作は新しい発想と古い素材のはざまで、一種異様な相貌を帯びる。奇妙なほど長大だったり、結論がどこにあるのか見えなかったりする。何かを必死に伝えているように見えて、何を伝えたいのかが一読では掴めない。哲学書が「難解」だと言われるのは、このような構造的な事情によるものだと私は思う。

このような「難解」な著作など放棄して、明晰な「結論」を積み重ねることが、価値ある言語活動だとみなされるべきだろうか。もちろん私はそう思わない———というか、思えないのだ。哲学者の著作は確かにわかりにくいかもしれないが、その哲学者が何かに突き動かされていることだけは明らかだ。哲学者の真摯さは読み手にも伝染し、この哲学者が掴みかけているらしい「何か」をどうにか理解してやれないだろうか、と読み手を探求に巻き込んでしまう。

しかし読者は根負けする。「もうお前の言うことはわかった」と納得してしまう。不可避的にそういう瞬間が訪れる。だから、哲学書を読み続ける営みは、「わかった」という先人の成果、そしてその裏面としての「わかったことにしよう」という諦めを引き受けつつ、それでもなお「やっぱりわからない」と言い直すサイクルの中にある。哲学書のポテンシャルが尽きるまで、このサイクルは回され続けるだろう。

ベルクソンに惹かれて哲学研究を始めた私は、ベルクソン哲学をすでに「わかった」ものとする先行研究にまず圧倒された。大学院時代の私は基本的に、ベルクソンについて言われるべきことは全て言われ尽くしているのだ、といじけながらも、それでも何かを言わなければとあがいていた。苦しい日々のなかで、それでもベルクソンの主著『創造的進化』の読書会に参加し、一行一行を地道に追っていたとき、違和感はあるけれどなんとなくスルーしてしまいたいような、微妙な言葉遣いに出会った。それは、これま

での著作でベルクソンが主題としていない「意志」という言葉だった。「意志」は特に説明されるでもないまま唐突に用いられ、なにか言いたげだが、どこか居心地の悪そうな佇まいをしている。

私はそのとき、「この微妙な佇まいと向き合えるのは私だけなのかもしれない」と思った（あるいは思い上がった）。明確なメッセージはなかったが、何かを伝えたい、伝わるなら伝わってほしい、というようなシグナルが、この表現から発せられているようにも見た。この微妙な違和感を手がかりに、『創造的進化』以降の著作を「意志」という観点から読み直すにつれて私は、伝えたいもののために長い時間をかけて手探りをする哲学者の姿を見出した。『進化』以降の後期ベルクソンは、この世界に何らか新しいものがもたらされ続けるという「創造」という事態を論じようとしている。そして、『進化』以降のベルクソンは「創造」を担う力能として「意志」に期待を寄せつつも、『二源泉』ではそのポジションを「情動」に明け渡してしまう。私はこの経緯を明らかにしつつ、「創造」という、非常に掴み難い、しかし後期ベルクソンの存在意義がそこにあるような事態にアプローチするにあたって、このようなベルクソンの試行錯誤それ自体もまた探究のリソースとして活用してはどうかと提案する論文を書いた。その論文が、今回ここで紹介していただくことになった、「中後期ベルクソンにおける「創造」概念の追跡」という論文である。この論文を評価していただけたとき、私の方向は間違っていないのだと、深く安堵したことをよく覚えている。

「わかりたい」という誠実なスタンスと、それでも「自分には未だここがわからない」という個人的な違和感、この両者の緊張関係を維持し続けること。これが当該の論文の出発点であったし、他者や世界との向き合い方一般において、私の行動指針でもある。この覚悟があれば、いじけた時間のあとにも、光が差してくるのではないかと思っている。

京都滋賀体育学会第153回大会 若手研究奨励賞（最優秀賞）

複数肢での到達課題における手足の移動距離に応じた運動協調

犬走 渚

Nagisa INUBASHIRI

人間・環境学研究科共生人間学専攻認知・行動科学講座 博士後期課程3年

歩行などの日常生活を支える基本的な動作からスポーツや楽器演奏などの複雑な動作に至るまで、あらゆる身体運動は手と足の運動を巧みに組み合わせた全身運動として捉えることができます。今回、京都滋賀体育学会第153回大会で若手研究奨励賞（最優秀賞）を受賞した研究は、「我々の脳がこうした全身運動をどのように作り出すのか？」という疑問の解決を目指して取り組んだものです。

全身運動では、手と足をそれぞれの目標位置に向かって同時に移動させることが求められます。例えば、ドラム奏者は手と足を同時に操作して複数の打楽器を叩きます。こうした手足の同時運動は我々の身体活動の基盤を担っているにも関わらず、脳が手と足をどのように制御して手足の同時運動を作り出すのかといった基礎的で重要な問題は未だ解決されていません。下肢は上肢よりも長く重いため、力学的に動かすにくい性質を持っています。また、脳から手先・足先に至るまでの神経経路も上肢より下肢の方が長いです。このような上肢と下肢の性質の違いにより、脳から手足に向かって運動指令を同時に送った場合、手足の運動開始には時間差が生じてしまいます。そのため、手足両方を適切なタイミングで目標位置に移動させるためには、目標位置だけでなく、こうした時間差を考慮して手と足の運動を制御する必要があります。そこで筆者は、手足両方を用いた運動の制御過程を時間的な観点から明らかにすることを目的として本受賞研究を行いました。

脳が運動を制御する仕組みの解明を試みる運動制御研究は、手先を目標位置まで移動させる腕到達運動を対象動作として進められてきました。本受賞研究では、手足の同時運動の制御過程を調べるために、従来の腕到達運動課題を手足による到達運動課題に拡張することを試みました。具体的には、参加者は手足を動かすことで目の前に設置されたモニター上のカーソルを操作して、標的まで到達させる運動課題を行いました。この課題では、手の位置がカーソルの横方向の位置、足の位置がカーソルの縦方向の位置に対応していました。つまり、参加者が手を単独で動かすとカーソルは横方向に移動し、足を単独で動かすとカーソルは縦方向に移動します。そのため、標的にカーソルを到達させるためには、手足両方を適切な位置まで動かすことが求められました。手足間で要求される移動距離が異なる状

況において運動制御がどのように調整されるのかを調べるために、標的は複数の位置に配置しました。

標的に到達するまでのカーソルの軌跡をみると、直線的に到達するわけではなく、むしろ曲がりながら到達していました。対して、両手で同様の運動課題を行う実験では、手足での結果とは異なり、カーソルは直線的に到達していました。つまり、手足での曲がったカーソル軌跡は、手足特有の結果であると言えます。では、なぜ手足では曲がった軌跡を示したのでしょうか。この原因を探るために、手足が動き出す時間を比較しました。その結果、手足をそれぞれ単独で動かす時に存在する動作開始の時間差が、手足同時運動においても残存していました。このことから、手足での曲がったカーソル軌跡は、手足同時運動において手が足よりも先に動き出してしまうといった性質に起因することが明らかとなりました。さらに、手足は力学的に独立しているにも関わらず、同一標的への手足の動き出しの時間差は試行間で常に一定に保たれていました。この結果より、脳は手足の同時運動の制御過程において、手と足の運動を別々に制御するのではなく、まとめて制御することが示唆されました。

以上をまとめると、本受賞研究により、手足の同時運動を生み出す過程では、体肢の性質の違いから生じる運動の時間差が存在する中で、手足の運動が協調的に制御されていることが明らかとなりました。

謝辞

本受賞研究に対して助成を賜りました公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団に厚く御礼申し上げます。また、本受賞研究を遂行するにあたり京都大学大学院人間・環境学研究科の神崎素樹教授、萩生翔大准教授に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

京都滋賀体育学会第153回大会優秀奨励賞

新規運動学習における学習効果の汎化

河野 友哉

Tomoya KAWANO

人間・環境学研究科認知・行動・健康科学講座修士課程2年

ヒトの運動学習能力にはなぜ個人差が存在するのか、この素朴な疑問こそ、私が現在の研究を始めたきっかけである。

ヒトは新しいスポーツを始める時や、初めて扱う道具の使い方を覚える時など、様々な場面で運動学習のプロセスを経験する。そこで見られる卓越した運動学習能力こそ、ヒトの持つ素晴らしい能力のうちの1つであるが、その一方で、その運動学習能力に大きな個人差があるということもまた事実である。部活動や体育の授業において、どんなスポーツでも要領良くこなしていく同級生が1人くらいいなかったらどうか。では、どうして同じ量練習しているにもかかわらず、その練習の効果に個人差が生じてしまうのだろうか。私は運動学習中に観察される、「汎化」という現象に着目した。汎化というのは、限られた状況下で学習したことが未知の状況において発揮される現象を指す。例えば、スポーツでは基礎練習で学んだことをどれだけ試合で応用できるかが重要となる。この時必要とされるのが学習効果を試合に汎化させる能力となる。私は、各個人の汎化能力の違いこそが学習の個人差を生む要因となっていると考えた。そこで、まずは汎化という現象がどのようなメカニズムに支えられているのかを明らかにすることを目的に研究を開始した。

まず、運動学習のプロセスを実験的に観察するためには、当然ながら学ばせる運動タスクを用意する必要である。真っ先に思いつくのは、サッカーのキック動作や野球の投球動作のような、スポーツ動作を利用する方法である。この方法は、得られた知見を直接スポーツに応用できるというメリットがある。しかしその一方で、実験参加者がこれまでにどんなスポーツをしてきたのかといった、過去の経験を揃えるのが難しいため、まっさらな状態からの学習プロセスを観察することができない。この問題を解決するためには、これまでに全く経験したことがない新しい運動タスクを使う必要があった。そこで私の研究では、2つのジョイスティックを使って画面上のカーソルを操作するという運動タスクを構築した。イメージとしては、マウスを使ってカーソルを操作する運動の、マウスの部分がジョイス

ティックに置き換わったものだと思ってもらうとよい。ただし、マウスのように、ジョイスティックの操作に対してカーソルは直感的に移動しない、というところが肝である。2つのスティックの内、右のスティックの縦方向の操作はカーソルの横方向の動きに対応し、左のスティックの横方向の操作はカーソルの縦方向の動きに対応するように設定した。このように設定することで、カーソルの操作方法をゼロから学ばなくてはならない状況を作り出したのである。普段使っているマウスを横に動かすとカーソルが縦に移動してしまう状況を想像すると、その難しさが分かっていただけのと思う。実験参加者には全く新しい環境のもので、カーソルを標的に到達させる運動タスクを学習してもらった。ご想像の通り、参加者は練習初期には全く思い通りにカーソルを動かすことができない。しかし、約1200回標的への到達を練習すると、カーソルを狙った方向へ動かせるようになっていく。さらには、驚くべきことに、全く練習したことのない方向に対してもカーソルを動かすことができるようになっていった。このように、汎化という現象を実験的に観察することに成功したのである。

では、汎化という現象は脳のどのようなメカニズムに支えられているのだろうか。私は、脳の計算過程を模した数理モデルを考案し、そのモデルのシミュレーション結果によって汎化という現象を再現することでメカニズムに迫ろうとしている。端的に言えば、脳を作ることで脳を理解しようとする試みである。これに関しては、試行錯誤の最中であるためここで深く言及することは避けるが、先ほど述べた実験結果をある程度再現することに成功している。この試みによって汎化のメカニズムが明らかとなれば、自ずと汎化能力の個人差がなぜ生じるのかを明らかにすることができると考えている。また、その知見を応用して汎化を促進するような練習方法を考案することが私の最終目標である。

自治体学研究奨励賞

大学奨学金についての市町村の役割： 鳥取県・島根県の市町村事例を中心に

安藤 加菜子

Kanako ANDO

人間・環境学研究科 人文学連携研究者

人生には様々な選択肢があり、それを選ぶ自由は、誰にでも与えられています。しかし、各選択肢の「選びやすさ」は、すべての人に等しく与えられているわけではありません。

例えば、大学進学という進路の選びやすさは、大学が近くにあるかどうか、生まれ育った地域で暮らし続けたいと考えた場合に大学卒であることが役に立つかどうか、学費等を支払うことができるか、進学をサポートしてくれる学校や家庭に恵まれているかどうか等、多くの条件に左右されます。

選択肢をめぐる条件が異なるなかで、私たちがとれる対応は、置かれた条件に従って進路を選ぶこと（例：経済的理由で大学進学をあきらめる）か、置かれた条件を変えていくこと（例：奨学金制度の充実を求める）です。私は、後者に関心を持ち、特に経済的な条件を変える手段を研究してきました。また、その際には、自治体の取り組みに注目してきました。なぜなら、自治体、特に市町村は、私たちに最も身近な政府であり、人々のおかれた様々な条件への細やかな対応が期待できるからです。

本研究では、事例調査を通じて、市町村が大学進学のための奨学金を支給することの意義をさぐりました。大学進学への支援は、主に、大学を所管する国によって行われています。そのなかで、市町村が大学進学を支援するのであれば、それはどのように行われ、いかなる意義があるのかを明らかにすることが、本研究の目的でした。

しかし、自治体による奨学金は事業規模が小さく、具体的な事例に基づく研究はほとんど行われていませんでした。そこでまずは、鳥取県と島根県内の市町村による奨学金事業の実施状況を調査しました。両県は県外進学者が多いため、市町村が独自の工夫を行っていると予測されたからです。

奨学金事業の全体的な実施状況に目を向けると、事業の大部分は国が担っており、格差対策としての意義が期待されながら、貸与型奨学金の債務の重さや、支援を必要とする学生を十分に把握できないこと、支給額の少なさなど、いくつかの課題が指摘されていました。なお、これらの課題に対しては、政府は給付型の奨学金を増やす等、改善に向けた取り組みをすすめています。

一方、事例調査の結果、市町村による奨学金には、大学卒業後にUターンした場合に債務が免除になるものや、所得以外の要因（家庭の状況など）に配慮したもの、国の奨学金との併給を認めるものなどがあり、国による奨学金の課題を補完する役割を果たしていることが示唆されました。

また、鳥取県智頭町の「おせっかい奨学生」事業では、Uターンによる返済免除が組み込まれた奨学ローンを提供し、住民からの寄付金が集められ、役場の職員がメンターとして支給対象の学生に寄り添うことで、町への愛着を醸成する工夫がなされています。この仕組みによって、いったん進学を諦めていた学生が、最終的に進学を果たす例もみられました。

この研究で明らかになった市町村による奨学金の主な意義は、第一に、国や県の事業と比べるなかで、より細やかなUターン人材支援としての意義です。第二に、高卒者を含めて、地域の将来を担う人材を支援するという意義です。さらに、学び続けたいと願う子どもたちに対し、地域の大人たちが支援する姿勢を示す点にも意義があります。

本賞をいただいた背景には、「さらに地域から謙虚に学び、研鑽せよ」との叱咤激励が込められていると考えています。なぜなら、この研究には、対象地域が限定されているなど、未完成な部分が多いからです。だからこそ、この受賞を励みに、感謝の気持ちを忘れず、今後も精進して参ります。

私は、大学を卒業後、国家公務員として働くなかで、一つの政策では拾いきれない「生き方の多様性」を教わりました。特に、地域ごとの違いに関心を持ち、そのことが自治体の取り組みへの関心を深めるきっかけになったのだと思います。その後、公務員を辞め、無職でいた時期や、子育てをしながら京都大学の人間・環境学研究科で学んだ時期を通じて、多様な生き方を支える政策の大切さとありがたみを自分ごととしても実感しました。これまでのご縁に感謝し、これからも、政策と人・地域の関係を考え続けて参ります。

政策情報学会学会誌賞

規範的政策分析における政策文脈の相対性

香月 悠希

Yuki KATSUKI

京都文教大学非常勤講師

他人と会話をしているとき、あるいは他人が議論を交わしているのを第三者として眺めたとき、「どうも話がすれ違っている」と感じられる。そのすれ違いが原因で致命的な事態にまで発展するという事は稀にせよ、多くの人はその「据わりの悪さ」を日常的に経験しているのではない。身近な人々とのごく個人的なやり取りから、世論を二分するような社会問題についてのメディアを介した議論に至るまで、社会のあらゆるところ、あらゆる次元で多くの「すれ違い」が生じている。おそらくは同じものを見て話しているはずなのに、しかし話が噛み合わない。すれ違っていることに気づけばまだいい方で、噛み合っていないことに気づかないまま決裂する交渉もあるだろう。

公共政策に関わる議論においても、残念ながら、「すれ違い」は決して珍しくない。公共政策は社会問題を解決するために立案・実施されるが、問題の解決にあたって人々の間の深刻な価値対立に直面することがある。効率的な問題解決を図るには適切な問題定義が不可欠だが、そもそも解決すべき「問題」をいかに定義するかについてすら、関係者間で合意が得られないことも多い。「問題」は「本来あるべき望ましい状態」の欠如を意味するが、その「望ましきさ」についての人々の価値観は千差万別だからである。そして、個人の信念や価値観、倫理観に深く根ざすテーマについて、きちんと噛み合う形で議論を交わすのは容易なことではない。

したがって、価値対立が顕在化している社会問題の解決に取り組むには、人々が有している規範や価値についての考えを適切な方法で分析対象とする必要がある。政策情報学会学会誌賞受賞論文「規範的政策分析における政策文脈の相対性」は、以上の問題意識のもと、公共政策の価値や規範の側面に焦点を当てた政策分析である「規範的政策分析」の方法について、政策文脈の観点から考察したものである。ここでは、その研究の着想について記したい。

公共政策の分析、立案にあたっては、社会問題を構成する文脈に注意を払わなければならないとされる。公共政策によって解決が目指される現実の社会問題は、特定の社会的文脈に根差したものであり、それを無視して効果的な解

決策を講じることはできないためである。

しかしこの「文脈」に対する認識の相違は、私たちの議論を「すれ違い」に終わらせる最大の要因のひとつである。私たちは価値観において対立する以前に、まず事実認識において対立していることが多い。この問題はいかなる文脈の上に生じているものなのか。現状に至るまでの経緯や、現状を説明する客観的かつ実証的な指標の解釈に主観的な価値判断が加えられることは言うまでもないが、しかし大前提として共有できるはずの基本的な事実認識すら食い違っていることも珍しくない。つまり、同じ問題について意見を交わしているように一見見えるが、しかし双方がイメージする問題の内実は全く違うということが起こり得る。

この事実認識の食い違いを放置すると、政策に関わる合意形成において深刻な問題を招きかねない。事実認識の相違に気づかないまま価値や規範の議論に突き進んでしまうと、双方の主張の隔たりが過大評価される恐れがある。倫理観・価値観の違いは非妥協的なものとして経験されることが多いため、本来であれば一定のすり合わせが可能な対立が、決裂不可避の決定的な価値対立と認識されてしまうかもしれない。

本研究では、政策文脈の解釈や評価は分析の目的や射程に応じて決まる相対的なものであり、それゆえに分析者は自身の文脈理解を適切に開示すべきであると論じた。価値や規範に関わる議論を意味のあるものにするためにも、政策が解決しようとしている問題がどのような具体的文脈の上に生じているものなのかについて意識することはきわめて重要である。

対立しているのは事実認識の次元においてなのか、価値判断の次元においてなのか。そこを明確にするだけでも議論の質は変わる。結果として、より深刻な価値対立の存在が明らかになるかもしれないが、それも一つの成果ではある。単に「すれ違い」に終わるよりかは生産的ではないだろうか。

2023年日本建築学会奨励賞

戦時期における仙塩地方開発総合計画の立案と都市計画—戦時国土計画・地方計画と都市計画の関係—（『日本建築学会計画系論文集』86(784), 2021）

齋藤 駿介

Shunsuke SAITO

東急株式会社

2017年1月、国立公文書館での史料調査の最中に「仙塩都市建設図」（図1）を偶然にも発見した時、即座に「この計画が実現しなくてよかった」と思いました。東北出身の筆者にとって、2011年3月11日は今なお鮮烈な記憶として残っており、被災から数日後にテレビ映像で見た、あの日の津波に襲われる仙台平野の光景が脳裏に浮かびました。そのため、この図面に描かれた計画の謎に強い関心を抱かざるを得ませんでした。

一方で、日本都市史・都市計画史の観点で見ると、近代都市計画理論の理想的・教科書的な適用とも評される「先進的」かつ「高度」な計画が満州などの植民地・占領地で立案されたことは周知の事実でしたが、日本本土では「仙塩都市建設図」ほどの広域的かつ高い技術水準の計画（ロータリーを中心とする放射状街路・緑地帯を備えた広幅員街路・緑地帯や河川による市街地の連担防止…）は知られておらず、学術的にも興味深い発見でした。そこで、戦前期の議論や国土計画・地方計画との関係を念頭に置きながら、仙塩地方開発総合計画（以下、仙塩計画）の立案過程・計画内容と都市計画への影響を考察した本研究を行いました。

まず、立案過程に着目すると、ある土木技術者の存在が浮かび上がってきました。内務省仙台土木出張所の所長であった金森誠之はかねてから構想していた港湾・河川の整備と都市建設を一体的に行う独自の計画思想を基に、県都・仙台市、港湾都市の塩竈市及び周辺地域の総合的な開発を目指す仙塩計画を立案しました。ここで、中央省庁では統合的な政策にはなりえなかった産業基盤整備（道路・鉄道・ダム・港湾などのインフラ）と工業都市建設が密接に結合し、地域全体の交通網・施設計画・土地利用計画を総合的に盛り込んだ、壮大かつ画期的な都市計画構想（「仙塩都市建設図」）が立案されました。

さらに、仙塩計画の立案に伴って、既存の法定都市計画も工業開発に特化したものに変容し、軍工廠周辺で広幅員街路や豊富な公園緑地の整備を含む、大規模かつ高水準の土地区画整理が事業化されました。

一方で、仙塩計画は何の脈絡もなく突然現れたものではありませんでした。東北の「後進性」の打破が重要課題であった宮城県・仙台市にとって、仙台東部・南部の工業開発は都市計画導入時からの悲願であり、「時局の要請」の

名を借りた地域利益誘導の思惑も色濃くみられました。

こうして華々しく登場した仙塩計画は中核事業であるダム・港湾整備が頓挫した影響もあり、軍工廠周辺の事業に終始し、当初の壮大な構想は実現しませんでした。しかし、仙塩計画は未来の「大仙台」の具体的なイメージを提供し、以後の仙台市の市域拡張や国民学校における教育など様々な場面で重要な役割を演じていきました。さらに言えば、そもそも実現可能性は度外視され、「夢のような構想」を描くこと自体に意義があり、それゆえに「理想的・教科書的」な計画が立案できたとさえ思えてきます。

ひるがえって現代に目を転じると、東北の「後進性」の背景にあった災害への脆弱性や地域の不均等発展といった課題は冒頭で言及した東日本大震災で顕在化したようになっておも眼前に広がっています。その理由や解決策を論じる用意はまだありませんが、仙塩計画をめぐる議論はその端緒になりうるように思えます。今後も現在の東北地方の実態や課題との連関を視野に収めつつ、東北地方の地域開発や都市計画の歴史的研究を進めていきたいと考えています。



図1 戦時期における仙塩地方の開発構想（『仙塩都市建設図』）

人間・環境学会（MERA）第30回大会 大会発表賞

瀬戸内市牛窓における来街者の歩行体験を通じた街並みの魅力の描出

天羽生 悠矢

Yuya AMO

人間・環境学研究科修士課程2年

歴史的街並みが残る過疎地域である岡山県瀬戸内市牛窓は、古代から美観で知られる穏やかな港町である。高齢化と人口減少が進むなか、この地域の豊かな文化・環境を守り残すべく、官民学連携による持続的な保全活動が行われており、増加する空き家や「住み継ぎ」の実態調査、在来住民や都市部からの移住者に対するヒアリングなどの研究が行われてきた。牛窓の魅力は従来「日本のエーゲ海」に代表される画一的な観光地イメージで語られてきたが、昨今は人が暮らす街並みの「何とも言い表し難い雰囲気」に魅力を感じるという声も多く聞かれる。そうした個々の内に閉じた判断について可能な限り外在化し、地域内外で価値観を共有することが、関係人口の増加を目指す牛窓のまちづくりにおいて今後不可欠とされている。

私は2021年夏に牛窓地域に関わり始めて以降、調査や展示などを通じて、街並みの記録と価値共有の試みに取り組んできた。標題の発表内容は、牛窓のありふれた日常風景に潜む魅力を来街者の視線を頼りに探し出すために行った参加型調査実験「フレーム散策実験」（2022年）の方法と結果をまとめたものである。

「フレーム散策実験」は、歩行体験に現れる魅力を多視点から幅広く記録し、地域のありふれた日常風景に潜む魅力を探し出して共有することを目的として考案した手法である。実験参加者は自由散策を行いながら任意のタイミングで街並みを動画撮影する。その際、注目している対象とその特徴・感じたことの3点を口頭で説明してもらうことで、対象の視覚的要素と参加者の主観的解釈をセットにした映像／音声及び記録地点の位置をデータとして記録する。撮影器具として「フレームカメラ」という、白色の枠（開口部約25cm×18cm）に小型アクションカムを取り付けたものを用いる。参加者はこれを片手に散策し、枠を通して街並みを観察しながら撮影する。実験参加者は「牛窓のことをもっと知りたい人」を対象にした募集に応じて地域外から訪れた16名で、参加者ごとに異なる特徴を持ったデータ群が記録され、注目した事象やそれに対して抱く印象にそれぞれの価値観が反映されていることが確認された。

この実験について、学会発表後に検討し直した内容も交えて解説を加えたい。注目するのはフレームカメラの働きである。フレームカメラの枠部は、中央の開口部の向こうへ置かれる注視点とそれ以外との境界を顕かにしつつ、視

界の広がりや妨げない。このことは、鑑賞対象とそれ以外とを隔てるために設ける認識の領域が環境全体のどこを切り取っているかを、また環境の変化や自身の運動に合わせて認識の領域が常に変化していくさまを一目瞭然のものにする。従って、フレームカメラは参加者の街並み全体の身体的把握を妨げることなく、当人の美的経験を深く豊かにし、客観的に共有できる形で経験を蓄積することを可能にしている。

「ユニークな見た目の道具を持って歩き、撮影する」という特別な状況についても考えたい。非専門家にとって、地域の日常生活空間を目の当たりにしてそのひとつをじっくり捉え、具体的な美的判断を下す行為は、一般的ではないだろう。そこでフレームカメラを持って歩くことにより、地域住民から向けられる関心と併せて参加者を特別な態度に導き、普段注目しない対象に対してより注意深くなるよう方向づけたと考えられる。以上のことは、現象学における雰囲気論や、環境美学における「個別の活動」「統括的活動」の影響関係を通して理解される。

映像メディアの形で記録されたデータは一見するだけでも興味深いもので、2023年に展示を行った際は地域内外から好評が得られた。しかし、地域のまちづくりと接続するためには全体を更に共有可能な形にしなければならない。執筆時点現在、今度は地域を語るうえでの道具となることを目指して、環境美学の批評理論を応用した「街並み市民批評」の作成に取り組んでいる。実験参加者らが見つけた牛窓の美的価値は、専門家とは異なる角度、知識や感性に基づいた判断によるものだ。豊かな風土を後世に受け継いでいくため、牛窓固有の魅力を市民視線から見つけ出し、街に関わっている人々やこれから関わる人々の間で語り合うことができるものになりたい。そんな思いで、この研究を続けている。



図 フレームカメラ

令和5年度「鉄道150年記念障害福祉賞」第1位入賞

ことばを欲して：日本手話第一言語話者として

松尾 香奈

Kana MATSUO

人間・環境学研究科博士後期課程2年

2020年、新型コロナウイルス／COVID-19が猛威を振り始めた。コロナ禍第一波の春、誰しもが未曾有の事態に戸惑った。外出自粛で街じゅうから活気が奪われ、張りつめた空気が漂った。これに加えて、マスクの着用が必須化されたことにより、日本語中心社会から除け者にされ、孤独の波に足をとられてしまった人びとがいる。聴覚障害者だ。

ところで医療モデルは、聴覚障害者を障害程度に応じて分類する。重度の聴覚障害者はろう者、そうでない聴覚障害者は難聴者といったぐあいに、聴覚障害者を聴力欠損者とみなす姿勢を貫いてきた。そのいっぽう、日本語を第一言語とする聴覚障害者を難聴者、日本手話を第一言語とする聴覚障害者を「ろう者」とし、聴力レベルではなく文化言語的側面を重視する立場が広まってきている。本研究では、文化言語的「ろう者」を対象とした。「ろう者」である私の視点から、コロナ禍を経て変化した「ろう者」と日本語話者の共生のあり方について、自文化の探究的記述を行う際に最適な、オートエスノグラフィー形式での記録を試みた。

日本手話とは、手指だけでなく、眉、目、頬、顎、肩の動きも文法的要素として機能する日本固有の手話言語である。たとえば、WH疑問文を生成する際には、眉を上げるか眉を寄せて、顎をわずかに左右に揺らす。手話はジェスチャーに過ぎないため、表情で情報補填していると誤解している人がいるが、そうではない。「ろう者」は表情が豊かというのは、顔のパーツの動きが文法的意味を有さない言語を話す人びとによる、エティックな見立てに過ぎない。

日本手話は、母語話者がいるにもかかわらず、日本手話の通じる場面が極端に少ない。そのため、日本手話や書記日本語のほか、音声日本語の読話（＝口形を読み取って相手の発話内容を推測・理解すること）を習得している「ろう者」がいる。読話は、かなりの集中力と日本語の言語運用能力が求められるため、日本語が第二言語の「ろう者」にとって大きな負担となるが、マスクによって口元が隠れ、この読話すらできなくなってしまった。コロナ禍以前の、「ろう者」が過度な負担を負いながら日本語話者に合わせる片害共生（＝一方には利害が生じないが、他方には害が生じる共生）時代が限界を迎えたのだ。

片害共生の崩壊に、新たな共生のあり方を提示するきっかけを作ったのが、マスメディアだった。聴覚障害者が読話できず困っているとニュースやSNSで繰り返し取り上げられたおかげで、耳元で手を上げれば筆談やジェスチャーで対応してくれる人が増加した。コンビニエンスストアのレジには、指差しで意思疎通ができるコミュニケーションシートが用意されるようにもなった。「ろう者」にもわかりやすいように、イラストも描かれている。

「ろう者」は、「ろう者」だけで集住生活をすれば、日本手話という「ことば」の通じる世界にいられる。なんのうしろめたさを感じることもなく、日本手話話者でいられる。それは、この上なく幸福な世界だろう。しかし、日本語話者と日本手話話者が対等な関係でない現在、やみくもに日本語中心社会から日本手話コミュニティを分離させた状態の共生を志向してしまえば、「ろう文化」（＝「ろう者」の生活様式）の保護を謳いながら、「ろう者」が強いられている不利な状況を隠蔽しかねない。

「ろう者」が日本手話コミュニティにも日本語中心社会にも参加し、日本語話者と対等な関係を構築できるようになるには、何が求められるのか。コロナ禍が浮き彫りにした片害共生の限界、そして、それに対処しようとする日本語中心社会。日本手話で話せる環境が整備されたわけでも、日本手話が公的に言語として認められたわけでもないが、社会側が、無理をしてまで音声日本語を使わなくても良しとする風潮を明示的に主張し始めたことにより、私は、コロナ禍以前よりも安心して「ろう者」でいられるようになったと実感している。日本語中心社会側の対処のしかたは完璧とはいえないが、日本語話者が異なる言語を話す人の存在を意識するだけで、手話はジェスチャーに過ぎない、声で話すべき、きこえた方が幸福といった固定観念は切り崩せる。

片害共生から、相利共生へ。「ろう者」は、その存在を想定され、文化言語的他者として尊重されることにより、安心して日本語話者という枠に回収されない生き方を邁進できる。

第72回高分子学会年次大会 優秀ポスター賞

アンモニア検知および触媒反応を可能とするイリジウム錯体を導入したナノ架橋ドメイン構造を有するハイドロゲルの合成

古川 翔一

Shohichi FURUKAWA

東北大学 材料科学高等研究所 特任助教

このたびは総人・人環フォーラムへの寄稿の機会をいただき御礼申し上げます。今回受賞した研究においては、私が博士課程時代に自身の専門分野の拡大と共に学際的な研究を目指したものです。新しい分野への挑戦と私の研究について簡単に紹介させていただきます。

今まで私は、有機金属錯体を触媒として用いた環境へ配慮した有機合成（グリーンケミストリー）における研究に携わってきました。有機合成分野において原子効率の高い反応や高選択的な反応の開発は廃棄物の削減にもなり、環境への影響を低減するために重要であります。そこで、当研究室では合成により生じる副生成物（廃棄物）が水のみといった環境へ配慮した反応であるアルコールと窒素化合物における N-アルキル化の研究を行ってきました。特に私は、水溶性イリジウム錯体を触媒に用いたアンモニア（およびアミン類）とアルコールを原料とする N-アルキル化反応を報告してきました。この触媒は水中で安定であり、アンモニア分子がプレリジウム錯体に作用すると配位子交換により赤色から淡黄色に変色する特性がありました。この錯体の機能を活用して新たな分野への展開を模索しておりました。

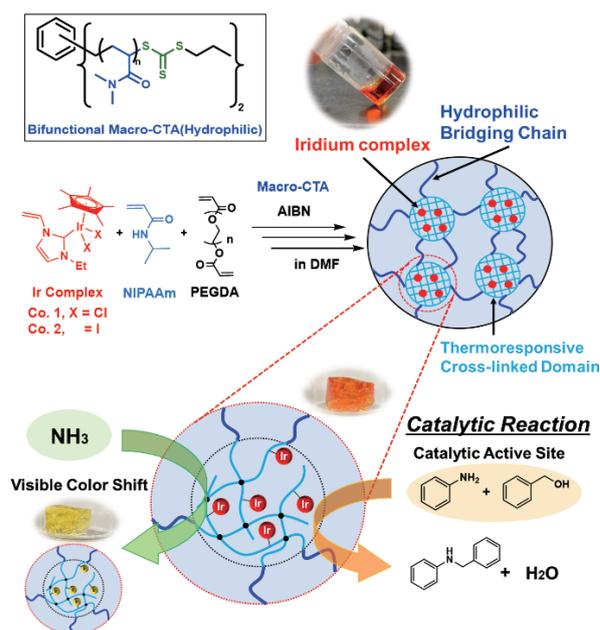
一方で滋賀県立大学の伊田グループでは、架橋された温度応答性高分子から成るナノドメイン（架橋ドメイン：CD）構造を有する新規ヒドロゲルを設計し、空気下において温度変化に応答した網目内部での CD の膨潤・収縮に基づき、透明性とマクロな体積を保ったまま力学特性を変化することを報告してきました。私はこのような多機能かつゲル内部において網目のサイズや高分子の性質が異なる高分子ゲルへ着目いたしました。

これらのことより、この架橋ドメインを有するヒドロゲルへ当研究室で開発したイリジウム錯体を局所導入することにより、このヒドロゲルのゲルの分子ふるい効果や刺激応答性に加えて錯体特有の機能（溶媒親和性、色の変化、触媒等）を組み合わせた特異的な分子認識や触媒反応の実現を期待しました。

まず、私はイリジウム錯体含有ビニルモノマーを合成し、RAFT 重合法を用いて熱応答性 CD 構造を有するヒドロゲルへの錯体モノマーの導入を達成しました。得られたゲ

ルは、アルコールとアミン類との N-アルキル化反応においても局所的な高分子網目サイズを最適化することで反応選択的な触媒活性（小さいサイズの基質のみ反応できる）を示しました。また、高分子ゲル材料としてもこのゲルはアンモニア水に接触させると錯体の配位子交換に基づいて速やかに赤色から薄黄色へと色を変化させました。均一に分散した CD 構造を有することより温度変化に対しても透明性を保つことができるとともに、高温下では CD 構造が収縮することに基づいて、アンモニアの認識を遅延させる温度応答分子認識能を示しました。

このように本研究では、有機金属錯体と高分子ゲルを組み合わせた新規機能性材料の合成に成功しました。しかし、高分子ゲルとしての高分子鎖の性質、溶媒効果、網目構造サイズなどによる機能や反応系の解明を始め、他の反応系への展開など探索・解明すべきことは多く残されており、新たな展開を期待して今後も本研究へ邁進したいと思います。



図：アンモニア検知および触媒的 N-アルキル化のためのイリジウム錯体を導入した架橋ドメインを有する熱応答性高分子ゲルの合成

Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis 2023 Outstanding Research Award

Converting CO₂ and Methane into Valuable Chemicals Using Solar Energy

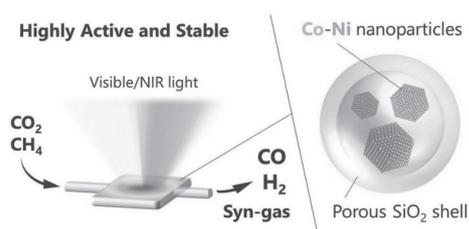
Hamada A. El-Naggar

Ph.D. candidate, Graduate School of Human and Environmental Studies
Kyoto University

The Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis 2023 (OKCAT, 2023), held at Kyoto University, brought together experts and students for a series of plenary, keynote, and invited lectures, along with poster presentations. I had the privilege of presenting my research and engaging in discussions with fellow researchers from both Japan and abroad. I was honored to receive Outstanding Research Award for my work, and I'm grateful for the opportunity to share more about this project as a result of this award.

The project, *Photothermal Dry Reforming of Methane (PT-DRM)*, explores a promising method for converting harmful gases such as carbon dioxide (CO₂) and methane (CH₄) into syngas, a useful mixture of carbon monoxide and hydrogen. These gases are well-known contributors to global warming, and my research focuses on developing a sustainable solution by utilizing solar energy to transform them into valuable products through photothermal catalysis.

In this study, we tackled two significant challenges in catalyst design: coke formation and nanoparticle sintering. Both processes, often triggered by high reaction temperatures, can degrade the catalyst's performance and stability over time. To address these issues, we developed Co-Ni alloy nanoparticles encapsulated in a porous SiO₂ shell, a design that not only enhanced catalytic activity but also significantly improved stability, enabling the catalyst to maintain its efficiency under high temperatures.



New Insights in Photothermal Catalysis

One of the most exciting outcomes of this research was discovering the critical role that solar irradiation plays in improving the catalytic process. While previous studies had demonstrated the potential of photothermal energy to drive reactions, the specific effects of light positioning and temperature gradients had not been fully explored. Our work showed that by focusing light on targeted areas of the catalyst, we were able to boost catalytic

conversion two times.

This finding introduces new parameters for future research, highlighting the importance of how light interacts with the catalyst and the resulting temperature gradients. These insights offer a path for further optimizing light placement and other reaction conditions, which could lead to the development of even more efficient catalysts.

Receiving the award for this work at OKCAT2023 was a significant personal achievement. It not only recognized the effort behind the research but also underscored the potential for this work to contribute to sustainable technologies. The symposium was a remarkable opportunity to connect with leading minds in the field of catalysis, and it was both motivating and inspiring to be part of such a community.

This recognition is a testament to the collaborative nature of research at Kyoto University. Throughout my doctoral studies, I've had the privilege of working alongside talented researchers and supportive professors who have offered guidance at every stage. This award belongs to all of us, a reflection of the shared commitment to advancing knowledge in the field of catalysis.

Looking Forward

While this project represents significant progress, it is just the beginning. There is still much to learn about improving and scaling up photothermal catalytic processes, and one of my primary goals moving forward is to explore how this research can be applied on an industrial scale. The aim is to develop catalysts that are not only efficient but also economically viable for large-scale use.

I am also excited about the possibility of coupling methane reforming with Fischer-Tropsch synthesis within a single catalytic system. This could allow us to utilize the syngas produced in methane reforming to create higher hydrocarbons, further expanding the capabilities of photothermal catalysis.

In conclusion, the recognition at OKCAT2023 validates the hard work behind this project and serves as a reminder of the untapped potential in sustainable catalysis. The research we are doing at Kyoto University is more than just scientific exploration—it's about finding real-world solutions to some of the most pressing global challenges. As we continue refining our work, I am confident that photothermal catalysis will play a key role in advancing clean energy technologies, and I look forward to seeing how this journey unfolds.

京都大学サマーデザインスクール2023 優秀賞第3位

バイオミメティクスを体験しよう～生物からモノづくりのヒントを得る技術の理解と習得～

橋 悟

Satoru TACHIBANA

京都大学地球環境学堂 研究員

今回優秀賞を受賞したのは、京都大学サマーデザインスクール 2023 で実施した「バイオミメティクスを体験しよう 生物からモノづくりのヒントを得る技術の理解と習得」というテーマのワークショップである。

バイオミメティクスとは、生物の構造や行動といった特徴をモノづくりに活かす技術を意味する。有名な活用例だと、サメのウロコを参考にした高速水着、ゴボウの実を参考にした面ファスナーがある。他にも、化粧品から宇宙産業、IT まで、様々な分野で活用が始まっているが、まだ認知度は低い。バイオミメティクスはすでに世界的に注目されているものの日本では学ぶ機会も少ないので、体系的に学ぶ場があっても良いのではと考え、出前授業やセミナーを積極的に行ってきた。そのような背景もあり、大学生への教育機会としてサマーデザインスクールでバイオミメティクスのテーマを実施した。機会提供という目的だけでなく、もっと単純に「生物のおもしろさや不思議さを楽しんで知ってほしい」という気持ちもとても大きかった。

ワークショップは、1. 基礎レクチャー、2. 生物の実験観察、3. アイデア発想、の3段階で構成した。基礎レクチャーでは、用語の定義や発展の歴史、バイオミメクリーとの違い、多くの活用事例など、基本的だが知る機会の少ない部分を取り上げた。生物の実験観察では、バイオミメティクスで生まれた技術の参考となった生物を扱った。ハスの葉に水を垂らして撥水機能を観察したり、乾燥したマツボックリを水に浸して鱗片が閉じていく様子を観察したりと、体験として楽しめる実験を行った。ハスもマツボックリも身近な生物ながら実験で一般的に扱う生物ではないので、これらの実験は高校生から社会人の幅広い層にとっても好評である。ちなみに現在は、ウツボカズラとオランダフウロも実験レパトリーに加わっている。そしてアイデア発想では、参加者が選んだ生物や技術課題を基にバイオミメティクスのアイデアを考えた。その中では、課題に関する工学的な用語を生物に関する用語に変換したり、キーワードから生物を探索したり、というワークを行った。

これらの内容は、どれもバイオミメティクスの基礎研究に関わる。私はバイオミメティクスの手法論を研究した際、日本では普及していない情報が多くあることを知った。そこには、課題解決のヒントとなる生物を探す論理的手順や、

生物学の知見を持つ人が技術開発に関わる効果など、バイオミメティクスを根本的に支える有益な要素が多く含まれていた。そして、課題解決のヒントとなる生物を探す際には、生物がもつ工学的な仕組みに注目する必要があるが、最初はそれをイメージするのが難しいようだ。例えばハスの葉について、葉の汚れを洗い流すという生物学的な視点と、葉表面の微細構造で水を強くはじくという工学的な視点を実験によって認識することで、他のアイデアも発想しやすくなると考えている。そして、アイデアを発想するワークは、論文で述べられる論理の手順を実用的にまとめたのが原型となっている。参加者からは「蛾を参考にした防音材」や「タツノオトシゴ骨格を参考にしたアーム構造」など興味深いアイデアが提案された。

私事だが、2024年11月頃に書籍『バイオミメティクスは、未来を変える』を出版する。一般書として、バイオミメティクスの新しい事例を多数紹介し、実験や発想の方法などもわかりやすくまとめた。生物やバイオミメティクスに興味がある方には、ぜひ手に取っていただければ嬉しい。

不思議な生態や特徴的な形態の裏に隠れた、工学的な原理や効果を考えるのはとてもおもしろい。今後も、いろいろな形でバイオミメティクスや生物のおもしろさを伝えていきたい。そのような活動と研究が、科学技術の発展への貢献だけでなく、子どもたちが科学へ興味をもつきっかけになれば幸いである。



ハスの葉が、砂を含む水滴をはじいている様子

森林遺伝育種学会第12回大会 学生発表優秀賞

小笠原諸島の絶滅危惧種コバトベラ *Pittosporum parvifolium* における生息域内・域外保全株の遺伝学的状況

川喜多 遼菜

Haruna KAWAKITA

人間・環境学研究科相関環境学専攻自然環境動態論講座 博士後期課程3年

植物の進化と聞くとどんなものをイメージするだろうか？ 分かりやすいのはサボテンのトゲだ。トゲはもとは葉であったが、乾いた砂漠で生き延びるために体に蓄えた水や栄養を草食動物から守るために、護身用の棘を持つようになったという説がある。また乾燥地で生きるために葉を退化させ、表面積を減らすことで水分の蒸散を抑えているという説もある。サボテンのトゲ一つとっても、環境適応や動物からの防衛のために植物は変化をとげ、工夫して生きることが分かる。

このような生物の工夫を“適応”という。今日私たちが目にして植物の形や特徴は、長い歴史を経て適応して獲得したものである。生物の種には広範囲に分布するものもあれば特定の地域にしか見られないご当地レア種も存在する。この違いを生む原因の一つが適応力の違いだ。レア種は一般的な種が利用しにくい特殊環境に適応するため、独特の進化を遂げていることが多い。レア種の適応と進化を研究することは、生物の種の多様性を生み出す仕組みを解明することに繋がり、重要な研究テーマである。私の研究熱の源泉はまさにここにある。植物の適応に関しては、目で直接観察できる外見だけでなく遺伝子から読み解くこともできる。私はレア植物の適応進化に興味を持ち、大学院で小笠原諸島の植物の研究に取り組んできた。

小笠原諸島に代表される海洋島では、ご当地レア種が多くみられる特徴がある。海洋島は海底火山が隆起して生じた陸地で、日本列島の本土とは違って一度も大陸と繋がったことがない。それ故に独自の生態系を形成し「進化の箱庭」とも呼ばれる。小笠原は特に植物とカタツムリのレア種が数多く進化しており2011年に世界自然遺産に登録された。しかしこうしたご当地レア種は、先に紹介したように一般的な種が生活しにくい環境に特殊化しているために個体数が少なく、絶滅の危機にさらされている。

私が今回の受賞研究で取り上げた植物もその一つで、名前をコバトベラ (*Pittosporum parvifolium*) という。コバトベラは、親指の爪ほどの小さな葉とバニラのような香りの白い花を咲かせる可憐な低木だ。しかし生育地の開発や人間が持ち込んだヤギに食べられるなどし、野生下ではわずか4株にまで減少した。

このような希少種は万が一野生個体が絶滅した時のため

に、安全な避難場所に個体を輸送して栽培・飼育されることがある（これを生息域外保全という）。コバトベラも小笠原諸島が世界遺産に指定された頃から、東京大学小石川植物園で域外保全個体が栽培されてきた。栽培株には由来や個体の違いを示すラベルが付けられているが、植物園で経年栽培するなかでラベル情報があいまいになってしまい、遺伝的背景の把握や交配計画が困難になり、具体的な保全策の設定の障害となっていた。

私たちは絶滅回避のための対応策の一助となる遺伝情報を得るために、野生の4個体および域外保全株について、①次世代の更新に使用できるような遺伝的に純粋な個体が、②遺伝的な多様性がどれくらいかを検証した。遺伝的な多様性とは、色鉛筆のようなもので、例えば1色しかない場合より、24色あるほうが多様な表現が出来る。同様に生物にとっては様々な状況へ適応するために遺伝的な多様性をより多く持っていることが重要となる。特に個体数が急激に減少した種では、遺伝的多様性が不足すると近親交配による弱点が現れ、生存力が低下する。そのため遺伝的多様性を保つことは絶滅リスクを減らすための直接的な課題となる。

検証の結果、野生個体も域外保全株も遺伝的に純粋であり、遺伝的多様性も十分に高く維持されていると確認された。さらに、域外保全株は野生個体が持たない遺伝情報を保存しており、野生集団の遺伝的多様性をさらに高めるために非常に有用であると明らかになった。これらの結果から、今後人工交配などによって個体を増やせること、域外保全株の花粉も交配に使用できることなどが保証され、具体的な保全策への指標を得ることが出来た。本研究では保全策への科学的基盤を提供しながら官民学連携で取り組んだことで地域の生態系への意識をより高め、持続可能性を高めることにも繋がったと考えている。

日本藻類学会第48回大会 学生発表賞 (ポスター発表・大型藻の部)

サンゴ骨格内に生息するアオサ藻類 *Phaeophila dendroides* による遠赤色光捕集アンテナの誘導

大波 千恵子

Chieko ONAMI

人間・環境学研究科地球・生命環境講座 博士後期課程1年

この度、「日本藻類学会第48回大会学生発表賞(ポスター発表・大型藻の部)」をいただき大変光栄に存じます。日々熱心なご指導賜りました宮下英明先生をはじめとして、ご指導・ご協力いただきました関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

造礁サンゴ(以下、サンゴと省略)はイソギンチャク様のサンゴ組織(ポリプ)の下に炭酸カルシウムを主成分とする骨格を形成します。ポリプや骨格内には様々な藻類が共生しており、最もよく知られた共生藻類はポリプの細胞内に共生している褐虫藻(渦鞭毛藻類。共生藻とも呼ばれる)です。一方、サンゴ骨格内にも多様な藻類が共生していることが知られています。なかでもアオサ藻綱藻類はサンゴ骨格内の主要な共生藻類であり、近年の群集構造解析により12科にわたる多様な種が検出されています。しかしながらサンゴ骨格内は、700 nm以上の遠赤色光に富んでいるものの400-700 nmの光合成有効放射(酸素発生型光合成に利用できる光の波長範囲)に乏しく、藻類をはじめとした酸素発生型の光合成生物の生育には適さない環境です。実際、遠赤色光のみで酸素発生型の光合成を行うことのできる生物は限られており、特に緑色植物においては、サンゴ骨格内共生藻類のひとつであるアオサ藻綱の *Ostreobium* sp. や、南極で採取されたトレボウクシア藻綱の *Prasiola crispa* の二例しか報告されていません。

私は、沖縄で採取したサンゴの骨格内から遠赤色LED光のみで生育できる藻類として新たに分離した *Phaeophila dendroides* (アオサ藻綱アオサ目)における、遠赤色光を光合成に利用する仕組みについて研究しています。遠赤色LED光下で生育した *P. dendroides* は、白色LED光下で生育した細胞には見られない遠赤色光の吸収が観察される一方で遠赤色光を吸収できる特別なクロロフィルを含まないことから、凝集したりタンパク質と結合したりすることで通常のクロロフィル *a* の吸収が変化して遠赤色光領域に吸収帯を有するようになったレッドシフトクロロフィル *a* (以後 red-Chl とする)により、遠赤色光を吸収できることがわかっていました。また、遠赤色LED光下で生育した細胞の生化学的な解析では、白色LED光下で生育した細胞には見られない約26 kDaのチラコイド膜タンパク質がつくられていることから、遠赤色LED光下で生育した

細胞では red-Chl を含みこのタンパク質をサブユニットとする遠赤色光捕集アンテナタンパク質複合体 (red-LHC) が誘導される可能性が示されていました。

本研究では、構造や活性を保ったままタンパク質を分離する手法のひとつであるクリアネイティブ電気泳動法を用いて *P. dendroides* の red-LHC を分離し、そのサブユニットの分子量や分光学的特性等の特徴を明らかにしました。さらに、遺伝子発現解析を行い遠赤色LED光下で発現量が増加する遺伝子を探索することで、red-LHCのサブユニットをコードする遺伝子の取得とアミノ酸配列の推定を試みました。その結果、*P. dendroides* の red-LHC は約26 kDaのタンパク質で構成されること、さらに、*Ostreobium* sp. や *P. crispa* の red-LHC と比較してサイズやサブユニットの分子量、液体窒素温度で観測される蛍光波長が異なることがわかりました。また、遠赤色光照射下で培養した細胞では複数のアンテナタンパク質の発現が増加しており、そのなかから red-LHC のサブユニットである約26 kDaのタンパク質をコードする遺伝子の候補を絞ることができました。本研究は、*P. dendroides* の red-LHC を世界で初めて分離しその特徴を明らかにした点、遺伝子の候補を絞れた点が評価されたものと考えられます。

その後の研究により、タンパク質の質量分析を行うことで約26 kDaのタンパク質の遺伝子とアミノ酸配列を推定し、*P. dendroides* の red-LHC が *Ostreobium* sp. や *P. crispa* とは全く異なるタンパク質で構成されることを明らかにしました。*Ostreobium* sp. と *P. dendroides* はともにサンゴ骨格内に共生する代表的なアオサ藻綱藻類です。両者の red-LHC のサブユニットが異なるタンパク質であることは、サンゴ骨格内に生息するアオサ藻綱藻類の各系統が、red-LHC を独立して獲得することによって遠赤色光を光合成に利用する仕組みを築き上げてきたことを示唆しています。この仮説を確かめるために現在、遠赤色LED光下で生育することのできるアオサ藻綱藻類をサンゴ骨格内から分離・培養しており、既報種とは形態的に異なる複数の培養株を確立しています。これらの培養株について本研究と同様の手法で解析することにより、アオサ藻綱内における red-LHC の多様性や系統的分布を明らかにしていきたいと考えています。

英国王立化学会称号授与に際して

吉田 寿雄 | Hisao YOSHIDA

吉田 寿雄 (よしだ ひさお)
人間・環境学研究所物質科学講座 教授

2023年11月30日に英国王立化学会 (Royal Society of Chemistry, RSC) から、フェロー (Fellow of the Royal Society of Chemistry, FRSC) になりませんかという趣旨のメールがありました。「この推薦は、化学分野の出版に対するあなたの貢献が認められたことによります」とのこと。すぐに内容が理解できなかったこと、最近では迷惑メールも多いことから、まずは怪しいメールかどうかを考えましたがそうでもなさそうだったので、次にフェローって何だろうと思ってwebで調べてみたところ、一種の称号であることがわかりました。英国は近代化学の発展に大きく貢献をしてきていますし、RSCは歴史も深く(1841年創立)今も多くの学術論文誌を出版しています。私にとっては研究を始めて以来のお気に入りの学会でしたので、「光栄です」と署名入りの書類を添付して返事したら、「2023年12月5日火曜日付でフェローになります、おめでとう!」とのこと。56歳になる直前の出来事でした。

称号といえば名前の前にSirなどとつける honorary title で公爵とか男爵とかナイトとか貴族や偉い方々につくものが有名ですが、このフェローの場合は自分の名前の後ろに称号としてFRSCをつけて、Prof. Hisao Yoshida, FRSC と名乗ってよいということです。ある一定水準以上の選ばれた学会員という感じでしょうか。Webで検索すると、すでに結構な方が授与されているようなのでそれほど希少価値ではないけれども、そういった先輩方と見かけ上は肩を並べられるという点でちょっとうれしく思いました。私が学位を取得する際に、学位なんて足の裏の米粒みたいなもので取らないと気持ちが悪いが取ったところで役に立つほどのものではない、と聞かされましたが、それに似た感覚でしょうか。それでも過去を振り返ると私がこのアカデミックの世界に足を踏み入れてから、人から褒められた大きなものとしては触媒学会奨励賞の受賞が2003年ですので、ちょうど20年ぶりに褒められた感じがしたので、これを人環に受賞と同様に報告しました。ちょうどその時、研究室の山本旭助教の触媒学会奨励賞と学生の国際会議でのポスター賞も時期が重なっていて、2024年1月18日のオンラインの研究科会議で、皆さんからパソコンの前ではありますがまとめて拍手をいただき、私も自分の居室で人知れずご受賞の皆さんと自分に対して拍手を送りながら、自分でひとり照れていました。

このフェローにどうして選ばれたのかは、人にも聞かれるし自分でも知りたいのですが、直接王立化学会に尋ねて、やっぱり間違いでした!となつては藪蛇ですから、すでにFRSCとなられた先輩方に聞いたり、自分なりに考えたりしました。端的に言えば、はじめのメールにあった「化学分野の出版に対する貢献が認められた」ということなんでしょう。私は学生時代からおよそ30年余、触媒化学・光触媒化学の研究を続けています。私が京大工学部・工学研究科の学生時代に初めて得た実験成果を当時助手の田中庸裕先生に執筆していただいた初めての学術原著論文は、RSCの当時のJournal of Chemical Society, Faraday Transactions という雑誌に1992年に速報として掲載されました。そのころは、グラフは手でトレースして紙を切り貼りして作成し、原稿はパソコンで作成したものを審査員の人数分コピーして国際郵便で提出して、その後のやり取りは時短のためFAXで行うという時代でした。このときからインパクトのある結果を短く要点をまとめて速報で出すことを好んでいたのも、表現力豊かな方(もしくは口の達者なお方)からは小ネタ王という称号までいただきました。いまだに相性のいい学会で、学術論文の出版で幾度となくお世話になってきました。これを機に数えてみたら、これまでに報告した学術原著論文250報のうちRSCから66報(うち速報20報)も報告していました。その割合は多くないですが平均すると年に2報ですから、絶対数はまあまあでしょう。総説は2008年にRSCのChemical Society Reviews誌、2011年にRSCのEnergy & Environmental Science誌に掲載され、引用回数はそれぞれ297回と310回に至っていますので、これらもそれなりにインパクトがあったのかもしれません。2023年からはGreen Chemistry誌でAdvisory board memberも務めていますので、「出版に対する貢献」はそれなりにあったようです。おそらくは、これらが数値的に評価されたのではないかと推測されます。あるいは、誰かにこっそり推薦していただいたのかもしれません。そもそも欧州の街と酒が好きで欧州で開催される国際会議があれば参加に努めてきたことや、このところ欧州以外の国際会議にも参加し、国際的な委員会とかにも出るような年齢になってきたので、知り合ったどなたかが推薦する委員会のメンバーだったのかもしれない。しかしその手の情報は全く聞こえ

てこないで、たぶんこの可能性は低いでしょう。

「英国王立化学会のフェローの称号」と聞くと、化学の歴史も古く伝統ある王国である英国で認められたということで、なんとなくすごそうに思えてきます。わざわざ居室までお越しいただいたり3月の樟友会でお会いした時に、何人もの先生方から祝福のお言葉をいただきました。全く恐縮です。人環には多くの立派な先生方がいらっしゃいますが、お互いに分野が異なり評価基準も異なり普段は評価も知りえないので、先生方のすごさが伝わりにくい印象があります。そんな中で、いわばわかりやすい冠でも頂いたような感じでしょうか。

称号を頂いたからと言って、特段に変わったことはありませんが、なんだかこれまでの研究面での努力が認められたような気がして心は少し軽くなり、多少はバージョンアップしたかもしれません。でもまだ名刺にはFRSCの文字は入っていません。もう少し自分が人として成長して板についてくれば自信をもって入れるかもしれませんが、もう少しかかりそうです。

この度は、この出来事をきっかけに執筆の機会をいただきありがとうございました。これまでを振り返り今後を考えるうえでよい機会となりました。また、これまでお世話になった方々に深く感謝いたします。次の執筆の機会を得られるように、引き続き頑張りたいと思います。

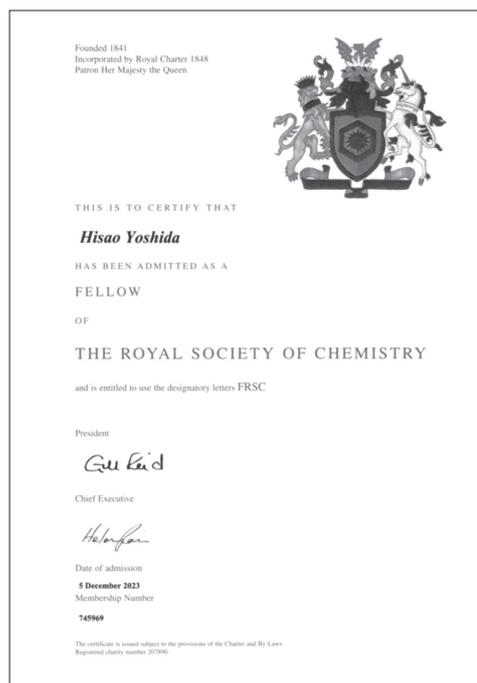


図 FRSC 授与の証書

触媒学会奨励賞受賞によせて

山本 旭 | Akira YAMAMOTO

山本 旭（やまもと あきら）
人間・環境学研究科 物質科学講座 助教

このたび触媒学会の奨励賞（2023年度）を受賞しました。本賞は、触媒に関する学術の顕著な進歩に資する研究成果を挙げた39歳以下の研究者に与えられるもので、毎年3、4名程度の受賞者がおります。過去の受賞者には、これまでに触媒分野を先導し、現在も中心的に活躍されている錚々たる名前が連なっており、大変喜ばしく思う反面、身が引き締まる思いであります。また、この度は、『総人・人環フォーラム』への寄稿のご機会をいただき、大変有難く思っています。ここでは、私自身の研究歴と研究内容、今回の受賞内容について紹介いたします。

私自身、大学の学部で研究室に配属されてから触媒の研究にどっぷりつかるようになり、以降一貫して触媒に関する研究を行ってきています。触媒は一般には少量で化学反応を促進する物質というような説明がされますが、一言で触媒と言っても、形状・機能・応用先など非常に多岐にわたり、また実際に機能しているところを見るのが少ないために、イメージしにくい部分があるかもしれません。身近なところでは、自動車から排出される排ガスの浄化用の触媒が挙げられると思います。ガソリン車等に搭載されている触媒は排ガスを流すだけで、その中に含まれる窒素酸化物や一酸化炭素などを無害なガスに変換することができるという優れたものです。また、石油などの燃料やプラスチック、食糧生産に必要な肥料などを製造する過程でも触媒はコア技術として利用されており、現在の物質社会において欠かすことはできない技術と言えます。このように社会を支える歴史のある触媒技術ですが、一方で、現在においてもその開発の重要性は増加しています。昨今では、カーボンニュートラルや資源循環などをキーワードに、持続可能な社会を構築するうえで、既存の触媒技術をベースとした研究開発や革新的な触媒技術の開発などが精力的に行われています。

今回の受賞タイトルは、「光を利用したメタン転換触媒系の開発」です。2015年に人間・環境学研究科の助教に着任し、関連環境学専攻（当時）の吉田寿雄教授にご指導を賜りながら、独自の研究を行ってきました。当時から変わらずに設定している目標は、太陽光を利用した触媒システムの創出とそれに向けた関連現象の原理解明です。受賞関連の研究テーマは、着任して3年後くらいから本格的に開始したもので、光と触媒材料を組み合わせることによる

新機能の創出に取り組むというものです。

メタンは、天然ガスの主成分であり燃料や基礎化成品の原料として利用されている重要な化学物質です。メタンの利用先としては、燃焼させて熱として利用するほかに、メタンと水を高温で触媒と接触させる方法（水蒸気改質法）で水素が製造されていたり、様々な化成品の原料となる合成ガス（一酸化炭素と水素の混合ガス）の原料となったりと、化成品原料としての利用も大規模に実施されています。一方で、メタンは他の炭化水素と比較しても非常に反応性が低いことで知られ、メタンの活性化と利用は現在でも挑戦的な研究課題です。上述の水蒸気改質法は、既に完成された化学プロセスで大規模なメタン転換が可能ですが、例えばバイオガスなどの小規模なメタン発生源での適用には課題も多くあります。この点で、低温などのマイルドな反応条件でメタンを活性化し、有用化成品やその原料を製造する反応開発が現在も多く行われています。

私は、このメタン転換に再生可能エネルギーである太陽光エネルギーを使いたいと考え、研究を展開してきました。すなわち、通常は高温を必要とするメタン転換では、この高温を得るために化石資源の燃焼が伴いますが、これをクリーンな太陽光エネルギーに置き換えようというものです。このような研究アプローチは、既に古くから行われてきましたが、私は、人類はもう少し上手に太陽光を使えるのではないかという発想のもと、「光の使い方」と「触媒材料の力」を掛け合わせた境界領域に未踏の技術シーズがあると信じ、種々の検討を実施してきました。

一例としては、光照射によって形成される温度勾配に着目しています。触媒反応では、一般的な化学反応と同様に、温度は反応速度に大きく影響します。触媒材料開発の基礎研究では、解析や解釈の容易さから一定の温度、ないしはそれに近い条件での触媒性能試験が好まれる傾向にあり、光照射を利用した試験でも、それは同様です。一方で、光照射をすると、場所によって光強度の分布が違ったり、裏表など光が当たる部分と当たらない部分ができたりして、必然的に温度勾配ができます。通常だと、好ましくない温度勾配を利用することで、今まで不可能だと思われてきた触媒反応を実現できるのではと考え、上述の水蒸気改質反応をモデルとして検証したところ、単一温度の触媒反応器では熱力学的に実現し得ない生成物分布が得られることが

わかりました。

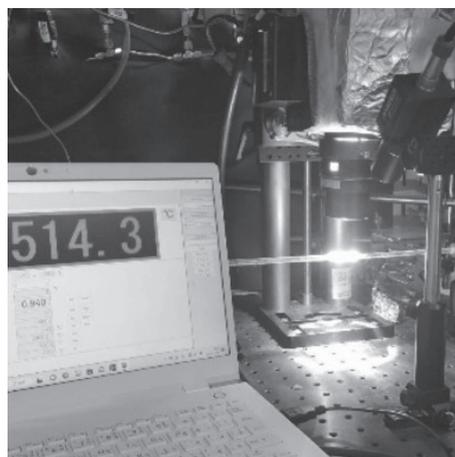
触媒プロセスを実用化するには、多数の触媒反応器を連結することは装置の大型化、複雑化の点で大幅なコスト増加につながるため、好まれません。特に、既存の大規模触媒プロセスではなく、小規模な太陽光利用型の物質変換プロセスを想定した場合には、この傾向は強くなると思います。一方で、上述の光がつくる温度勾配の利用の考え方は、多数の触媒反応器を単一のものにできる可能性を秘めていると考えています。今後は、この光形成型の温度勾配により、達成困難と認識されてきた反応群を実現し、実際の太陽光照射下で実証をしていくことが目標です。

本受賞は、当然ながら私一人の研究によるものではありません。共同研究者であり、研究やディスカッションに素晴らしい環境を整えていただいた吉田寿雄教授に心より御礼を申し上げます。また、本研究の大部分は吉田寿雄研究室の学生の皆様と共同で実施したものであり、彼ら彼女らには一緒に熱意をもって研究に取り組んでいただき、非常に感謝しています。また円滑な研究室運営を支えていただいた秘書のポニチャ友里さん、私の学部学生～大学院生時代にご指導を賜った田中庸裕先生（現：京都大学、名誉教授）、宍戸哲也先生（現：東京都立大学、教授）、寺村謙太郎先生（現：京都大学、教授）、細川三郎先生（現：京都工芸繊維大学、教授）に大変感謝しています。

最後に、人間・環境学研究科に助教として着任して以来、様々な研究分野の先生方や学生の方々とお話しする機会や、別の分野の学生の方に講義をする機会が増え、そのおかげで、私自身の見識が広がったように感じています。元々工学部出身で研究第一だった（今もですが）私にとって、そのような機会は自身の研究を少しだけ大所高所から見るようになる契機になったように思います。私の場合は、工学・理学的な技術や専門性を高めつつも、「人間」や「環境」ことを、ないしは学術越境的なことを以前よりも真剣に考えるようになったということではないかと思っています。こういった視点は、今回の受賞内容の研究の方向性にも強く影響していることは間違いのないと思いますし、この研究は人間・環境学研究科の環境により生まれたものなのだろうと思っています。



触媒学会奨励賞の授賞式の様子



光照射下での触媒反応試験の様子
数字は温度（℃）

少年の素朴な疑問から

萩生 翔大 | Shota HAGIO

萩生 翔大 (はぎお しょうた)
人間・環境学研究科、認知・行動・健康科学講座、准教授
1988年生まれ、大阪府出身。
京都大学大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。
専門は運動制御学・計算論的神経科学。

走ることへの探究

「どうすれば速く走れるのか？」——多くの子供たちが抱きそうな素朴な疑問こそが、私の研究の原点である。大学院生までの12年間、陸上競技の短距離走(400m走)に情熱を注いできた。高校時代、競技中に怪我をしたことをきっかけに、ヒトの身体や合理的な動作について考えるようになった。総合人間学部を目指した動機もそこにあり、入学後は運動科学について学びたいと考えていた。大学入学後は、体育会の陸上競技部に入部し、相変わらず走ることに没頭していた。授業を通じて学んだ運動科学や運動生理学の知識を積極的に競技に取り入れ、あれこれ試行錯誤を重ねる、そんな学部時代を過ごした。こうした経験が、ヒトの運動に対する探究心を育む基盤となった。

競技から研究へ

「競技に研究を活かすことと、研究することとは違うよ。」学部時代、運動科学を専門とする先生から言われたこの言葉から、私は学問としての研究を強く意識するようになった。当時、運動科学や生理学への私の興味は、自分の競技力を高めたいという思いが根底にあった。しかし、この言葉を契機に、「学問として研究をする」とは何か、自分の学問的な興味はどこにあるのかを考えるようになった。

そのような中、神経生理学を専門とする研究室の先生のもとで、「大腿直筋における部位特異性」をテーマに卒業研究を行った。大腿直筋は膝関節の伸展(膝を伸ばす)と股関節の屈曲(腿を上げる)という2つの役割を併せ持つ骨格筋(以下、筋)である。従来、1つの筋は部位に関係なく均一な機能を有すると考えられてきたが、ヒトの大腿直筋内部に電極を挿入して部位ごとに電流刺激を与え発揮される力を計測した結果、大腿直筋では部位ごとに異なる機能を持つことが明らかとなった。

卒業研究では、実験だけではなく、データ解析のためのプログラミングや研究室での議論、英語論文の執筆といったすべてが初めての経験であった。こうした研究プロセスのどれもが非常に楽しく、それまで陸上競技に費やしていた時間をすべて研究に注いで没頭した。一方で、卒業研究

のテーマは、指導教員の先生に設定してもらったものであり、自分自身で見つけた課題ではなかったため、自分の研究だという思いに欠ける部分があったことも否めなかった。そのため、自分の学問的な興味はどこにあるのかといった問いは、修士課程に進学してからも私の中で消えることはなかった。

学問的興味との出会い

卒業研究や修士課程での研究に取り組んだ時期は、私にとって人生の大きな転機となった。指導教員の先生からは、自由でありながら拘りを持って研究することの大切さや楽しさを学んだ。将来、研究者になることは全く想像していなかったが、研究を生涯の活動として続けていきたいと思ったのもこの時期であった。また同時に、運動をどのように学問的に捉え、考えていくべきかという視野も徐々に広がっていった。

走るという運動の能力は、エネルギー代謝や筋力など、多様な要因によって支えられている。その中でも私が特に関心を持ったのは技術面、すなわち運動をどのように作り出すのかという観点であった。運動は、筋が発揮する力によって生み出されているため、全身の筋の働きの強度やタイミングが走る技術を支えていると考えられる。しかし、ヒトの身体には数百もの筋があり、それらをどのように組み合わせるのかのパターンは無数に存在する。速く走るという課題を単純化して考えると、これら無数の筋活動の組み合わせの中から、最適なパターンを見つけ出す作業であると言える。

この視点が、運動制御における「自由度の問題」と深く関わっていることを知り、私の学問的興味の追求に一筋の光が見えた。「自由度の問題」とは、運動を実現する際に、筋や関節など非常に多くの身体要素をどのように制御するのかという課題であり、ロシアの生理学者 Nikolai Bernstein によって提起された運動制御における根本的な問いである。さらに、この問題の解決策として提案されていた“Muscle synergy (筋シナジー)”という概念との出会いによって、私の中に漠然と存在していた興味や疑問が少しずつ形を持ち、顕在化していった。筋シナジーとは、

個々の筋が独立して働くのではなく、いくつかの筋がグループとして協調的に働くことで制御が単純化されているという考え方である。この考え方は、走るという複雑な運動をシンプルに捉えるものであり、何より、私自身が競技をする中で抱いていたぼんやりとした感覚をうまく説明してくれるものであった。「どうすれば速く走れるのか」という原点の問いから始まり、自由度の問題、そして筋シナジーという考え方へとつながる道筋が、自分の中で自然と一本の線で結びついていくように思えた。この出会いは、私が自分の興味を学問としてどのように探求するのかを見出す突破口となった。

当時、計算手法の発展により、ヒトの神経筋活動データから筋シナジーの考え方に基づいて筋のグループを定量化する方法が確立されつつあった。しかし、定量化された筋シナジーの構造は単なる計算上の産物に過ぎないのか、それとも実際の運動制御の結果を反映しているのかについては未解明であった。修士課程では、筋シナジーとは何なのかという問いに徹底的に向き合い、その本質を探究することに努めた。自分の学問的興味に直結した未解明の課題に取り組む楽しさに加え、その成果が学会大会での奨励賞を受賞する形で評価された経験から、この分野を牽引する研究者になりたいという思いが少しずつ芽生えていった。

研究者としての探究

研究活動は一人ではできないなとつくづく感じる。大学院生時代は、指導教員の先生をはじめ、研究室で共に研究する仲間にも支えられた。修士課程から博士課程に進学する際、共に研究活動を続けてきた同級生たちが就職し、研究環境が大きく変化した。この時、自分は本当に研究がしたいから続けてきたのか、それとも仲間と過ごす楽しさがあったから研究をしていたのかがわからなくなり、研究するというのを改めて深く考えた時期があった。一研究者としてどのように道を切り開くべきか、一人の人間としてどのような道を歩みたいのかを、これまで以上に強く意識するようになり、研究の方向性についても試行錯誤を重ね悩んだ時期でもあった。

そんな時、筋シナジーに関する研究を進める中で、ヒトを対象とした実験だけではその本質を明らかにすることに限界を感じるようになり、神経回路モデルという数理モデルを用いた数値実験に取り組むようになった。運動制御にはさまざまな理論モデルが提唱されているが、神経回路モデルは、ヒトの脳内の神経回路や筋の特性、骨格の構造などを模して構築していくことができ、ヒトが実際に運動を作り出すプロセスを単純化して考えるためのモデルである。さらに、このモデルには学習を通して運動を獲得させる必要があり、運動の学習過程と制御過程を同時に理解することができるという特徴がある。私の研究では、複数の筋がグループとして協調的に働くという筋シナジーの仕組みを神経回路モデル内で採用するか否かで、運動の学習や制御にどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、筋

シナジーの仕組みは単に運動の制御を単純化するだけではなく、身体構造上の制約を補い、運動の学習を促進させる機能的な意義があることが明らかとなった。

“If I cannot create, I do not understand.”——アメリカの物理学者である Richard Feynman のこの言葉を借りるのは烏滸がましいが、神経回路モデルに関する一連の研究を通して、私は運動を理解するために運動を作り出したいと考えるようになった。当然、作り出せたからといって完全に理解したとは言いきれないが、理解を深めるための手段として、運動を学習し作り出していくプロセスへと関心が広がっていったのである。

大学院修了後は、ポスドクとして運動学習や運動制御理論を専門とする東京大学の先生のもとで研究活動に励んだ。この先生は、私が大学院生時代に神経回路モデルに関する研究を行っていた際、最も熟読していた論文の著者でもあった。その先生のもとで、運動制御理論や数理モデルをさらに学ぼうという思いを抱いていたが、その先生が何よりも重視していたのはヒトを対象とした実験であった。制御理論や数理モデルは、ヒトの運動を簡潔に説明するための理論であり、推定値に過ぎない。制御工学やロボティクスの分野では、それが目標となる場合もある。しかし、私が真に理解したいのは運動であり、ヒトである。数理モデルにのめり込むあまり、少し実験を疎かにしていた部分があったかもしれない。非侵襲的にヒトの脳が運動を作り出す仕組みに介入する実験手法を学ぶ中で、自分の学問的視野が大きく広がっていった。ポスドク時代の研究活動を通じて、運動制御理論を適度に活用しながらヒトの本質的な運動の理解を目指していくという、自分の研究の軸が改めて明確になったと感じている。

現在は、運動制御における自由度の問題に対し、筋シナジーに限らず多角的な切り口で研究を進めている。特に、これまでは、立位や歩行など下肢の運動や、上肢の運動といった基礎的かつ部分的な運動を対象としてきたが、さらに高い自由度を有する全身の運動へと対象を広げ、ヒトの運動制御の包括的な理解を目指して研究している。多様な興味を持つ学生たちとの研究を通じて、さまざまな運動の研究にもチャレンジしながら、刺激的な研究生活を送っている。

おわりに

研究活動に時間を費やす中で、しばらく自分が走ることから遠ざかっていた。しかし、最近また走る機会が増え、何か目標があればという思いでフルマラソンに出場している。走っている時、ふと気がつけば、どうすれば少しでも効率的に速く走れるのかを考えている。その時間は昔と変わらず、とても心地よい。一方で、研究においては、不思議と今は、速く走るための答えを最短距離で知りたいという思いはない。むしろ、その答えを知ったとしても、どうすればその動作を習得し、体現できるのか、さらには、そもそもなぜ走れるのかといった運動制御の本質を明らかに

したいという思いの方が強い。

私の研究の原点は、あの日の素朴な疑問——「どうすれば速く走れるのか？」である。この問いは、単なる競技力

向上のための思索を超えて、運動制御を探究するエネルギー源となって研究の中核に生き続け、今もなお私を前に進ませている。

言語学習と言語研究を行き来する

堀口 大樹 | Daiki HORIGUCHI

堀口 大樹（ほりぐち だいき）

人間・環境学研究科言語科学講座准教授

1984年生まれ、群馬県出身。2013年東京外国語大学大学院博士課程修了。専門はスラヴ語学、バルト語学。

原点としての言語学習

言語に興味を持ち始めたのは中学校3年生の時であった。キシリトールガムのCMで、「あなたには虫歯がありますか？」という質問に対して、フィンランドの人々が「いいえ」と答えていく。CMではフィンランド語と日本語の字幕が同時に出ていた。ヨーロッパの言語では「いいえ」は、nの音ではじまる言語が多いだろうが、フィンランド語ではeiとなっていたことに漠然とした興味を抱き、独習書で勉強を始めてみた（その後、eiは否定動詞の変化形であり、「いいえ」というよりは「ない」であることを知った）。同じ頃、NHKのテレビ講座やラジオ講座でフランス語とロシア語も勉強するようになった。フランス語に関しては、ブランド名や店の名前でも多用されるフランス語の意味を知り、正しく発音できるようになりたかった。ロシア語に関しては、キリル文字や響きに憧れたこと、ロシアは隣国なのに謎めいていた国だったことが理由である。私はスポーツ観戦が好きなのだが、ロシアのアスリートが見せる強さと国を背負う悲壮感のような、光と影にも惹かれた。今こうして文字にしてみると、初修外国語として言語を選択する学生の理由とさほど変わらない。

ラトビア語を始めたのは、確か高校1年生の終わり頃であった。旧ソ連の国々に興味があり、色々調べてみると面白そうなのがラトビアであった。東京に遊びに行った折、輸入書籍を扱う書店で、英語で書かれたラトビア語の教科書を買って勉強を始めてみた。その後、学校帰りの書店でバルト3国の旅行ガイドブックを立ち読みしていた時、ラトビアで日本語を教えている学校があることを知る。日本から遠く離れた国で日本語が勉強されていることに驚き、その学校宛に日本語とラトビア語で手紙を書いてみた。しばらくすると、そこの生徒から上手な日本語で返事が来た。その後、2言語で同じ内容を書く文通が始まった。

私の場合、今でも言語学習の延長線上に言語研究がある。語彙や文法を学び、その言語を実際に見聞きし、話す中で、言語研究に役立つ気づきをたくさん得られる。言語を学ぶことで、言語研究のアンテナが養われるのである。大学教員となった今でも言語学習を日課としており、今年もラトビア語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語を毎日

15分間ずつ勉強することを課している。日々の授業の準備や研究、学内外の仕事に追われると、これが意外と難しいのだが。

ラトビア語研究

学部時代はロシア語専攻であったが、大学院時代はラトビア語の研究に勤しんだ。とりわけ関心を持ったのが動詞に付加される接頭辞であった。動詞接頭辞は空間的な意味、動作の開始や完了、多さや少なさ、強さや弱さを示す。例えば動詞lasīt「読む」に対してizlasīt「読みきる」、pārlasīt「読み返す」、aizlasīt「読みふける」、palasīt「少し読む」など。接頭辞pa-は動作の少なさや軽さを示し、日本語の「ちょっと」と似ているほか、「…してみる」という試みのニュアンスも持つ。動詞接頭辞は既存の法則に従って動詞に付加され、新しい動詞が生産的に作られていく。例えばパンデミックの時には、これまであったvakcinēt「ワクチン接種をする」に接頭辞が付加されたnovakcinēt「ワクチン接種をする（完了）」、savakcinēt「（大勢に、皆に）ワクチン接種をする」などの派生語ができた。接頭辞はこのような借用語の動詞にも付加される。中にはapdriblēt「ドリブルで（誰かを）かわす」（接頭辞apは「凌駕」を示す）のように、辞書に掲載されるほどの頻度では用いられない動詞もある。初めて見るが、特定の文脈で意味を推測できる派生語と出会うたびに、派生が持つ言語の創造性に惹かれていった。

ラトビアは小さい国であるがゆえ、ラトビア人はラトビア語を大切にしている。ラトビア人の言語学者は、ラトビア語を守り、その方向性を決める“言語リーダー”的役割を果たしており、社会も言語学者にそのような役割を期待している節がある。言語学では、言語がどうあるべきかを言語学者が判断、主張することは好ましくなく、ありのままを記述するべきであるという考え方が主流である。これを記述主義という。一方で言語学者が言語を“正しい”“誤り”などの基準で判断、主張することを規範主義という。ラトビア言語学では伝統的にこの傾向が強い。規範主義の観点からよく批判されてきたのが、借用語の動詞に完了の意味を持たせるために様々な接頭辞を付加することであった。その理由は、借用語の動詞は文脈により完了の意味を

持ちうるので、接頭辞付加は不要だからとのこと。どの接頭辞がどの借用語の動詞に完了の意味を付加しやすいのか？動詞への接辞付加が“無駄ではない”と言える場合はないのか？現地の研究者がやろうとしなかったことを記述主義の観点から分析することにし、博士課程ではラトビア語の新聞データベースで用例とにらめっこをする日々であった。

博士課程3年目の後半には、4か月間ラトビアに留学する機会を得た。留学の目的は明確で、母語話者の研究者たちに意見を伺い、博士論文の構想を再確認し、細部を仕上げることであった。現地の学部生が履修するラトビア語学の授業も聴講させてもらったことは、外国人としてラトビア語を研究する者にとって貴重な体験であった。

大学院時代は、駐日ラトビア大使館でラトビア語教室の講師をする機会に恵まれたほか、ラトビア語の通訳や翻訳、両国の民間の文化交流のお手伝いをした。自分の言語の知識を通じて、大学の外の社会とつながっていたことは、大学院生だった自分にとって刺激でもあり支えでもあった。

ラトビアの言語状況

ラトビアはソ連からの独立回復後、ラトビア語を推進する強力な言語政策を実施してきた。これはラトビア人と、ソ連時代から暮らすロシア語話者の間に言語的な軋轢を生んできた。ラトビア人はラトビア語を話す外国人には「ラトビア語が話せるんですか？うまいですね」と非常に好意的な一方、「ラトビアに何十年も住んでいるのにラトビア語を話せない、話そうとしない人もいますよ」と一部のロシア語話者を批判することが多い。

ウクライナ侵攻後のラトビアではロシア語離れが加速している。そんなラトビアの言語状況の中に新しく加わったのがウクライナからの避難民である。ラトビアはソ連に占領された経験から、ウクライナを強く支持し、避難民を積極的に受け入れている。避難民向けの情報はウクライナ語で発信されることが多いが、実際の避難民とのコミュニケーションではロシア語が共通語として用いられていることが多い。

この原稿を書いている2024年9月後半には、ラトビアに暮らすウクライナ避難民23名に対してインタビュー調査を行った。ウクライナで彼らは何語を話してきたか、避難先のラトビアでは何語を話しているか、彼らがラトビアの言語状況をどのように見ているのかを尋ねた。ウクライナ語はこの数年間細々と勉強してきたが、この調査のために、1か月半オンラインの個人授業でウクライナ語の特訓をした。先生は、現在ロシアが占領しているマリウポリからラトビアに逃れたウクライナ語教師の女性である。ロシア語ではなくウクライナ語で話すことで、インフォーマントたちが私に少しは心を開いてくれたならうれしい。

ウクライナのアスリートが語る言語問題

今年に入ってから、戦時中のウクライナのスポーツメ

ディアにおいて、ウクライナ語とロシア語の問題がアスリートやコーチによってどのように語られているかを研究している。ウクライナでは、簡単にまとめると、西部はウクライナ語、東部と南部はロシア語が主に話されてきた。侵攻後、ウクライナ語はウクライナ国民のアイデンティティーの重要な要素となり、ロシアへの抵抗の象徴ともなっている。その結果、これまでロシア語を話してきた人々が自発的にウクライナ語をより話す現象が見られる。

ウクライナのスポーツ界は伝統的にロシア語が優勢であったと言われることがある。これには、東部や南部出身のロシア語話者のアスリートが多いこと、国内で人気のあるサッカーなどのチーム競技ではこれまでウクライナ語話者がロシア語話者に言語を合わせる傾向があったことなど、様々な要因が考えられる。しかし侵攻後は「自分は今からもっとウクライナ語を話す」と語るロシア語話者のアスリートが増えている。国を代表するアスリートによるこうした発言は、今のウクライナにおいて国家と言語が強く結びついていることを示すとともに、言語問題が社会にとって重要なトピックであることを改めて表している。

ロシアのスポーツディスコース

もう一つ、スポーツに関わる言語研究として、ロシアのスポーツディスコースの研究に取り組み始めた。現在ロシアのスポーツ界は、ウクライナ侵攻による主要国際大会からの除外と国家主導のドーピングによる制裁に揺れている。こうしたトピックを扱うメディアのテキストはもはや競技そのものを語らず、強く政治化されている。こうしたロシアのスポーツディスコースには、自己犠牲化と他者の敵化というロシア政府が用いるレトリックがちりばめられている。このレトリックを支えるのは、ルソフォビア（反露感情）のフレームである。現在のロシアの政治ディスコースでは、自国の利益に反する欧米諸国の行動はルソフォビアの表れとして説明され、描かれる。侵攻開始以前と以後の2年間を比較すると、ロシアのメディアにおいてルソフォビアに関連する様々な語彙（名詞「ルソフォビア」や「ルソフォブ（反露主義者）」、形容詞「ルソフォビアの」など）の使用は約2倍増えた。スポーツメディアにおいては5倍増加しており、スポーツ界におけるロシアへの制裁が（ロシアの言い分によれば）欧米諸国のルソフォビアを通じて描かれている。そのほかには、ロシアの政治家やコーチ、アスリートによる国際五輪委員会や海外選手を指す際に用いられる過度に誇張された攻撃的なことば遣い（ディスフェミズム dysphemism）の用例を収集している。このテーマを通じて、全体主義化した戦時下のロシアを注視していきたいと考えている。

中谷森＝著

評者・小嶋ちひろ

(三重大学准教授)

『シェイクスピアと日本語
——言葉の交通』

春風社

定価 3,500円 (税別)

2024年2月刊 265頁



本書は、日本のシェイクスピア受容における、翻訳・翻案という営みをきわめて実験的かつ創造的な言語的試みとして提示するものである。明治時代にシェイクスピアが紹介されて以来、翻訳は常に日本のシェイクスピア受容と共にあった。しかし、著者が指摘するように、翻訳の言語表現そのものについての研究は少なく、また翻訳・翻案研究において、翻訳はシェイクスピアの原文から日本語へと、その意味内容をそのまま移しとる行為と考えられてきた。すなわち日本語は「透明な」媒体としてしか認識されてこなかったのである。そのような状況を打破すべく、本書は、シェイクスピアの翻訳・翻案作品の中で、言語表現において実験的試みを行った作品を取り上げ、それらの作品がシェイクスピア作品との関わりの中で、独自の日本語表現を追求したことを明らかにする。それぞれの翻訳・翻案作品において、日本語が確かな実体をもって立ち現れ、シェイクスピア作品の言葉と「交渉」する諸相を描き出している。

本書の構成は、以下のようなものである。第1章で日本のシェイクスピア翻訳・翻案の歴史を論じたのち、第2章から第5章まではシェイクスピア作品の翻訳・翻案作品を一つずつ取り上げ、それぞれについて日本語とシェイクスピア作品との豊かな邂逅について論じている。

第1章では、明治から現代に至るシェイクスピア受容の批評と実践の歴史を概観している。最近の受容研究が上演を重視し、翻訳における言語表現への関心が下火になっていることを指摘し、文化交渉の場としての翻訳・翻案という議論の枠組みを構築する。

第2章は、文芸評論家小林秀雄による『おふえりや遺文』を取り上げる。『ハムレット』のオフィーリアの遺書のような形式を取る本作品において、言葉が、「おふえりや」の意識を映し出す媒体としてだけでなく、彼女の自己表現を阻む「不透明」で物質的なものとして立ち現れる様を明らかにしている。そして小林のそのような言葉への態度は、言葉が内面を必ずしも伝えるものではないという『ハムレット』の問題意識と接続するものだと指摘している。

第3章では、西洋の模倣として片付けられてしまってきた福田恆存の『ハムレット』の翻訳上演について、改めて翻訳そのものに着目することで、日本の新たな劇言語を確

立しようとした福田の模索を明らかにするものである。日本語の特性への深い理解の元に、『ハムレット』という物語の展開に即したリズム、文末、言葉を追求した、福田の創造的な行為としての翻訳が浮かび上がる。

第4章では、劇作家として有名な木下順二の『マクベス』翻訳において、特に冒頭の有名な魔女の場面における押韻の技法を分析する。当初は原文の脚韻の模倣にとどまっていた木下が、およそ20年もの歳月をかけて、日本語の性質に立ち戻り、意味と無意味の相克という『マクベス』の主題を日本語ならではの押韻技法によって再創造した、そのプロセスを克明に描き出す。

第5章は、現在静岡芸術劇場 (SPAC) の芸術監督として活動する宮城總が2005年に上演した『ク・ナウカで夢幻的な「オセロー」』を取り上げ、本作の謡曲台本を、夢幻的な言語形式に沿って脚本と上演の両面から分析している。さまざまなテキストからの引用で織り上げられている謡曲の言葉は、シテのデズデモーナを一個の主体として構築しているのではなく、オセローとデズデモーナという加害者と被害者の感情が融合する場として立ち上がらせていることを明らかにする。

本書は、作品の選定にいささか一貫性が欠けるものの、日本におけるシェイクスピア翻訳・翻案の豊かな創造性について目を開かせてくれる一冊である。本書の数ある特長の一つとして、それぞれの翻訳・翻案作品の一つの版のみを分析するのではなく、改訂を重ねるプロセスを、独自の言語表現を目指す試行錯誤の過程として掘り取り分析しているところが挙げられる。本書では、悲劇の翻訳・翻案作品しか取り上げられていないが、言葉遊びが横溢するシェイクスピア喜劇の翻訳・翻案はどうなるのかといった関心も呼び覚まされた。博論が元となっているということもあり、シェイクスピア作品にある程度明るい読者が想定されているが、翻訳、あるいは外国語作品の日本受容に興味のある人ならぜひ手に取ってもらいたい。

* 中谷森さんは、2019年4月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学、2022年3月博士号取得。現在、津田塾大学学芸学部英語英文学専任講師。

福田安佐子=著

評者・西山智則

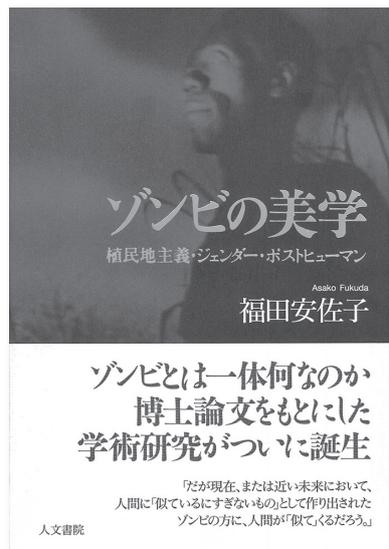
(埼玉学園大学人間学部教授)

ゾンビの美学

人文書院

定価 4,950円

2024年3月刊 274ページ



本書170ページのチフスのメアリーの図版を見たとき、四人が死亡した1988年の和歌山毒物カレー事件を描いた『マミー』（二村真弘監督、2024年）が頭をよぎった。7月20日の夏祭りのカレー鍋に被疑者女性がヒ素を混入させたこととされ、2008年に死刑が確定するが、現在でも冤罪疑惑が指摘されている。彼女（はは）は毒を入れたのか。『マミー』で二村監督や被疑者女性の息子はそう問う。

チフスのメアリーは無症候性キャリアだと知りながらも、家政婦を続け人々にチフスを感染させた感染源とされる。メアリーが呼吸から骸骨をフライパンに吐きかける様子が図版に描かれる。だが無症候性キャリアはほかにもおり「メアリーのみが、生涯の半分以上を隔離されなければならず、また感染症を悪意でも拡めるものの象徴のように扱われた」(169)。メアリーはアイルランド系移民女性だった（カレー事件の被疑者も「よそ者」である）。アダムを知恵に感染させたイブから、都市伝説「エイズの世界によるこそ」のように、女性はよく感染源に繋がられるが、四章は「ゾンビ映画におけるヒロインと女ゾンビ」の分析になる。

2019年にマキシム・クロンプ『ゾンビの小哲学—ホラー映画を通していかに思考するか』を翻訳した福田氏の本書は、2021年の京都大学提出の博士論文を加筆修正したものである。本書の一番古い章は2016年、2017年の「ゾンビはいかに眼差すか」は四章の原型で福田氏の恩師岡田温司先生の研究室紀要『ディアファネース』に掲載され、拙書『ゾンビの帝国—アナトミー・オブ・ザ・デッド』（2019年）でもあげさせていただいた。

一章、二章は『ホワイトゾンビ』（32年）『私はゾンビと歩いた』（43年）をハイチの歴史から読み解く。1930年代は『フランケンシュタイン』（31年）『魔人ドラキュラ』（31年）『キングコング』（1933年）が公開された「恐慌・恐怖」の時代だった。株価大暴落を起こしたウォール街をキングコングが破壊した110年後、関東大震災から100年後の2023年、経済成長が潰え「マイナス」ばかりの日本で『ゴ

ジラ-1.0』がヒットしたが、貴族のドラキュラと違い、大恐慌時にゾンビが労働者として登場した意味を解き明かしている。本書が個性のない奴隷ゾンビと呪術師の傍の個性的な五人のゾンビにも注目しているように、ゾンビの集団でお気に入りの探すのは楽しい。2019年の『ゾンビ』日本初公開復元版公開記念の40周年イベントでは、ファンお気に入りのゾンビの投票があった。ゾンビ集団は職業、国籍、宗教の多様性を示すが、本書にも人気を集めるハレー・クリシュナ教徒ゾンビの図版がある（120）。

本書の白眉は『ゾンビの小哲学』を翻訳後に書下ろした五章『「ワールド・ウォーZ」における新しいゾンビ』だ。ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言」に代わる「ゾンビ・マニフェスト」に触れ、二項対立を無効化するゾンビを「ポストヒューマン」的身体として論じ、『ワールド・ウォーZ』が「感染源（はんにん）」探しを軸とする感染映画と一線を画す作品とする。

終章は携帯の電波からゾンビの感染が起こるステイヴン・キング『セル』を扱う。SNSでヘイトが拡散する時代に重要な章だ。メキシコとの万里の長城に拘るトランプが大統領に就任した2017年、『猿の惑星—聖戦記（グレートウォー）』では人間が猿に強制労働をさせて戦いに備え壁を建築し、『グレートウォール』においては万里の長城が怪物と戦うために建設されたことが描かれた。2024年大統領選挙テレビ討論会時に、トランプはオハイオ州スプリングフィールドでハイチ系移民がペットを食べていると発言した。ゾンビ映画の枠組みで政治を考える彼の憎しみは、どこまで、そして誰に飛ぶのだろうか。

*福田安佐子さんは、二〇一九年三月人間・環境学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、二〇二三年三月博士号取得。現在、国際ファッション専門職大学国際ファッションクリエイション・ビジネス学科助教。

西島順子＝著

評者・丸山敬介

(同志社女子大学 特任教授)

『トゥッリオ・デ・マウロの民主的言語教育
イタリアにおける複言語主義の萌芽』

くろしお出版

定価 3,630円 (税別)

2024年2月刊 192頁



本書の目的は、そこに暮らす者が互いを認め合い等しく社会参加の機会を得ることの大切さ、その装置としての政策・その手段としての教育の重要性を訴えたデ・マウロの存在を知らしめることにある。

第1章では、イタリアにおける単一言語政策の不徹底さを明らかにしている。国家としては1861年に統一されたものの、言語の面ではそれぞれ個別の言語を話す小国家が共通言語を持たないまま併存している状態であった。フィレンツェ語が教養ある階層に共有されていたことから共通語として認識されてはいたが、その学校教育での徹底を図ろうとしたガザーティ法・コッピノー法をもってしても地方語は勢力を保持し続けた。さらに、ファシズム政権になっても、それが民衆階級や農民の支持を獲得するための郷土主義を掲げていたゆえに共通語の徹底は果たせなかった。第2章では、そうした多言語併存状態・共通語教育失敗の中から plurilinguismo (複言語主義) という概念が出現し肯定的に見られていく経緯を述べている。plurilinguismo は、1950年代に方言や俗語・位相語などを交えた文芸作品を指すことばであったが、それを借用し言語学・言語教育・言語政策における術語としたのがデ・マウロだとする。そのデ・マウロの plurilinguismo の概念を詳しく検討したのが第3章で、彼は、ソシユール、グラムシを基盤にして「複言語状態」「複言語政策」「複言語能力」として収斂させ、さらにグラムシの思想を実現するものとして「複言語教育」(＝民主的言語教育)へと発展させていった。さらに第4章では、その実践として、デ・マウロを中心とした文献から教師の意識改革・指導法の例示・言語能力評価指標を提示している。評価指標では、言語の社会におけるバリエーションを具体的に示すことで、共通語を話さない個々人にも適正な座標を与えそれがさまざまな位相をもって高度なイタリア語に発展していく可能性を示した。

なじみのないイタリア事情が語られているにもかかわらず、論は読者に寄り添い無理がなく事例は具体的で冒頭の目的は十分に果たされている。言語が生み出す社会格差、単一価値観からの脱却による弱者の救済、個人の中のことばの多様性などといった考察は、言語機能の社会性をこれまであまり語られてこなかった視点で指摘しており秀逸である。CEFRを発表する欧州評議会に先んじてそうした思索がイタリアでなされ試みられていたことは驚きに値するが、それを対象に据えた慧眼とデ・マウロの思想・業績、そして生い立ちにまで言及して人となり論述しきった著者の意欲と力量には並々ならぬものがある。

しかしながら、それゆえ著者の思惑を超えて、今日の日本語教育再考を読者に求めてくる。戦後の日本語教育に転換をせまった契機は三度ある。83年の「留学生10万人計画」、90年の日系人の導入、そして19年の外国人材開放である。その都度日本語教育は社会的な役割を担ってきたが、現在の日本語教育は外国人材受入れのための環境整備の一環として位置付けられている。けれども、そこに10年後20年後の日本社会をともに作っていく人材育成としての発想がどれだけ盛り込まれているか。日常生活のためのツールの獲得で終始し、どんなことばを話すか話してきたかが人のアイデンティティを形成することなど視野の外に置かれてはいはしないか。「労働者を呼んだのに来たのは人間だった」という60年前のヨーロッパの教訓を、真の意味で今の日本は自らのものにしたのかが問われている…、安易な比較は軽率に過ぎるが、そんなことまで考えさせられる好著である。

*西島順子さんは2020年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学、2021年7月博士号取得。現在、大分大学教育マネジメント機構准教授。

郭旻錫＝著

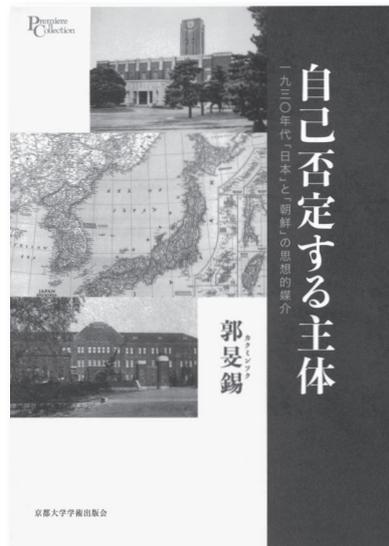
評者・テン・ヴェニアミン
(京都産業大学外国語学部 講師)

『自己否定する主体 一九三〇年代 「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』

京都大学学術出版会

定価 4,840円 (税別)

2024年3月刊 332頁



帝国と植民地の関係を、加害者と被害者の関係だけで考えることは十分であろうか。帝国と植民地の関係を支配／従属という二項対立の構造で把握することはもちろん可能である。それによって、支配者側の暴力に対して、被支配者側の抵抗と開放の問題が浮上し、またその副作用として敵対協力 (collaborationism) という問題も浮かび上がってくることは容易に想定できるだろう。しかし、帝国と植民地のあいだで起こりうる非常に複雑な多数の問題群を、そこまで簡単な構造に還元してしまっても良いのだろうか。

以上の構造からもれた人々や思想をどう位置付けるかという問題も生じる。事実、数を問わなくても、そうした存在が帝国と植民地において見られたはずである。帝国の影響下で暮らしていた彼ら／彼女らの経験を排除するのではなく、すくいあげる理論が求められているように思われる。

本書では、かつて帝国と植民地という歴史的過去を共有した日韓関係を対象とし、既存のポストコロニアリズムの理解を真正面から問い直している。本書は「帝国日本の思想」という新たに提示された視座の下で、1930年代の日本と韓国 (当時、朝鮮) の哲学や文芸批評、文学の言論を読み解き、内地と植民地の思想的媒介といった過程を、綿密かつダイナミックに明らかにした労作である。「帝国日本の思想」という視座は、日本内地の思想と植民地朝鮮の思想における歴史的な影響関係の叙述を可能にするだけではない。本書は日韓関係の思想を描く際に、その前提自体を「思想的な媒介」として捉え直し、その媒介の探求という方法論で、1930年代の昭和思想の新しい肖像を描くことを目指しているのである。

本書は日韓関係に関心がある者のみならず、グローバルな文脈で帝国支配における本国と植民地の精緻な関係に関心をもつ読者にとっても、豊富なヒントを含む内容となっている。以下では、本書の特徴を二つあげておく。

第一に、東アジアの「主体」への深い洞察である。朝鮮を含む帝国日本の近代化という課題は経済的な産業化や政治的ナショナリズムだけでなく、「哲学的な問題としての近代化」とも密接に関わっている。1930年代の帝国日本

で創造された「主体」概念は確固たる個として固定される西洋的「主体」とは異なり、内地日本と植民地朝鮮のあいだで媒介的に練り上げられたものである。著者はそれを「自己否定する主体」として捉えようとする。日本哲学者である田辺元の「種の論理」はその例の一つである。強い否定性をもつ田辺哲学は内地にとどまらず、植民地朝鮮の哲学者朴鍾鴻にも大きな影響を与え、またとりわけ「種の論理」は朴鍾鴻哲学を理解する上でも決定的に重要な意味をもつ。なぜなら、朴は一方向的に影響を受けただけではなく、自身の「ウリ哲学」によって田辺の課題を克服しようとしていたのだから。

第二に、戦前戦中期の昭和思想に対するイデオロギー的な裁断を排除するように努めた学術的姿勢である。日韓関係を語ろうとする場合、とりわけイデオロギー的な問題が我々の目の前に数多く立ちはだかるものである。本書では、日本と朝鮮の知識人の思想に対する評価は戦前と戦後にドラスティックに変わるものの、彼らの思想を「断絶」として捉えることはなされない。そうではなく、歴史的な事実を真摯に踏まえながら、当時の思想家が置かれた政治的な状況を直視し、彼らの思想の内面的論理を丁寧に深く分析することで、それを媒介的に「連続」させていくのである。

本書の「思想的媒介」という方法論は、過去の出来事を忘却に沈めてしまわないよう、我々の記憶に残すための仕掛けであるように思われる。日韓関係から出発して、これから中国や台湾などの東アジアでどのように「自己否定する主体」が解釈されていくのか、評者は楽しみにしている。

* 郭旻錫さんは、2023年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科常勤講師。

張詩雋＝著

評者・正垣雅子

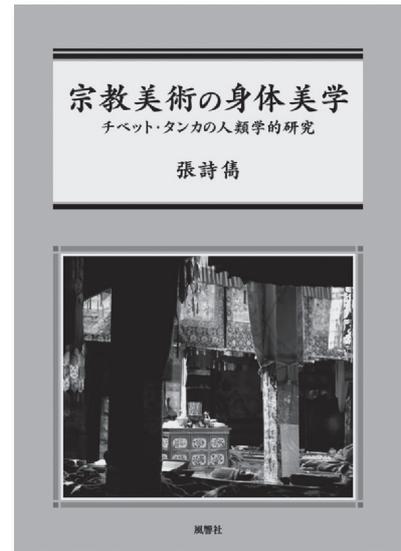
(京都市立芸術大学 / 大学院 日本画専攻准教授)

宗教美術の身体美学 —チベット・タンカの人類学的研究

風響社

定価 4,000円 (税別)

2024年3月刊 312ページ



絵画を含む美術作品について検証する時、作品というモノに対して様々な切り口から分析がなされる。誰が制作したのか、表現や図像等の意味、材料や技法、制作年代や背景、モノが伝承した状況などに対して、別のモノとの比較や文献と照合、モノへの科学分析などで考察される。私は、日本および東洋の古典絵画の現地調査を行い、模写制作を専らとする画家であるが、このような研究手法から編み出される説明に、物足りなさを感じることは度々あった。例えば、絵画作品の色について言及がなされる時、単に色名を指すのか、顔料名なのか判然としないことは少なくない。絵画制作現場の詳細は、描いた本人の語りに耳を傾けたいと思うが、言葉を残す画家ばかりではないし、自身の制作行為を客観的に振りかえることが情動的に難しいこともある。美術作品は、人が生み出したモノであるという前提と実感から、人の動態を取り除いた考察に、やや乾いた印象を抱いてしまいがちな私は、本書に美術研究の新たな切り口を感じた。著者は、文化人類学者として、神仏を表象したタンカを信仰する社会に滞在し、取り扱う人、礼拝する人、絵筆を執る人の傍で耳を傾けている。それら事例の数々は、読者が共感できる、できないに関わらず、臨場感が伴ったものであることに異論はないだろう。各章で、タンカに関する先行研究やチベットの歴史と社会を紹介し、自身の調査を解釈、総括する著者の深い思索が展開される本書は、美術作品であるタンカをモノ単体ではなく、制作者と社会との関係という新たな視座での検証を促している。

序論で、現代文化人類学のモノ研究について、先人たちの理論と思索の変遷が紹介され、本書でタンカを論じる視座が明確にされる。親切な序論に感謝しつつも、門外漢の私が読解するには骨が折れた。読みながら、現代文化人類学者らの理論を総合的かつ簡潔に説明できる著者の見識の高さに敬服した。

第I部：神仏の肖像では、チベット仏教文化圏で制作され続けているタンカについて、その歴史を整理した上で、タンカの在り様、制作者側の修得内容と実践が細かに紹介

される。文化遺産としてのタンカを単体で取り上げ、美術という地図の位置付けを試みると、様式という大雑把でかつ定型化に陥る恐れがあるが、本書は発願者、制作者の心構え、身体行為の結実としてのタンカが、民族、地域、時代等に区分されることや視覚的に分類することを勧めてはいない。タンカ制作に関わる多くの決まりごと、タンカが介在する宗教実践と理念を反映した規律は、個人の身体、精神の向上との相関がある。彼らが、意識的に保守することは、神仏の尊崇への自律であり、修得に努力を怠らない姿勢が伝わってきた。それが、タンカの独自性であり、絵画としての性格を決定づけていると感じた。

第II部：近代化の中で再編される「チベット・タンカ」では、第I部で紹介されたチベットの精神世界やタンカの神聖性が近代国家の社会制度に組み込まれていく現在進行形が紹介される。社会構造と思想の変化は、チベットの地域的、文化的特殊性を資源とみなし咀嚼している。当事者が無自覚ではいられない状況変化を、筆者は俯瞰的な立場から観察し、チベットにおける宗教実践と美術、神聖性と身体行為の相関が保たれるのか、変容するのか、今後の動向への着目を促している。

美術作品が社会に受容されるということは、その社会が有している美意識がこれまでを肯定し、これからに望みを託す意欲の表れと言える。画家の意識と身体から生まれるモノが語ることに親身な眼差しで接する研究が盛んになることを期待している。

*張詩雋さんは、二〇二一年三月 人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年十一月 博士号取得。現在、北京大学社会学系社会人類学研究所研究員。

安藤加菜子＝著

評者・足立幸男

(京都大学名誉教授 京都市立大学客員教授)

『在宅育児手当の意義とあり方 自治体による新たな現金給付とその可能性』

ミネルヴァ書房

定価 5,500円 (税別)

2024年4月刊 304頁

育児休業給付は、子供の世話をすることによって親が失う所得や就労継続上の不利益の補填を主要な目的とする国の事業であり、その対象は正社員やそれに準ずる雇用身分にある人（雇用保険加入者）に限定されている。それと対照的に、在宅育児手当は、保育所を利用しないで子供の世話をするという行為それ自体を支援の対象とし、世話をする人もしくは世帯に対して一定期間、一定額の金銭を支給するという、自治体レベルの事業（の総称）である。育児休業給付の非対象者にも支給されるという点にその最も重要な特徴があるのだが、国の事業でないため、2019年10月に本書の著者が実施した調査によれば、今のところわずか50の団体にしか導入・実施されていない。うち2つは県、残りのほとんどすべては地方の比較的規模が小さく人口も少ない市区町村である。支給額も、月額5千円未満から5万円超（大半は1万円から3万円の間）と、かなりの幅がある。支給の条件もまちまちであり、育児休業給付を受給している世帯や一定以上の収入がある世帯を支給対象外とするところもある。多子世帯であることを条件とするところもある。支給期間も、その多くは誕生から1歳までであるが、就学時まで支給するところもある。本書は、内外の関連先行研究の周知なレビューと事業実施団体が公表している関連情報の精査に加え、密度の濃い訪問調査とくに事業実施部局の職員との面談・聞き取りを通して、我が国における在宅育児支援事業の現状（とくにその多様性）と実施上の課題についての精度の高い情報を提供しようとした野心的な力作であり、少子高齢化社会における育児支援のあり方を考えるための必読文献の一つとして永く読み継がれるものと、評者は確信する。

保育所を利用せず——利用するにしても、どこまでも補助的なものにとどめて——在宅で子供の世話をすることには耐え難いほどに大きな責任と犠牲が伴うが、その「見返り」も決して小さくない。子供の笑顔を見るだけで親は幸せな優しい気持ちになれるし、ときとして「暴君」と化す子供を宥め叱り「納得」させることに四苦八苦するという体験を重ねる中で、他者への共感能力やコミュニケーション

ン能力、時間管理能力等も格段に向上する。子供の世話をすることは親の責任・義務であるが、同時にまたすべての親に対して実質的に保障されるべき権利でもある。

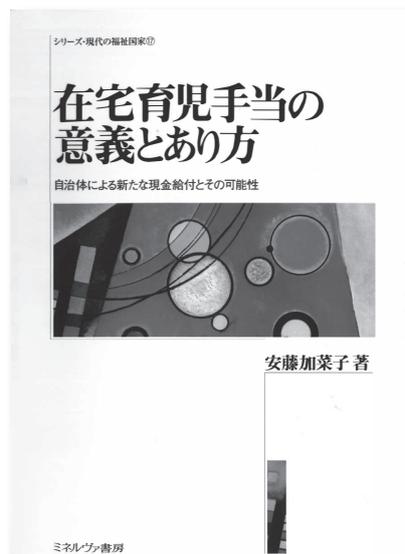
その一方で、働くこと（勤労）もまた、すべての人にとっての権利であると同時に義務でもある。子育ての最も大変な時期（誕生から1歳の誕生日を迎える頃まで）を何とかやり過ごしていくらか心と体にゆとりが出来た親には、徐々にではあれ、無理のない範囲で無理のない仕事に戻ってほしい。あるいは、大学や大学院等での「学び直し」を通してキャリア・アップやキャリア・チェンジを果たしてほしい。

仕事一筋の人生をよしとする人は、むろんそうすればよい。しかし、困難を承知で敢えて結婚・育児と仕事の二兎を追いかめたいと願う「健気」な人には、著者のいわゆる「働き方の葛藤」に苛まれることなく困難に挑戦し、そのいずれをも自分なりに納得のゆくまでやり遂げること、その努力をこそ社会は支援し奨励せねばならない。

在宅育児への普遍的な経済的支援を、評者は、本書の著者と同様、必要不可欠と考える。だが、それは、いわば「密室」で子育てに孤軍奮闘し疲労困憊している方々とくに女性の労を社会として認知し、その労にいささかなりとも報いたい（エールを送りたい）という社会の意志の顕れとしてであって、家事と育児の主要な担い手（良妻賢母）としての役割を女性に強いるものでも奨励するものでもない。

働くことへの意欲や独立自尊の気概を萎えさせてしまっただけは元も子もない。貧しい女性への差別の固定化・強化という由々しき副作用を伴ったかのAFDC（Aid to Families with Dependent Children）の愚を、私たちは、断じて繰り返してはならない。

*安藤加菜子さんは、2021年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年5月博士号取得。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科人文学連携研究者 京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット研究員。



萩原広道＝著

評者・柳岡開地

(大阪教育大学 特任講師)

『子どもとめぐることばの世界』

ミネルヴァ書房

定価 1,800円 (税別)

2024年3月刊 214頁



本書は、子ども独自の世界を、身近な「ことば」を通して解き明かそうとする意欲作です。心理学の学術的知見をベースに論が展開されていますが、柔らかい口調かつ専門的な内容は読み飛ばせるという工夫がなされており、研究者以外の方でもサクサクと読み進められるのが本書の特徴の1つです。

3部構成の第1部では、ことばの発達の基礎的知見について、音韻・語彙・文法・やりとりの4つの視点からコンパクトにまとめられています。特に、身の回りのモノや他者に積極的に関わることを通して、ことばが発達することが強調されおり、その発達過程を垣間見ることができます。第2部では、子どもの語彙の発達に絞り、萩原氏が提案する「胚性詞」に関する研究が紹介されます。「胚性詞」とは、「クック」や「ボール」という語彙が「靴を履く」や「ボールを投げる」などの出来事、もう少し大胆にいうと子どもの靴やボールに関わる生活経験を含んでいるということの意味する本書のキーとなる概念です。最後に、第3部では保育士・幼稚園教諭と発達心理学者の先生方との対談が収録されています。一般に著書を読んだ後に感想を語り合いたい、話し相手が欲しくなることがあります。そうした要望に応えるのが第三部で、基礎研究と現実社会を如何に繋げていくかという重要なトピックについても語られています。

以下からは、私の感想を記してまいります。私が本書から読み取ったのは、「言語はコミュニケーションの道具である」というメッセージです。そもそも私たちは、自分が感じ、考えていることを他者に伝えるための道具の1つとして言語を用います。しかし、私たちのコミュニケーションが言語に大きく依存しているがゆえに、特に子どもにとって言語は道具ではなく目的として考えがちになってしまいます。たとえば、「正しい言葉話してほしい」「言葉をたくさん覚えてもらいたい」「できれば英語も話せるようになってほしい…」という期待が入り混じった焦りさえ生じるようになります。こうした期待は間違いではありませんし、否定されるべきものでもありません。しかし、言語はあくまで道具でありいかに磨いたところで、相手と通

じ合わなければ意味がありません。逆にいうと、道具自体はいまいちでも、コミュニケーションがとれた結果として道具が磨かれるということもあり得るのです。

こうした点を最もよく示しているのが「胚性詞」という考え方です。上述のように「胚性詞」とは、ことばが出来事または生活経験を含んでいる状態を指します。私にもピンとくる経験があります。学部生時代に関わっていた自閉スペクトラム症の子どもが、私と勉強をしていると「クルック、そろそろおしまいにしなさい」とよく言っていました。私には全く意味がわからなかったのですが、お母さんに尋ねてみると、その子どもがよく見るアニメのセリフらしく、日常生活でも何かをやめたい時に使う言葉だと教えてくれました（つまり、私との勉強は早くやめたかった…）。面白いのは、その子どもの発言は生活体験を共有しているお母さんには伝わり、共有していない私には伝わらないということです。この時の私は、正しい言葉にこだわり、コミュニケーションの道具として「ことば」をみれていなかったと言えます。このエピソードだけではなく、子どもなりの「ことば」の使用も同じですが（本書によると萩原氏も、昔はトマトのことを「パイポ」と呼んでいたそうです）、子どもは「ことば」を通して、自分が真に感じていることや考えていることを相手に伝えようとしています。そして、私たち大人は「ことば」に込められた彼ら彼女なりの思いや感情を受け止め、新たな言葉を返します。子どもの「ことば」を受け止めて、新たな言葉を返す、この非常にシンプルな営みが初期の言語発達の本質なのかもしれないということを学ばせていただきました。

これらを踏まえると、本書は、『言葉の正しさに囚われず、子どもの「ことば」を大事にし、子どもらの思いや感情を一緒に分かち合いませんか』と優しく語りかけてくれる一冊ともいえます。子どもたちに関わるすべての人々に、本書が届くことを心から願います。

* 萩原弘道さんは2021年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、大阪大学大学院人間科学研究科助教。

Study-abroad and Taiwan as a “Silicon Island”: a Focus on TSMC

藍 適齊 | Shichi Mike Lan

藍 適齊 (Shichi Mike Lan)

(PhD. in History, University of Chicago) Associate Professor of History, National Chengchi University, Taiwan

森口由香：本日は大変暑い中、お越しいただきありがとうございます。このレクチャー・シリーズは人間・環境学研究科の国際交流委員会のプログラムの一部として実施されております。国際交流委員の先生方、特に中森先生と守田先生には大変お世話になり、ありがとうございます。本日は台湾国立政治大学の藍適齊（ラン・シーチー）先生にご講演いただきます。ラン先生は主に移民史、台湾史、台湾と他国の間の人の移動に関する歴史、また「歴史の記憶」に焦点を当てて歴史研究をされています。私どもの科研共同研究にご参加いただいて、一昨年、京都大学学術出版会から共著書を出版したというご縁があります。また、それを契機として去年から小さなインフォーマルな研究会を立ち上げ、ラン先生を含む複数大学の研究者、大学院生、ポスドクで、人の国境移動によってテクノロジーや知識が伝達されることが政治外交とどのような相互作用を持つのかというテーマを歴史学的に探求しています。今日は、その研究会の中から着想したテーマを取り上げていただきました。台湾のIT産業は今日とても有名ですので、皆さまも一定の知識はおありだと思いますが、実はそれが留学（study abroad）体験と非常に関係があるということが分かってきました。そこでラン先生は、台湾の「人の移動」と知識や技術の移転がどのように関連していたかをご研究されようとしているところです。では早速、ラン先生にお話をお願いしたいと思います。

ラン・シーチー：とても丁寧にご紹介いただきありがとうございます。私は台湾から来ました Lan Shi-Chi と申します。よろしくお願ひします。すみません、ここから英語にスイッチします。

Thank you again for giving me this opportunity to come to Kyoto University and to share some of my own research interests with you. I was born and raised in Taiwan. Although I received most of my education in the US, Taiwan is to me my home country. But also, I've been away from Taiwan for many, many years. So, I tend to see Taiwan as a subject for my research study. And that's something I want to share with you today.

I'm interested in studying Taiwan, not just because I'm

from Taiwan, but more importantly I think Taiwan is an interesting subject to study. Not only the history of Taiwan is interesting, but I think the present and the future of Taiwan will also be interesting. And the part of the reason is what I'm going to talk, to share with you today, the industrial development in Taiwan, focusing on semiconductor industry, and focusing on one particular company called TSMC. So, I would start by giving you a science lesson from a historian.

Silicon and Semiconductor

I'm a historian. Who am I to tell you something about silicon? But I think I still need to at least briefly explain to you why silicon, and then why we call Taiwan “the Silicon Island.” Silicon is a particular particle and we use that particle through many, many processes and make it into something called semiconductor. And semiconductor then was made into something called integrated circuit, or IC. It's a very, very thin chip. Therefore, in the industry, people also call semiconductor simply “chip.” Not to be confused with potato chips! There is a joke in America. A potato company actually wants to invest in semiconductor. So people are saying, you are making more “chips.”



I will tell you why semiconductor matters. I think everyone has one of these with you. Feel free to use your phone during my talk, especially if you want to Google, what is TSMC. And once you start to click on your phone, you are actually using semiconductor without knowing it. On your phone, in your iPad, in your laptop, in the Internet we are now connected with, pretty much everything in our modern life run on semiconductor. So I think we can conclude that without semiconductor our life will be very, very different.

I want to add to the last point. Most people don't know this, but semiconductor is very important for military development. For modern technology like radar, drone, missile — they run on semiconductor. Actually, scholars have argued — I'm referring to someone by the name of Chris Miller, who wrote a book just a couple of years ago talking about why semiconductor is important. He argued that semiconductor should be considered as the world's most important technology, and it's also the most important resource, just like oil or gas. Because without semiconductor our modern life will pretty much stop and we will go back to stone age. Perhaps I'm exaggerating, but what I want to show you is that because semiconductor is so important in our life that it has economic implication, and it also has implication on national security. And as countries compete against each other to get more semiconductor to be used, it also has international geopolitical implication. As you may have noticed, Chris Miller is a historian. So I guess I'm not too far to say that historians can play a role in the study of technology like semiconductor. This book was so highly praised. It was translated into Japanese the year after its original was published and was a best seller in Japan too.

Taiwan produces 92% of those advanced semiconductor for global consumption. You know, it's very hard to imagine. Everyone knows petroleum is very important. But there are so many countries in the world that produce petroleum, so the production of petroleum is somehow evenly distributed across different regions and different countries. But in comparison the production of semiconductor, especially those advanced semiconductor, is concentrated on this tiny island called Taiwan. That's why the US government actually called Taiwan "the Silicon Island."

And I'll give you another example to show you how important semiconductor is. I don't know if you noticed, especially for those of you who are living in Japan, last year there was an announcement by railway companies that they would stop selling IC cards that we use to ride bus and train — like Suica and PASMO cards. You

wonder how they are connected to semiconductor. It is because they carry semiconductor chips. Because of the Covid situation, the supply of semiconductor from Taiwan to Japan was temporarily suspended. The implication continued until last year. Last year the company decided they just don't have enough chips. So they had to stop selling transportation cards. Just imagine if Covid continued for another 3 years, 5 years. Or in the worst scenario somehow a big disaster hit Taiwan and the semiconductor production stopped. The world will be very much in trouble. To make new semiconductor, to make new chips, it takes anywhere from 6 months to a year. So, you can see the consequences of this backlogging is very significant.

I know in Japan in recent years politicians, especially those politicians who are interested in military and international politics, talk about "*Taiwan yuji* (台湾有事)." I think *Taiwan yuji* should be understood beyond its military and political implication. Try to imagine if the supply of semiconductor from Taiwan stopped, the global economy would be greatly affected. Then it would have some implication on national security. So, I want to take this opportunity also to show you that especially for the Japanese audience, *Taiwan yuji* should be understood in a much broader context.

What is TSMC?

Okay, I'm going to move a bit faster. Why Taiwan matters, it is because of one company. This company is called Taiwan Semiconductor Manufacturing Company, or in abbreviation we call it TSMC. TSMC is the largest chip producers in the world. It produces 90% of the world's super advanced semiconductor chips that every company, everybody wants to get. This one company produces 90% of the global supply. That's why a couple of months ago *New York Times* actually ran a column and said TSMC is the most important company in the world.

I will tell you a bit about TSMC. It was founded in Taiwan in 1987. This company was founded by Dr. Morris Chang. Feel free to Google to take a look at what Morris looked like. He is now 90-some years old. This company, in recent years, also made headline news in Japan and also in the US, because this company invested a lot of money in both countries. Prime Minister Kishida actually visited Kumamoto just a couple months ago to see the new plant by TSMC in Kumamoto. The construction started in 2021. Almost at the same time, TSMC also invested in the US to build factory in Arizona. The first factory in Japan was completed in February

this year.

Now I'm going to tell you the history part. Because I think through this study of the history of semiconductor industry, we'll be able to see something really interesting, especially related to what Moriguchi-sensei mentioned earlier, the experiences of people who study abroad. Look at this chart. The biggest chip makers in the world in 1989, almost 35 years ago. Look at all those highlighted in red. Japanese companies ruled the world. The largest non-Japanese company was Motorola, which was pretty much gone by now. The next one was Texas Instruments. Please remember Texas Instruments, because this will come up again when we talk about Morris Chang.

This is a chart 35 years later. Any Japanese company? In the last 35 years the world of semiconductor changed, and I think Japan took the worst of that. TSMC was not there 35 years ago. Intel, yes, it rose up. Samsung? NVIDIA? These companies did not even exist before. Again, I want to show you how quickly semiconductor industry changed. And this change has global implications, not just on Japanese company, but as you can see, on Taiwan, on the US, and on global economy.

How do we study semiconductor industry?

So how do we study semiconductor industry? People from different disciplines have different approaches. Scholars in engineering or science may want to know why and how people can make chips thinner and thinner, and smaller and smaller, and even with higher speed. People from business school may want to study why this particular company is successful and why some other companies fail. They talk about business and management or corporate culture. People from political science, especially those who are interested in international politics or international economy, also study semiconductor industry. But what can we as historian study semiconductor industry? When I brought this topic up to my colleagues, historians, and said I want to study semiconductor industry, I'm going to study TSMC, they say, "You're joking, you have no background in engineering. You are not in business school. We historians don't study TSMC." I'm going to show them yes, there's something we can study about TSMC if we look at the history of semiconductor industry.

First of all, there's an approach called history of science or history of technology. So historians study the production of knowledge. Also in Japan, it's a very popular topic for historians to study company history. And also, we can study the life story, the life career of

those leading individuals like the founder of TSMC. But actually, I was very much inspired by Moriguchi-sensei's earlier study. I think for historians what we can do is to focus on the interaction between knowledge and the people who carry and execute this knowledge. I think there's an interesting process in which we can see how on the one hand we have production of knowledge but on the other hand we need people and individuals who can integrate knowledge into production, into something useful. So, I think what I will try to do in the next 20 minutes or so is to show you how we as historian can study the integration of knowledge and people who made semiconductor industry possible, especially in Taiwan.

Changes of the world's semiconductor industry

The most critical question I want to raise is this. The US started semiconductor industry in the 1950s. This is in the middle of the Cold War. The US and the Soviet Union were competing in developing the most advanced missile technology. And to do so, they needed to have good semiconductor to run the calculation and to control missile. So, the US military actually invested a lot of money into the research and development of semiconductor. Soviet Union pretty much failed. In the 80s it was the Japanese company who developed the more advanced and cheaper semiconductor technology. So, they ruled the world. TSMC was not established until 1987.

My question is: how this technology became available in Taiwan? Or I will put it more specifically: who acquired and brought this technology to Taiwan? Obviously, it was not invented or originated from Taiwan. It must be from Japan or from the US. It was developed in Taiwan only in the last 35 years.

Morris Chang, the founder of TSMC

One of the key individuals is, of course, the founder of TSMC by the name of Morris Chang. Morris Chang was born in China before World War II in 1931. As he grew up, his family moved to different places. He actually spent many years when he was little in Hong Kong. Then in 1949 he went to the US to study first at Harvard. Then he transferred to MIT and graduated from MIT with a bachelor's and a master's degrees. Several years later, when he was working for Texas Instruments, he got a PhD from Stanford.

The reason why I want to highlight Morris Chang's overseas experiences. He was born and raised in China. But obviously he received the best part of his education outside China, in the US. Then after graduating from

MIT, he worked for Texas Instruments. Texas Instruments, if you still remember, back in the 1980s, in the 70s, in the 60s, it was the number one semiconductor manufacturer in the world. Morris worked at Texas Instruments, especially on semiconductor for almost 30 years. And to make his experience even more significant, he rose up very fast in the company. He became the vice president in charge of global production of semiconductor. Texas Instruments like TSMC nowadays had manufacturing facilities in different countries mostly in Asia. Morris Chang was in charge of global production as the vice president for more than 10 years. Then he moved to another company called General Instruments that also produced semiconductor. But he was not happy. So he decided to move to Taiwan in 1985. After spending more than 35 years in the US, and shortly after he moved to Taiwan, he set up TSMC and became the president and the CEO for almost 30 years.

He was born and raised in China, and he studied in the US. I think having an education in the US and studying abroad actually gave him the opportunity, not just to receive a good education but more importantly this education enabled him to work in the US. He worked in the company that gave him the opportunity to acquire new technology and knowledge. Then he moved to Taiwan in 1985. Try to imagine yourself in his shoes. You have been so successful in America as the vice president of this huge company. Why move to Taiwan in 1985? He was already 54 years old. That's my age. Why move to Taiwan? And he moved to Taiwan to do what? He became the chairman and president of something called Industrial Technology Research Institute, ITRI in Taiwan.

ITRI in Taiwan

What and why ITRI attracted Morris Chang to give up his life and career in the US and move to Taiwan? Taiwan was not Morris Chang's home country. He was born in China, although the government of the Republic of China moved to Taiwan after 1949. But Morris was never connected to Taiwan. So, he actually moved to a new country in a way. Why? ITRI was a government-sponsored research institute for technology established in 1973. So, I'm curious to learn between the foundation of ITRI in 1973 and the move of Morris Chang to Taiwan in 1985, this period of about 12 years must be the critical period that laid the foundation for semiconductor industry in Taiwan and later on for TSMC. So, who made this happen? And how did they make this happen? I looked at different materials and came up with this conclusion.

Those 12 years actually should be divided into three different stages of development of technology in Taiwan. And they were led by three different groups of people.

Three stages and three groups of people

The first group consists of government officials in Taiwan. They are government officials who are in charge of economic policy and they want to know how to boost Taiwan's technology so that Taiwan's industry can develop and make more money. So they established ITRI as the research institute for new technology. And one of the government officials in his memoir wrote that they actually picked up the idea from Korea. Because the Korean government already established the Korea Institute of Science and Technology about 10 years before, they thought this was a good lesson to learn. So this is the first group of people, and they established ITRI.

But the question is, what particular technology should ITRI develop for Taiwan? At the time back in the 70s Taiwan was still a semi-agricultural economy. There was some industrial development but mostly in textile, clothing, and plastic production. Those were conventional light industry, so they wanted to develop new technology. These government officials actually looked for consultants, and they found consultants in America. There was a very small group of Chinese scholars and scientists who were born and raised in China and went to the US to study, then stayed and worked in the US over World War II. These scholars organized something called Technical Advisors Committee. This committee and the government officials in Taiwan discussed over several years, and they decided the best technology for Taiwan will be semiconductor. Actually, at the time they were not even using the word "semiconductor." They were using "integrated circuit" because that's the final product. So, they said we have to develop IC technology in Taiwan. That's a good technology, and it will make a lot of money for you in the future. But Taiwan just did not have that technology. So they have to learn from somewhere else and from someone else.

The third stage of development is the critical event called RCA technology transfer. RCA, or Radio Corporation of America, is not a famous company nowadays, but back in the 60s and the 70s, it was one of the largest American companies that produced pretty much everything. It actually produced a lot of electronic appliances. And the company was willing to share their technology as technology transfer. Of course, the Taiwanese government, ITRI, had to pay a big sum of

money to RCA. And RCA provided integrated circuit production technology to ITRI. Very soon, ITRI acquired this knowledge and set up a model factory to produce integrated circuit. Two years later this model factory turned into a spin-off company called TSMC. That's the beginning of TSMC. And nobody ever imagined, in 35 years TSMC would become the company that dominates the world's chip production. So I look at the background of these three groups of people.

Studying abroad and technology transfer

The government officials — there were just a couple of very important government officials; technical advisors in the US; and those people who participated in the technology transfer from RCA. Interestingly, some of the key government officials by the name of Mr. Sun, Mr. Gao, and Mr. Fei all had experiences of studying abroad. Coincidence? I don't think so. I think those people who studied abroad in the US or in Japan, they were more familiar with foreign societies. And they knew foreign societies' advantage. And I think because of these experiences, working, studying and working, not just in the US, but also with US government officials or private industry, they pushed for the establishment of ITRI. And they continued to push for the technology transfer from the US.

I want to show you one particular individual by the name of Kwoh-ting Li. Just last year, during an interview, Morris Chang pointed out that Kwoh-ting Li was the most important government official who pushed TSMC to become a reality in Taiwan. Li took up a position called minister without portfolio. Basically, he was a minister that would do whatever particular assignment that the government wanted to do. So you know, it's so curious that for several years, Kwoh-ting Li flew all the way from Taiwan to Texas, to be at Texas Instruments. To do what? To learn about the most advanced technology that Texas Instruments at the time was developing under nobody other than Morris Chang. So very soon Kwoh-ting Li started to approach Morris Chang, saying "How about coming to work in Taiwan? We want to develop semiconductor industry. You are the best person." But Morris kept saying "No." In an interview Morris said, "Are you kidding me? I have stock option in the US. I have millions of dollars. If I quit Texas Instruments, I will lose millions of US dollars. Of course, No." But a few years later somehow the company made a deal with Morris Chang saying, "You can cash your stock option gradually." So Morris now was considering, "Maybe it's time that I can move somewhere else."

So who is Kwoh-ting Li? He actually studied at Cambridge before World War II. When World War II broke out, he decided to quit his study and return to China. After the war, he also worked with the American government aid agency in Taiwan. People like Kwoh-ting Li who had experiences somehow unique among government officials. They were government officials under the Republic of China in Taiwan who had experiences of studying abroad, working with or working in the US, or some kind of internship program they have undertaken when they were still young.

Technical advisor committee

Let's look at the second group. Those are members of the Technical Advisor Committee. As you already know from my earlier introduction, they are all Chinese who went to study in the US before World War II and stayed on in the US and worked. And look at where did they work for. Dr. Pan was the leader of this committee. He worked at RCA Laboratories. Another person, Professor Lo, who taught at Princeton for many years. Actually, before he took up his teaching job, he also worked at RCA and IBM. And those are the company that designed, developed the most advanced semiconductor in the world in the 1950s and the 1960s. So they know that's the future of our world, and they provided this advice to the government of Taiwan. And the government picked up semiconductor as the next thing to develop. The committee was actually very small — about 7-8 scientists. Most of them were born and raised in China just like the government officials I talked about earlier. And they went to study in the US before 1945. It's this first generation of Chinese who studied abroad in the US, or had some kind of internship experiences in the US before 1945. They actually made semiconductor industry an option for Taiwan to develop. They are the people who actually made TSMC an idea. It's just an idea, because ITRI at the time was just picking up this new technology from RCA and they did not know how far they could take this to. But this first generation actually took the idea to Taiwan.

Then, we have to talk about the RCA technology transfer. ITRI recruited young, ambitious, brilliant scientists and sent them to RCA. They sent a group of about 15-20 engineers led by these three PhDs. Dr. Yang went to New Jersey with his team member to study IC design. Dr. Shih went to the RCA factory in Ohio and studied IC manufacturing process. And Dr. Chang studied testing. You need to test whether this is a good production or not. Let's look at their backgrounds. Dr.

Yang was born in Taiwan in 1946. So that's the post-war generation of Taiwanese. He got his degree in Taiwan and went to get his PhD at Princeton. I'm not sure whether he studied under Professor Lo. I haven't seen the connection. But I think it's not coincident that he got his degree from Princeton in 1975. He worked briefly in the US in a company called Harris Semiconductor. Then he was recruited by the Taiwanese government to lead this RCA technology transfer. Another member, Dr. Shih was actually his classmate. He got his degree from Taiwan and also from Princeton. They both got degrees from Princeton, and they both worked briefly in the US before being recruited by the Taiwanese government to take up this technology transfer. Dr. Chang, another Princeton PhD, just one year after the first two, had pretty much the same background. So, these three young PhDs from Taiwan who studied in the US after 1945, are the first post war generation of Taiwanese to study abroad in the US. They became the second generation of study abroad who made semiconductor industry a possibility in Taiwan, because they were in charge of technology transfer in 1976.

Six leading engineers

But to make semiconductor industry really grow and develop into production you need more people. So, who were they? When TSMC was set up in 1987, it was a very small company. So they actually recruited more and more engineers, scientists who would become the leading members to help TSMC develop more and more. There are six individuals who are referred to as the leading engineers for TSMC's early development. Look at their backgrounds. Dr. Lin, Dr. Jiang, Dr. Liang, they all got their degrees from the US in engineering in the 1970s and 80s. Dr. Sun, Dr. Yu, Dr. Yang joined them later. Again, these are Taiwanese who went to study in the US after the war, including this very important scientist called Dr. Hu who was the inventor of 3D FinFET technology that actually helped TSMC to become from just a regular semiconductor company to the most advanced semiconductor company in its manufacturing capacity in the earlier part of the 21st century. So, this technology and the inventor played a very important role for TSMC's gigantic jump in technology edge. This scientist later also became the chief technology officer at TSMC for a couple of years. These are the people who actually helped TSMC to develop in technology-wise in the 1990s and the 2000s.

But of course, you need management people. So, let's look at the management side. Mark Liu was the former

chairman of TSMC. He was actually the person who brought TSMC to Kumamoto, but he already stepped down. He got his degree from UC Berkeley, worked at Intel, AT&T lab, again big major facilities for semiconductor industry in the US for almost 10 years. Then he joined TSMC in the early 90s. The current president, the current chairman, Dr. Wei got his PhD from Yale and joined TSMC a few years later. But before that, he also worked at Texas Instruments. I think he actually worked very briefly under Morris Chang. Although they did not know each other well, several years later, somehow their career paths converged at TSMC.

This is a quick summary for the development of technology and management, when TSMC started to take off. Again, it was these Taiwanese who went to study in the US, and also got extensive working experiences in semiconductor industry in the US. When they returned to Taiwan in the 1990s, they brought these technologies and their own experiences in developing and running manufacturing back to TSMC. So, I call them the third generation of study abroad that made TSMC a reality. They are still the current leadership of TSMC. As I calculated among the senior vice presidents and vice presidents — there were many vice presidents in charge of different aspects of the company — out of 26 vice presidents, 18 had degrees from the US. Coincidence? No. I think you already got my short conclusion.

Conclusion

I think it's generations of study abroad that made Taiwan into "the silicon island" led by TSMC. But it's not just TSMC. Semiconductor industry is a supply chain. So, there are several different layers of companies that provided different support to the final product. There are more and more Taiwanese just like those who I mentioned before, who studied in the US then returned to Taiwan in the 1980s and 90s to set up different companies. They together consist of the very important supply chain for semiconductor production in Taiwan today.

Then I want to ask a historical question. Yes, we know these people made contribution, but we still want to explain why. There are two "why's." The first why: Why they decided to go abroad to study. To answer this, I think we need to know more about China before 1949, and also the condition of Taiwan after 1949. These are the two crucial periods in which these people decided to go to the US to study. We also need to know, before the war and after the war, why the US offered these

opportunities of education to foreigners like those people I discuss. There is the second big “why.” Why did they return to Taiwan, or why did they support Taiwan. Just look at those technical advisors, they already got their career and life in the US. They had already become US citizens although they were originally from China. Why did they bother to provide their time and wisdom to the government in Taiwan? We have to look at the situation of Taiwan in the 1970s and since the 1970s. And also, we have to consider the situation in the US in the 1970s and since the 1970s.

Let me tell you a bit more about the first “why.” China before 1949, wars played a major factor. Morris Chang, in his own biography, wrote that the reason why he and his family kept moving around, and eventually moved to Hong Kong. It was because of the Sino-Japanese war. They wanted to basically escape from danger. So, they believed that the safest way was to go overseas. And where did they go? Of course, the most powerful country, the US. And it’s the same background, but for various different reasons for those government officials. I hope you remember Mr. Sun and Mr. Li. These two government officials went to the US and the UK during and before WW II . For what purpose? According to their own memoirs, they all expressed a very strong commitment basically to study to help China. Just because China was at war, they thought this was the time they should build up their own knowledge so that when the war ended, they could support the country and make it powerful. I think nationalism played a big role for these government officials. Then we have to consider the situation in Taiwan after the WW II . After 1949, why did people still choose to study in the US? I think it was because the Chinese Civil War continued into 1950s, 60s, and 70s. People in Taiwan — kind of similar to the situation now — felt the threat from China, possible Communist invasion or attack. So people decided, just like Morris Chang and his family, the safest way was to go abroad.

We have to consider the situation in the US, too. The US, for the past one hundred years, has this very strong commitment, or tradition, in offering opportunities and scholarship to foreigners — I would call them foreign talents — because it’s not just ordinary foreigners, but those smart foreign students who study in the US, for one purpose: after they finished the degree, they would stay in the US and become useful and valuable human resources for American economy. There was national security reason too, because the US needed all these scientists. I’m sure you have seen the movie



Oppenheimer, German scientist, who went to the US. This was pretty much in the same logic. The US offers all these opportunities to foreign students, but I think the Cold War also played a major role because on the one hand, the Cold War distinguished friendly countries from enemy countries. Taiwan, under the leadership of ROC government, it’s anti-communist, so the US considered ROC people as allies. Obviously, these students were allowed to come to the US and study in the US, and even received scholarship to study in the US. And also, semiconductor played a major role in the Cold War in the military competition between the US and the Soviet Union. When these foreign students came to the US in the 1960s and 70s to study engineering and science, more likely than not, they would come to get some knowledge about semiconductor. So, I think the Cold War also play a big role in the training of these Chinese and Taiwanese who study abroad.

Then there is the other side of the story. In the 1970s, for example, there were these Chinese American technical advisors. Why did they bother to spend time to talk to government officials in Taiwan and provide technical advice? I think it has something to do with the Chinese Civil War. Politically, ROC government moved to Taiwan in 1949. So, there were two Chinas, one is Communist China PRC and the other is non-Communist China ROC in Taiwan. For about 20 years this non-Communist China actually represented the China seat in the United Nation. But, in 1971, it was replaced by Beijing. So, this non-Communist China, ROC became isolated internationally. And there is a very strong sense of identity crisis among those Chinese, including overseas Chinese who supported non-Communist China. They still identified themselves as Chinese, but they didn’t want to identify themselves with the Beijing government, so they supported this ROC government in Taiwan in whatever way it needed. It actually explains why these Chinese

American scientists and scholars were willing to support ROC government with their wisdom and knowledge. Again, I think it's the same form of Chinese nationalism, but now they identify Taiwan as their China. In the 1980s, I think we have to gather economic explanations because studies from the 1960s we heard about this cliché called four dragons and tigers in Asia. Outside China, Taiwan, South Korea, Singapore and Hong Kong became this so-called economic miracle, in the 1960s. So after two decades, when it comes to the 1980s, I think Taiwan's economy already accumulated enough capital for new investment, for investment in new technology. That was the time Morris and many other Taiwanese who, at the time, were living and working in the US decided to move to Taiwan and set up their own company because when they set up their own company they would have a better economic prospect. They see the potential to establish their own business and possibly make more money than they can make in the US. They can develop their new career. So, I think economic opportunity and financial motivation played the role in attracting these people back to Taiwan.

And, look at the US. Don't forget that economically the US was actually the opposite during the 1970s. Those of you who are a bit older, you still remember the oil shock in the 1970s? The oil shock resulted from wars. So I would argue that in all the stories I have described, wars played a big role. The oil shock resulted in the decline of the American economy in the 1970s, and it did not recover until the 1990s. So, you can imagine for those people who previously had a pretty good job in the US, they actually felt kind of a crisis in the 1970s and 80s. And look at Taiwan, with all the money for investment: it could be a good option for these people who came back to Taiwan.

One final point. This is one of my new findings. In the 1970s, in the US, and also later on, we have to consider the social conditions. This is an idea called "glass ceiling," meaning invisible unwritten barriers to individuals climbing up the social economic hierarchy or ladder. The ceiling is invisible, but you know it when you just cannot go further up. This applied to Asian Americans in high tech companies. Study actually shows in 2010 in Silicon Valley, more than 50% of the workers are actually Asian

Americans. But look at those positions, taken up as senior executive, meaning managerial positions, Asian American only accounted for 11%. 50% and 11%. If you go further up to the company board level, meaning the big boss of the company, Asian Americans is actually less than 9%. So, Asian American kind of had disadvantage although they played a big role in high tech, as they were not promoted according to their overall proportion. This, I called it high-tech hierarchy. And at the very center of my research Morris Chang actually experienced this. He was promoted to the vice president of Texas Instruments in 1972 in charge of global production of semiconductor. He stayed as the vice president and as different presidents took over, he continued to be the vice president for more than 10 years. In his biography, he just said out loud he was not happy. Of course, he didn't say glass ceiling, but that is glass ceiling. This situation continued until very recently. People talk about glass ceiling mostly with women because of gender bias in job promotion, but a new study in 2015 actually shows that the impact of race in creating this glass ceiling was much worse than gender. Although both race and gender are factors that contribute to creating glass ceiling, the impact of race is 3.7 times more significant than the impact of gender as a negative factor for the Asian workforce within the companies examined. It means that as Asian minority in American society, you just cannot get promoted fairly. I think Morris Chang's story very much explained why these people left the US, and I think as a consequence, this actually helps Taiwan, its semiconductor industry and TSMC. I think these are the very important historical background that help us to understand why Taiwan became the silicon island in the past 35 years, why TSMC developed as it is today. I have some further issues to study. I want to study study-abroad today, I want to see its implications or impact, and I also want to do some comparison with Japan, China and the US.

Going back to the introduction by Moriguchi-sensei, I think history of study abroad is an interesting topic and it has a great potential. I thank you for your attention today and I'm happy to answer any questions you may have.

人環図書 — 教員自らが語る新著 —

『マヨルカ島の冬』



ジョルジュ・サンド [著]；神保夏子、上田泰史翻訳

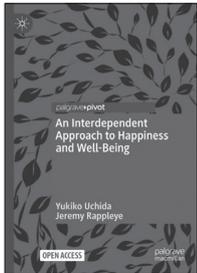
Celda de Frédéric Chopin y George Sand 2023年

ジョルジュ・サンドが著した旅の随想(原題：Un hiver à Majorque)の抄訳である。スペイン・バルデモサにあるフレデリック・ショパン／ジョルジュ・サンド博物館からの依頼により制作された。すでに全訳(小坂裕子訳)が存在する中、本作を改めて抄訳として刊行する意義を考えたが、サンドの原文に触れ直す好機として引き受けた。

1842年、新聞『両世界評論』での連載後に刊行された本作は、ショパンの《24の前奏曲》作品28第15番の愛称「雨だれ」の由来としても知られている。サンドは結核を患うショパンと二人の子どもを伴いマヨルカ島で冬を過ごしたが、本文にはショパンの名は記されず「病人」として言及される。「病人」への差別的振る舞いや私物をくすねる建具屋など現地民に対する批判の多くは、作者が傾倒した人間愛思想から出たものだ。村祭の行列を百鬼夜行さながらに描き、自然を崇高に、あるいはグロテスクに描写し、中世の修道僧の生活を隈想する筆致にはロマン主義の眼差しが宿り、生活の細部や舞踏、音楽を生き生きと描く筆致にはリアリズムが息づく。これがショパンの見た景色であり、サンドとともに生きられた時間であったことを思うと、《24の前奏曲》作品28の一曲一曲がにわかに彩りを帯びてくる。(上田泰史)

[特殊 (19 × 12.5 cm) 116 頁]

An Interdependent Approach to Happiness and Well-Being



Yukiko Uchida & Jeremy Rappleye Palgrave Macmillan 2023年12月

文化心理学は「意味」の学問分野である。たとえば、「幸せ」という表現は、自己の快楽や穏やかな感情状態を評価し、ラベルづけたものである。そして、その感情経験や評価のプロセスには、集団内に共有された幸せという概念に関する「意味」が深く関与している。つまり、人生を振り返って「わたしは幸せだ」という言葉の本質的な理解には、その社会や文化の中で共有されてきた「意味」を知ることが必要なのである。

本書では、このような文化心理学の知見に基づきながら、特に日本文化における協調性と幸福の関係について論じ、さらには幸福という感情以上に社会的な概念である「ウェルビーイング」に焦点を当て、教育などの社会制度へのインプリケーションについても述べている。幸福やウェルビーイングは、これまで西洋的価値観に基づいて、個人が獲得する目標として定義されてきた側面が強い。しかし本書では文化心理学者である筆者と教育学者のラプリー氏が共同し、7つの章を通じて幸福とウェルビーイングに至る、協調的価値観などの多様な道筋を浮き彫りにしようとした。なお、オンライン版は2025年1月現在で世界中から13,000件以上のアクセスをいただいている。(内田由紀子)

[152 × 209 × 12 mm 172 頁] 39.95\$
 オンラインダウンロード版は無料
<https://link.springer.com/book/10.1007/978-3-031-26260-9>

『コンクール文化論：競技としての芸術・表現活動を問う』



宮入恭平(編著) / 増野亜子(編著) / 神保夏子(編著) / 小塩さとみ(編著)

青弓社 2024年1月30日

芸能と競技する場の関わりについて論じた本書は、今時珍しい(?)研究費に紐づかない研究会の、出版助成を受けていない成果出版物である。「コンクールによって生まれる相互作用は、人びとの行動や考え、演奏・競技のあり方にはたらきかけ、ときにはそれを大きく変化させていく」(「序章」より)が、本書はある種そうした変化の見

本市である。

紙幅の都合上、章とコラムの種別があるが、内容の濃さはどちらも変わらない。ショパン国際ピアノコンクールに始まり、KPOPオーディション番組、19世紀パリ国立音楽院ピアノ科コンクール、ダンススポーツDリーグ、ポールダンス、インドネシアの武術シラット、秋田県民謡、バリのグンデル・ワヤン、アイルランド音楽、ハワイ沖縄系人にとっての琉球古典芸能コンクール、吹奏楽など中高部活動のコンクール、バレエ教室と、多彩な事例と多様な角度から、芸能に競技性が持ち込まれたときに起こる変化に迫ることができる。

コンクール、あるいは競技性は音楽やダンスに何をもたらすのか。通読することで、各々の差異の向こうに共通性も見えてくる。読みやすさをかなり意識した文章になっているので、演奏やダンスが好きな方々に広く楽しんでいただきたい一冊である。

(梶丸岳)
 [四六判並製 256 頁] 2,400 円 + 税

『「大学の森」が見た森と里の再生学 京都芦生・美山の挑戦』

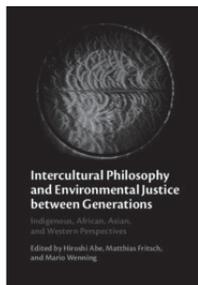


石原正恵・赤石大輔・徳地直子編 京都大学学術出版会 2024年1月

本書は、京都大学芦生研究林を取り巻く森と里の課題に対して、研究者と地域の多様な主体が協働で行った課題解決のための実践を紹介するものである。本書の舞台となった芦生研究林には京都では珍しい原生的な森林が保全されており、約100年の間、森林生態系に関する研究・教育が行われてきた。「原生的」といえど、この森は人を寄せ付けない場所ではなく、研究林が設置される以前から、地域住民は自然の恵みや伝統知を森から受け取って生活してきた。しかし、研究林のある美山町では、我が国の他の中山間地域と同様に過疎高齢化が進み、従来の生活や産業を持続させることが難しくなっている。森との関わりが減ったことで、野生動物が増加して森が荒れ、集落から人が去ることで里と森の境界もあいまいになりつつある。森の衰退が里の衰退につながっている。こうした、森と里が連環した問題に対して、芦生の森では研究者と地域住民や関係主体が力を出し合う協働により、森と里の再生に向けた取り組みが行われている。本書では、シカの食害によって減少した希少植物の保全、消滅危機にある伝統的な食文化の継承、里の過疎化、地域資源を活用した観光の取り組みなど、地域の課題に立ち向かう人々の姿が収録されている。(阪口翔太)

[A5 並製 420 頁] 3,960 円 (税込)

Intercultural Philosophy and Environmental Justice between Generations. Indigenous, African, Asian, and Western Perspectives



Hiroshi Abe 編、Matthias Fritsch 編、Mario Wenning 編

Cambridge University Press 2024年3月

「地球環境問題」とは、錯雑たる仕方であり組んでいる数多の問題の総称である。かかる複合的性格の故に、この問題は様々な学問分野による究明とその連携を自ずから要請する。加之、まさに同じ理由により、当該問題を解決せんとする際には、或る特定の文化の思考法のみを以てして能事畢矣ではなくして、却って寧ろ種々の文化圏から

の多角的な省察と相互理解こそが必須となる。しかしながらその喫緊の重要性にも拘らず、今述べた如き地球環境問題の多文化的な考究と、この問題を巡る異文化間対話を主題とする本格的な書物は、これ迄は遺憾ながら皆無に等しかった。本拙編著は、その欠落を些かなりとも埋めるべく、構想されたものである。その際、地球環境問題を構成している諸問題の中でも、本書は特に「世代間の正義」に的を絞ることとした。

本書は三部十一章に分かたれる。第一部「Indigenous Philosophies on Justice between Generations」は、先住民（マオリ等）の環境思想を論ずる二つの章と、アフリカ（オロモとイグボ）のそれを考究する二章からなる。第二部「Intergenerational Ethics in Dialogue with Confucianism and Daoism」は特に、異文化間対話を行う際に決して避けて通ることができない文化圏の一つである中国文化圏の思想の解明に捧げられている。ここでは、儒家の観点に立つ三つの章と、道家に依拠する一章がそれぞれの仕方でも世代間倫理の問題に切り込んでいる。そして第三部「Humanity Facing the Near Environmental Future」では「来るべき環境の変動に向けて、我々は今、何をなすべきであるのか」という問題に三つの章が各様に取り組んでいる。

第三部劈頭の愚論「Double Intergenerational Responsibility: From a Western-Eastern View」では、D.パーフィット、H.ヨーンナス、和辻哲郎、儒家等に縦横に閑説しつつ、将来世代に関する我々現在世代の責任は実のところ、過去世代に対する我々の責任を伴わねばならぬ（ということつまり、将来世代への責任は、啻に将来のみならず、過去にも向かう二重の方向を有すべきである）所以を示すことに努めた。

なお本書の表紙の装丁はマオリの現代美術作家、Israel Birch氏に依頼した。当該の意匠は同氏の作品に基づくものであり、時空を往来する二つの海波を表している。（安部浩）

[235 × 158 × 18 mm 224頁] \$203.88

『みんなの青春 思い出語りの50年史』



石岡学

生きのびるブックス 2024年3月

本書では、1970年代以降の「青春をめぐる語り」の分析を通して、なぜかくも青春はコンテンツとして魅惑的であり続けるのか、なぜ人々はその青春イメージに縛られてしまうのかを歴史社会的に考察した。

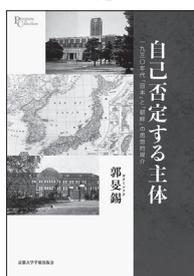
こうした青春に対する漠然とした違和感を、筆者は10代の頃から抱えていた。しかし、青春は研究対象としてあまりにも大きく、真正面から斬りこもうとしても全く歯

が立たない。そこで、迂回的に若者観の研究などをやっていたのだが、ある日突然「青春をめぐる語りを読み解く」というテーマでweb連載の依頼があり、それが本書の直接のきっかけとなった。自力では踏み出せなかった一歩が、こうした一冊の本に結実したのは感慨深い。

本書では、できるだけ語り手のリアルな体験や思いに迫りたかったため、新聞・週刊誌・アイドル雑誌・TVドラマ・ヒットソングなど、かなり多ジャンルの資料を分析した。加えて、「学問半分、エッセイ半分」のスタンスで執筆したこともあり、特段の専門知識がなくても読めるものになっている。ぜひ、青春について少しでも違和感をお持ちの方には、気軽に手を取っていただきたい。読者からの反響もよく、筆者も気に入っている第五～七章の「地味な青春シリーズ」が特におすすめである。（石岡学）

[四六判 224頁] 2,320円（税込）

『自己否定する主体 一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』



郭旻錫著

京都大学学術出版会 2024年3月

私の近著『自己否定する主体』は、1930年代の帝国日本とその植民地であった朝鮮を舞台にして、日本と朝鮮の諸思想（哲学・文芸批評・文学）の関係性を考察したものである。しかし、思想的な影響関係をただ歴史的に記述したものではない。思想を作り出したのは歴史を生きた主体である。その主体が、思想のなかでどのように編まれて

いたのかを追跡した。主体は自己否定する。当たり前の話である。自己に固執しているだけでは、歴史的な主体は生まれない。そして自己否定の具体的な意味は他への媒介である。他者に関わっていく運動こそが主体を可能にする。他者無しで自己否定できるのは神しかいない。その意味で人間的な主体は、他者との間で可能となる。帝国日本と植民地朝鮮の間で立ち現れる主体はいかなる姿を呈していたのか。それを探求したのが、本書である。なぜ1930年代の帝国一植民地が舞台となるのか。この時代は主体が抹殺され、いびつな関係性が蔓延していた異常な時代ではなかったのか。関係性はいつもいびつであって、いつも主体を抹殺しようとする。しかし主体が抹殺されることはない。そのような主体論を本書は唱えている。自己否定を潜り抜けた強力な主体性を、多様な群像から描いている。（郭旻錫）

[A5上製 332頁] 4,840円（税込）

『記憶と歴史の人類学—東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験』



風間計博・丹羽典生編
風響社 2024年3月

本書は、現代世界における記憶と歴史について、史実と虚偽の交錯領域を見据えながら追究している。文化人類学の扱う社諸会では、口碑伝承や歌謡、彫刻等の非文字媒体によって過去の事象を後世に伝えてきた。また戦災等をみれば、民衆の個別経験が文字に残される機会は稀であった。こうしたなか、文字に抛らない歴史の正統性が、実証主義批判とともに検討されてきた。諸議論を受けて本書では、史実と虚偽のあわいに、行為遂行的に説得性を帯びて現前する「史実性」を措定した。「史実性」を検討する各章において、戦争の遺物や遺骨、石碑、写真、イレズミ等、多様な形態の記憶媒体が、人々の行為を駆動し感情を喚起させることを示した。苦難の戦争体験が憑依を引き起こす事例は、強烈な記憶が生者のみならず、死者をも賦活することを印象的に示している。史実と認めることが困難な事象であっても、その記憶は人々に多大な影響を与え、過去・現在・未来、生者と死者を取り結び、活性化する力を有することを明示した。真偽不明な電子情報が飛び交い、俗流ポストモダン思潮が隆盛する現代世界において、記憶と歴史の多様なあり方を追究する本書は、学界のみならず、一般社会においても意義深い著作と考えられる。(風間計博)

[A5判 372頁] 3,960円(税込)

Ibn Al-Santos — The Yotserot Poetry of Rabbi Yosef Ben Itshaq the Spaniard alias Ibn Abitur, Jerusalem



Joseph Yahalom and Naoya Katsumata
Carmel Publishing House 2024年3月

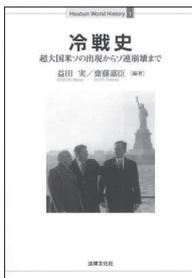
イブン・アルサントスは、10世紀中旬スペインのメリダに生まれ、コルドバのユダヤ教学塾にて律法学者として活躍する。学塾長の座を巡る権力争いに敗れた彼は、スペインのユダヤ社会から破門され、10世紀末アルメリアの港からイベリア半島を去る。エジプトのアレクサンドリアに到着し、11世紀初頭カイロのユダヤ教礼拝堂にて多くの典礼詩(ピユート)を創作する。本著は、エルサレム・ヘブライ大学ヤハロム教授とのプロジェクト「アルサントス典礼詩校訂版」の第一巻「ヨツェロート篇」である。ここで、彼の詩から：

その聖なる名には26の冠が／その名は65で唱えられる

一体、何が言いたいのか。ユダヤ教の伝統で発音してはならないとされる神の名・神聖四文字 YHWH は、ユダヤ教数秘術によると、Y (10) + H (5) + W (6) + H (5)、合計26である。また、ユダヤ人が聖書を朗読する際、YHWHの代わりに発音した Adonai (ADNY、わが主) という単語の数値は、A (1) + D (4) + N (50) + Y (10)、合計65である。礼拝堂は、律法学者のようなインテリ層だけでなく、一般大衆が集まり、祈りを唱える場である。当時のユダヤ人は、このような数秘術を耳で聞いただけで理解できたのか、あるいは、祈りとはそもそも頭で理解する必要のないものと考えられていたのか、興味が尽きない。(勝又直也)

[182 × 257 mm 800頁] 186ILS

『冷戦史—超大国米ソの出現からソ連崩壊まで』



益田実、齋藤嘉臣編著
法律文化社 2024年3月

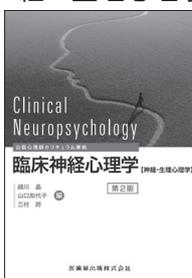
近年、米中対立の文脈から日本国内外で「新冷戦」への関心が高まりつつある。一般的に冷戦は、第二次世界大戦後に資本主義陣営を主導するアメリカと、社会主義陣営を代表するソ連が形成した東西対立を指す。両国はそれぞれの経済・政治システムを拡大しながら、軍事的・文化的影響力を競い合い、その対立構造はヨーロッパでの分断を中心にアジアやアフリカにも波及した。それは核兵器開発に象徴される軍拡競争や、政治的優位性を競うプロパガンダ戦争をもたらしした。

本書は冷戦史の最先端の知見を反映させ、その全体像を歴史的視点から位置づけ直しながら、同時代に生じたさまざまな事象との相互作用を検証することを目的とする。それを通して、冷戦が単なる米ソ対立にとどまらず、脱植民地化や第三世界の形成および分裂、ヨーロッパ統合の進展、経済のグローバル化と消費社会の台頭など、多くの歴史的变化とも深い共振関係を持っていたことを明らかにする。

執筆陣には冷戦史研究の第一人者が名を連ねる。全一四章で構成される本書は、冷戦が世界に与えた広範な影響を多角的に解明する。本書は、各所に織り込まれた大小コラムとともに、本格的ながら読みやすい冷戦史の通史となっており、新たな読者層の期待に応えるものであると信じる。(齋藤嘉臣)

[A5判 424頁] 3,850円

『公認心理師カリキュラム準拠 臨床神経心理学〔神経・生理心理学〕第2版』



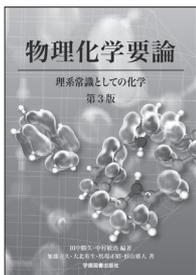
緑川晶・山口加代子・三村将編、月浦崇著
(分担執筆)
医歯薬出版 2024年3月

「公認心理師」とは、2019年に誕生した心理職の国家資格であり、主に医療、教育、産業、福祉、司法の5領域で活躍することが期待されている。「神経心理学」は、その中でも医療に密接に関連しており、脳梗塞や脳出血、脳外傷、変性疾患(認知症)などの脳の器質的損傷によって生じる、いわゆる「神経心理症状・高次脳機能障害」を対象とした心理学の分野である。そのため、公認心理師の資格を得るために神経心理学を学ぶには、失語、失認、失行、健忘などの諸症状の特徴を理解し、その症状を適切に評価して「見立てる」ための技術を知ることに加えて、その症状の背後にある脳のメカニズムを正しく理解することが必要となる。しかし、心理学を学ぶ多くの学生は人文社会系の学部にも所属していることがほとんどであり、脳と心の関係性を基盤とする神経心理学を学習することに対して、高いハードルがあるのが現状である。本書は、公認心理師をめざす心理学を学ぶ学生にとって、そのような高いハードルをできるだけ低くし、系統的に神経心理学を学ぶことができるように構成されている。また本書は、すでに高次脳機能障害の臨床に実際に携わっている公認心理師にとっても、臨床の中で感じている疑問を解決に導いたり、神経心理学の研究を進めたりする上でのガイドライン的な役割も果たしている。

超高齢社会である本邦において、脳の疾患に関連して生じる社会的損失は、今後益々大きな社会問題となることが予測されている。公認心理師として神経心理学の臨床に携わる者には、本書を通して神経心理学・高次脳機能障害を学び、医療の面から超高齢社会を支えることが期待されている。(月浦崇)

[B5判 240頁] 3,300円(税込)

『物理化学要論—理系常識としての化学— 第3版』



田中勝久・中村敏浩 編著、加藤立久・大北英生・馬場正昭・杉山雅人 著
 学術図書出版社 2024年3月

化学は物質が関わるあらゆる現象（森羅万象）を原子・分子レベルで解き明かす学問である。身の回りの化学現象はもちろんのこと、社会が抱える課題（エネルギー、環境など）や最先端テクノロジーの本質を原子・分子レベルで捉えるための基礎知識と方法論を修得することは重要である。その

化学の理論的土台となるのが「物理化学」である。

本書は、物理化学の柱となる基本的な考え方をコンパクトにまとめた入門書であり、京都大学の全学共通科目だけでなく、他大学でも教科書として採用されている。著者らが最も重要であると考えている量子論、原子と分子の構造、結晶構造、熱力学、化学平衡と反応速度論について、最低必要だと考えられる事項に絞ってわかりやすく解説した。また、今回の第3版への改訂にあたり、読者が自学自習により学習到達度を高められるように、演習問題とその解答を充実させた。

化学は暗記科目との印象をもたれがちであるが、本来、さまざまな事項や数式が矛盾なく美しく噛み合っていてできている論理構造こそが化学の本当の魅力である。その意味で化学は積み重ねの学問であり、本書による学習を順次重ねて進めていくことにより、化学の本当の面白さと重要性を感じてもらえることを願っている。

（中村敏浩）

[A5判 200頁・カラー 電子書籍あり] 2,530円（税込）

『医師の「献身」：ポーランド建国と草の根知識人 1890-1920』



福元健之
 京都大学出版会 2024年3月

本書は、2018年度に京都大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文に基づくものです。大きな声では言えないのですが、執筆の最終局面に読み直してみても、この本は、ある意味で学部学生時代の自分に向けられたものだと思います。

多民族地域であった東ヨーロッパの歴史は、ナショナリズム研究の革新に貢献し、国際的に構築主義的手法が導入されてからの研究では、とりわけ国民意識の形成に関心が払われました。そこから学んだことはとても多いのですが、史料にでてくる言葉（表象）から人びとの内面を把握することは、ときに雲をつかむような、抽象的な議論になってしまいます。それも、史料をたくさん残せるエリートはともかく、労働者や農民といった民衆層ではなおさらそうで、かといって前者だけを見て歴史を書くことに納得できない。それに、首都のような場所だけみてすべてをわかった気になるのも違う…といったことを、かつての天邪鬼な私は考えました。

結局、本書の主な舞台は、繊維産業で発展したウツチ市に、また主人公は、セヴェーリン・ステルリングというユダヤ人医師になっています。本書の内容が正面から上のような「初発の疑問」に答えるものであるかどうかは、皆さまのご批判を待つほかありません。（福元健之）

[A5上製 396頁] 4,800円＋税

『絵画をみる、絵画をなおす 保存修復の世界』



田口かおり
 偕成社 2024年4月

『絵画をみる、絵画をなおす 保存修復の世界』は、小学校高学年からの若手読者を対象として執筆した一冊である。多様な分野で挑戦を続ける研究者たちによるノンフィクションシリーズの一環として刊行された本書で、筆者は、美術作品の保存修復の世界を可能な限りわかりやすい言葉で紹介することを試みた。

保存修復家の仕事とは何か。美術作品とはどのようなものを指すのか。「なおす」と「つくる」ことの違いとはどこにあるのか。上記の問いを軸に、全5章を通じて保存修復の歴史を再構築し、その意義と広がり解き明かしていく。

そもそも保存修復とは、作品を単に元通りにしたり、若返らせたりする単なる物理的な応急処置を指すものではない。その本質は、作品の素材や構造を詳細に観察する専門的な視点に、過去の文献記録や研究成果を収集・分析する美術史的アプローチと、光学技術を用いた科学的手法を組み合わせた複合的なプロセスにある。時にはそこに、作品の所有者や制作者との対話が行われることもある。これらすべてを通じて、作品がたどってきた「生」の来歴を理解し、未来に向けた最善の方針を検討することが求められる。ひとつひとつの事例ごとに異なる「最終目標」の違いを見晴らしながら、保存修復の分野の複雑さと豊かさを読者にわかりやすく伝えることが、本書のねらいである。書籍後半では、現代美術作品の保存や展示が直面する課題を取り上げ、保存修復の今日的な責務を問い直している。（田口かおり）

[A5判 183頁] 1,760円（税込）

『中国語の世界：上海2024』



赤松紀彦（代表）、道坂昭廣、松江崇、小野寺史郎、津守陽、劉愛群、殷文怡 編著
 大地社 2024年4月

共著といっても、私が2022年に赴任した時点ですでに、中国語部会で毎年更新しながら、北京編・上海編の二種類の独自テキストを出版し統一使用するというスタイルはできあがっていたのですが、今回を機に道坂昭廣先生から編纂経緯をうかがいましたので、それを紹介させていただきます。教科書編纂が始まったのは2005年ごろのことで、初修外国語の中でも先陣を切る試みに属していました。これにより各クラス間の到達度の差を解消するとともに、CALL教材の開発によって、履修者数が急増していた中国語クラスにおいて、学生の自学自習の機会を実現できました。本教材の特徴は、大学での語学教育にふさわしく高度な中国語文化理解まで求めることと、豊富なビデオ・音声教材により、生きた中国語への親近感や、自律的な学習習慣を涵養する点にあります。すべて手弁当で立ち上げたことから、朝一番で無人の万里の長城をビデオに収めたり、非常勤の先生方とも協力して何年も例文を練り上げたりと、関わった先生方の苦勞が詰まった教材として、今も更新しながら活用されています。

（津守陽）

[A4判 120頁] 2,600円（税別）

『ジェンダーの視点でよむ都市空間』



吉田容子（編著）影山穂波（編著）
古今書院 2024年5月

日本の地理学でジェンダーの視点を導入する研究の裾野は、この30年間で大きく広がった。本書は、そうしたジェンダー地理学を初学者にも学べるように編まれた本である。日本のジェンダー地理学を牽引してきた編者2名に加え、中堅・若手の地理学者9名が参加し、「日本のジェンダー地理学のショーケースのよう」と評された（『地理』2024年12月号、p105）。

内容としては、まず、地理学におけるジェンダーの視点の重要性と、日本の女性労働の変遷が概説されたうえで、3章以降が各論となる。郊外、ケア・サービス、広告におけるホーム（家庭）、釜ヶ崎、売春街の形成、ゲイ・レズビアン空間、フィリピン人女性の移住と労働、サモアにおける開発とジェンダー、フィールドワークにおける注意点と、多岐にわたるテーマが取り上げている。

私は「ケア・サービス」を担当したが、本書が出来上がって全体を読むと、ジェンダー地理学の幅広さと、地理学にジェンダー視点を導入することの可能性に、今さらながら驚かされた。「高校生にもわかるように書く」という編集意向のもと、ジェンダーや空間に関する、難解になりがちな概念もかなり平易に書かれている。詳しい人にもそうでない人にも、ぜひ手にとっていただきたいと思う。（久木元美琴）

[A5判 170頁] 3,080円（税込）

『究極の学び場 京大 吉田寮』



実生社編集部編
実生社 2024年5月15日

現在控訴審中の「吉田寮現棟・寮食堂明渡請求訴訟」ですが、本書は寮がどんな存在なのかを広く伝えたいという願いから2019年に企画されました。元吉田寮生や何等かの形で吉田寮に関わった人々や現役寮生が執筆し、寮の思い出や、現在の人生との関係や、学問的・文化的・社会的考察などなど、自由に書いています。構成は「第I部 学び、暮らし、自由を考える場」「第II部 魅力がいっぱい木造建築と寮生活」に加え、座談会「ノーベル賞の益川敏英先生から、吉田寮生へのメッセージ」や多彩なコラムも掲載。さて執筆者たちの立場も視点も多様なればこそ響き合って浮上する凝集点が「自治」と「場所」です。常識や「普通」を押し付けず対等に話し合い、自分たちのことを自分たちで決める自治。そのかけがえない経験の喜びと、場所と建物への愛情が一体となって立ち上がってきます。読み進める私に終始寄り沿ったのは、或るあたたかい感情です。人が堂々と自分自身でありうる場所があり、そこに一人ではなく共に生きていると本気で信じる時に胸を満たす、そういうあたたかさです。今、京大は、あなたや私のいる場所は、あたたかいですかと問いながら、学内外の一人でも多くの方に読んでいただければ嬉しいです。（佐藤公美）

[四六判 176頁] 1,980円

『福祉・社会保障—岩波講座社会学第9巻』



筒井淳也・山根純佳・上村泰裕編
岩波書店 2024年6月19日

1995年の「岩波講座 現代社会学」（全27巻）から20年以上が経ち、その間、社会も社会学もその姿を大きく変えた。今回の新しい「岩波講座 社会学」（全13巻、2023年より順次刊行中）では、各領域の到達点を示す現役の中堅世代から若手の書き手を中心に、社会科学の進展に裏打ちされた理論枠組、新たなテーマや対象、洗練されてきた方法論を示し、数理・統計的な最新の研究も収録。社会学が生まれてからの約100年の間に蓄積された遺産を受け継ぎ、次の20年、そして100年先の社会と社会学を構想するために刊行されている。

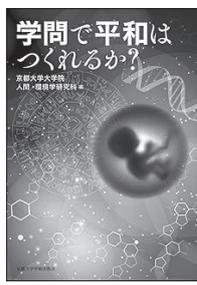
筆者が参加した「第9巻 福祉・社会保障」では、政策を論じるための語彙を提供する、福祉・社会保障の社会学の日本での到達点として、各種の政策、規範や因果効果の分析といった多様なテーマの論考を収録した。

筆者の執筆した章「社会保障政策の因果効果」では、社会保障政策の哲学・倫理学的研究、社会保障政策の要因についての歴史的・計量的研究、社会保障政策の機能（社会状況との関連や社会状況や個人への因果効果、そしてそれらの多様性）についての計量的研究のそれぞれについて、国内外での主要研究に加えて筆者自身の研究も含めて、分かりやすく概観・整理して紹介した。

（柴田悠）

[A5版 280頁] 3,740円（税込）

『学問で平和はつくれるか？』



京都大学大学院人間・環境学研究科編
京都大学学術出版会 2024年6月

本誌『総人・人環フォーラム』に5年間にわたって連載された「人間・環境学への招待」を1冊にまとめたものだが、単行本化にあたって各執筆者に最新の情報にもとづく加筆修正をお願いし、また、新たにコラムを5つ追加した。巻末の座談会参加者までふくめると執筆メンバーは33人にのぼる。

私が『総人・人環フォーラム』の編集担当になった際（その時点では『人環フォーラム』という名称だったが）、外部発信ももめられた。しかし、雑誌のままの外部発信には無理があった。端的に言って、本誌を書店に置いてもらうことは不可能だった。そこで考えたのが、連載を掲載し、それを単行本として書店で売るという方向だった。しかし、毎回5名程度の方に原稿をお願いすること自体がたいへんだったし、さらにその単行本化は難航した。ともあれ出版できたのは、執筆者の熱心な協力と版元の編集者・嘉山範子さんの卓越した編集能力の賜物だった。

同じ研究科に所属している教員でもたがいの研究内容についてはよく分からないところが多い。ましてや、人間・環境学研究科のように文系理系を超えた集まりならなおさらだ。その点ではすこしでもたがいを知るよい機会になったと思う。とはいえ、それはやはり内部発信だ。ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルによるガザへの報復攻撃が続くなか、平和学というコンセプトをさらに外部に発信したいと思っている。（細見和之）

[A5版 321頁] 3,080円（税込）

『20世紀中国史の資料的復元』

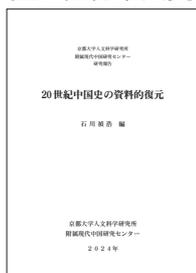
石川禎浩編

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 2024年7月

本書は、2019年4月より2024年3月まで行われた京都大学人文科学研究所共同研究班「20世紀中国史の資料的復元」(班長：石川禎浩)の研究成果報告論文集である。本研究班の掲げた「資料的復元」とは、石川班長によれば、中国近現代史に関わる公刊資料の多くが、国民党や共産党によって

特定の歴史像に符合するように選択、編纂されてきたことに鑑み、それらを編集以前の状態にもどすという作業に自覚的に取り組むことを指す。このこと自体は中国近現代史に限らず、歴史研究者が常に行わなければならない基本的作業だが、自らの使用する史料の成り立ちやその過程で行われた操作を、共同研究という形で他者に説明し、相互に検討するということを改めて意識的に行うのは、予想以上に難しく、また研究の深化に意義のある試みだった。本研究班の実施期間は新型コロナの流行時期に重なり、オンラインのみでの開催となった時期もあったものの、班員数は50人を越え、例会での報告では外部からの招聘者を含むコメントーターを交えて活発な意見が交わされた。本論文集は、この報告者の中から寄稿を受け査読を通過した論文17本を収録する。執筆者は、石川禎浩、丸田孝志、周俊、田中仁、島田美和、森川裕貴、温秋穎、瞿艷丹、村上衛、小野寺史郎、高嶋航、貴志俊彦、呉孟晋、都留俊太郎、水羽信男、瀬戸宏、岡野翔太(葉翔太)である。内容は18世紀の中国経済から清末・中華民国期の思想史、戦中・戦後の日中関係、中国共産党・中華人民共和国の政治史や社会史など多岐に渡るが、それぞれの専門から上記の「資料的復元」という課題に取り組んだ成果である。大部の論文集ではあるものの、オンラインでも閲覧可能のため、より多くの人に目に触れればと願う。(小野寺史郎)

[B5版 viii + 536頁] 非売品。京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センターウェブサイトおよび京都大学学術情報リポジトリ(KURENAI)でも公開。



『「アラブの春」のアクチュアリティーエジプト一月二十五日革命を中心にみるグローバリゼーション下の日常的抵抗』

大稔哲也編

山川出版社 2024年7月

2011年にアラブ諸国で発生した「アラブの春」全般というよりはむしろ、エジプトの1月25日革命を中心に据えた論集。4部構成で全12章+コラム10本、第I部～第III部はエジプトの事例、第IV部は比較のため周辺諸国の事例を扱う。執筆者はコラムも含めて総勢19名。筆者は依頼されて第6章『「一月二十五日革命」とコプト正教会一民主化とマイノリティ問題の不協和音』を分担執筆した。

手に取ってすぐ気付くのは、「アラブの春」に対する態度の差である。どうも研究者の一部には、「国家による抑圧 vs 自由を求めて戦う市民」という対立構造や、それによる「革命」「被抑圧者の解放」といったものに限りないロマンと情熱を感じるタイプの人がいるらしく、本論集においては編者が執筆した章でそれが行間からほとばしっている。

一方で、他の章では、そのような「革命」を称賛し美化する態度はあまり見受けられず、全般に地に足がついた現実的な論調だ。多くの執筆者によって多様な視点が提示されることにより、全384頁中110頁超を執筆した編者の「革命」に対する思い入れが中和されている点がまた興味深い。シリアの例を挙げるまでもなく、「アラブの春」とは中東研究者の専門地域との関わり方をあぶりだす出来事でもあったと考えさせられる一冊。(三代川寛子)

[A5判 384頁] 7,150円(税込)



『哲学の問い』

青山拓央著

筑摩書房 2024年8月6日

〈哲学をすることはどのようなことか〉を、問いを育てることを通じて掘み取ってもらうための入門書です。本書は前編と後編に分かれており、全部で24の哲学の問いが吟味されていきます。それらの問いの幾つかを、以下に挙げておきましょう。

「国家の存亡がかかっているとき、国外に逃げ出す自由はあるか」。「世界は物質だけでできているという考えは、科学的だと言えるのか」。「誰もがマスクを着けている生活は、恋愛について何を教えてくれるか」。「犯罪者は、非難の対象ではなく治療の対象として扱われるべきか」。

本書の前編にあたる〈対話〉編では、二人の人物の対話を通して、ある問いが次の問いを生み出し、その問いがまた次の問いを生み出していく様子が描かれています。その二人は二十歳くらいの男女としてイメージされており、これはちょうど、私の学部生向けのセミナーに参加してきた学生たちに重なるイメージです。そして、後編にあたる〈論述〉編では、いわゆる論述のスタイルによって、ある問いが一つの方向へとまっすぐ育てられていきます。前編では問いが「横に」育てられていくのに対し、後編では問いが「縦に」育てられていく、と言えるでしょう。(青山拓央)

[新書版 224頁] 968円(税込)



『オランダ語の基礎 [新版] 文法と練習』



河崎靖／クレインズ桂子／クレインズ フレデリック 共著
 白水社 2024年8月
 初級オランダ語文法をていねいに実力がつくまで学べる、ロングセラー参考書が新版として発売されました。CD付き旧版から装いを新たに、音声もダウンロード版となりました。本格的にオランダ語文法の習得を目指す、中級も見据えた方におすすめの1冊です。

本書は大きく「入門編」と「本編」に分かれています。入門編ではオランダ語学習の基盤となる、「文字と発音」・「スペリング規則」・「名詞の複数形」を学びます。付属の音声を繰り返し聞いて、自然な発音を習得しましょう。本編は各課、「文法」・「テキスト」・「文法練習」・「作文練習」から構成されており、詳しい解説と豊富な練習問題を通して、実践的で自然なオランダ語の基礎を効率よく身につけます。テキストは、対話形式やオランダ事情の小記事など形は様々ですが、いずれも各課で学ぶ文法事項に即し、色々な場面で応用可能な文章で構成されています。母語話者による吹込み音声もあるので、聴解力の向上にも役立ちます。また、本編の練習問題に、筆記・口頭の両方でアクティブに取り組むことで、正確な表現力を培うことができます。

巻末付録として学習者の助けとなる蘭和・和蘭単語集、そして、新版に際して情報通信関連の役立つ表現集を収録しています。

(河崎靖)

[A5判 242頁] 3,740円(税込)

『元自衛隊員は自衛隊をどうみているか——自衛隊退職者に対する意識調査・報告書』



ミリタリー・カルチャー研究会著
 青弓社 2024年8月
 本書は、ミリタリー・カルチャー研究会(代表・吉田純)が2023年に自衛隊退職者約2000人を対象として実施した「安全保障・防衛問題に関する意識調査」について、集計結果の要点を報告したものである。自衛隊関係者対象の意識調査で結果が一般公開されるのは、これが戦後初となる。

この調査は、2021年に全国の一般市民約2000人を対象として実施した「自衛隊に関する意識調査」(報告書は『日本社会は自衛隊をどうみているか』青弓社)と両輪をなし、現代日本における平和・安全保障問題をめぐる討議の基礎となるべきデータを、幅広い読者に向けて提供しようとするものである。

2つの調査結果を比較対照すると、軍事専門職として防衛の現場にいた人びとと、一般市民とのあいだに存在する意識の距離が、さまざまな角度から浮かび上がってくる。ただ、それは必ずしも距離の「大きさ」だけではない。たとえば冒頭の安保関連3文書に関する設問では、「もう少し時間をかけて国民の理解を求めべきであった」という意見が6割近くにも達している。

なお、この調査のより詳細な分析は、本研究科の紀要『社会システム研究』第28号(2025年3月刊行)で報告する予定である。ぜひあわせて参照されたい。(吉田純)

[B5判 139頁] 3,300円

『コミュニティ・デザイン新論』



新川達郎監修、川中大輔・山口洋典・弘本由香里編、前田昌弘他10名共著
 さいはて社 2024年9月

コミュニティ・デザインとは「デザインの力を使って地域の課題を解決すること」を指し、2010年代以降、コミュニティデザイナー・山崎亮さんが広めた概念である。本書は、同志社大学大学院で2010年度から2023年度まで行われていた「コミュニティ・デザイン論研究」講座に関わった研究者や実践者の中から15名が執筆者となり書かれた。

「新論」と掲げているが、山崎さんのコミュニティ・デザインを批判しているわけではない。むしろ、この古くて新しい概念の展開を顧みながら、そこで取りこぼされてきた普通の人たちの営みや社会課題・テーマについても拾い上げることで、従来のコミュニティ・デザイン論を捉え直し、未来にむけてアクティブな知として鍛えなおすことを意図している。

第一部「共生社会にむけた包摂／平等化」、第二部「むら・まちの持続／縮退」、第三部「現代的な共同性／公共性の創造」など、コミュニティ・デザインの「難問」に様々な学問分野(政策科学、社会学、減災・人間科学、建築学、事業構想学等)の執筆者が真正面から向き合い、対話し続けた記録と成果である。既にコミュニティ・デザインを実践している人もこれからの人も、読むたびにきっと新たな発見がある本である。(前田昌弘)

[A5版 368頁] 3,300円(税込)

感銘を受けた3点

三代川寛子（エジプト近現代史）

・ガブリエル・ガルシア＝マルケス（著）、鼓直（訳）『百年の孤独』新潮社、2024年。

文庫版が出版され評判になっていると聞き、手に取る。初読だし背景知識も乏しいので、何かを理解できた感はほぼゼロだが、「なんだかすごいものを読んでしまったぞ」というのが率直な感想。幻想的な奇跡譚が山盛りの聖人伝を読んでいるような感覚。これがかの有名なマジック・リアリズムというやつか。やられた。

・万城目学『八月の御所グラウンド』文芸春秋、2023年。

京都が舞台の直木賞受賞作というので読んでみた。今年の猛暑は強烈だったが、あの盆地特有の蒸し暑さ、蝉の声、そして送り火は、作家の手にかかるとこのように表現されるのかと感服。所収2作品の両方に妙にリアルな幽霊が出てくるが、京都という土地柄ではそういうこともあるだろうと変に納得する。ちなみに御所Gの主人公はおそらく京大生。

・大河ドラマ『光る君へ』制作：日本放送協会（NHK）。

京都に越してきてすぐの頃、自宅付近をうろついていたら紫式部の墓を発見してびっくり仰天したことがあるが、その後もドラマに登場する人物の邸宅跡、ゆかりの地など時々歩いて思いをはせている。平安宮内裏の弘徽殿跡に京町屋の宿泊施設があると知り、さらに驚嘆。一条戻橋の下には、安倍晴明の式神がまだいるかもしれない。いや、きっといる。

菊池亨輔（法哲学）

・ロバート・ノージック『アナキー・国家・ユートピア』（嶋津格訳、木鐸社）

再分配を抑制した小さな政府を支持するリバタリアニズムの古典。圧巻なのは、最小国家という結論それ自体よりも、その論証過程あるいは脇道にある思考実験と仮想モデルの数々だろう。議論や発想の鋭さが段違いだと思う。多くの背景知識を必要とせず純粋に思考力で勝負するタイプの著作だけに、理解が追いつかない自分の力不足を痛感させられつづけた。

・田中芳樹『銀河英雄伝説』（創元SF文庫）

腐敗した民主政と聡明なる独裁者の専制という二択を突き付ける物語（本誌41号で福谷先生も挙げておられた）。民主主義の価値を考えるうえで興味深い。だが、決して堅苦しい話ではなく、個性的かつ魅力的なキャラクターが目白押しのSF艦隊バトル物として読める。ヤンとラインハルトの両雄相まみえることになる第5巻（本編全10巻）が、怒涛の展開で気に入っている。

・カニの内子

この夏、北海道網走の料理店で注文した一品。京都で見るコッペガニの内子のようなものを想像していたのだが、提供されたのは生でドロドロした黒紫の何か。食べ物らしくない見た目をしている。味は油のkokをまとった濃厚な出汁という感じで旨味の塊。無理にたとえるならナスのすり流しをさらに濃厚にしたようなもの…だろうか。衝撃的だったので、おかわりした。

佐野亘（政治学・公共政策）

・ケリー・ライカートの全作品

ライカートについては、名前を聞いたことがある程度だったの

ですが、たまたまAmazonPrimeで無料だったので、「リバー・オブ・グラス」をみたところ、たいへんな傑作でした。驚いて、あわてて他の作品もAmazonPrimeでみれるものはすべてみました（いくつかは有料）。ひさしぶりに、ただひたすらみられる、なにが起こっても、なにも起こらなくても、ただひたすらみられる映画たちに出会えて、とても幸せでした。

・ブライアン・ライター（大戸雄真訳）『ニーチェの道徳哲学と自然主義』春秋社

ニーチェのテキストを分析哲学的に読む、という、まったく予想外の、罰当たりな本で、よくこういう読み方ができたな、ということだけで、感動しました。もちろんこういう読み方では見落とすものがたくさんあるのですが、とはいえ、これはこれで筋の通った読みとなっており、ニーチェをヒューム的な自然主義者として捉えるという結論にも納得しました。

・堀川恵子『透析を止めた日』講談社

配偶者が生まれつきの難病で、若いころから人工透析をおこなっていて、途中、腎臓移植を受けるものの、その腎臓もダメになり、結局また人工透析に戻ってから…という話です。人工透析はかなりつらい治療であり、かといって透析をとめると確実に死んでしまう、という程度のことは知っていましたが、具体的な治療の実態や医療体制のあり方、法制度上の問題など、多くの学びがありました。もちろん夫婦の会話や関係性にも強い印象を受けます。読後少しのあいだ精神的にも体調的にも不安定になるほどでしたが、だれもが読んでおくべき本だと思います。

須藤秀平（ドイツ文学）

①昔話『舌切雀』

四歳の長男と一緒に一歳の次男が寝室で寝るようになった。寝付くのが遅くならぬよう、早めに部屋を暗くしてしまいたい、そんなときに絵本を読む代わりに自分が覚えているおとぎ話を語り聞かせることも増えた。『舌切雀』は「雀のお宿」というパワードワードに長男がハマり、何度か聞かせたものの一つだ。私が知る話では、おじさんは逃げた雀を探す途中で牛飼や馬飼に会い、道を教えてもらう代わりに牛馬を洗った汚水を何杯も飲まされる。人質の安全のために自傷的な行為を強られる、デスゲーム系映画のような不条理。それを強いるお前は誰やねん、とツッコミたくなる。とはいえ得られる成果とは無関係に必要なかどうかもわからない不快な思いをさせられるというのは、社会では案外ありふれた光景なのかも、などと思いつく。こうしておとぎ話を語りながら、こちらはどんどん眠れなくなるのだった。

②映画『ラストマイル』（監督：塚原あゆ子、脚本：野木亜紀子）

塚原・野木タッグ作品が好きだ。「社会性とエンターテインメントは切り離せない」という野木の言葉通り、万人受けするポップさを保ちながら、同時に高度なリテラシーを必要とする充実した内容を含んだものと私は評価している。本作は久しぶりに映画館に足を運んで鑑賞した。映像に関して言えば、ある人物にとっておそろしく残酷なはずの場面を美しい画で描くのが毎度ながら上手い（おそらく心がけているのだろう）。反対に、登場人物に迫る命の危険がドラム式洗濯機のおかげで回避されるというくだりも、物悲しいおかしさがある。テーマとして巨大ショッピングサイトビジネスを批判するものでありながら、「白物家電」の権化

たる洗濯機を救済のアイテムとするあたりが、社会問題を糾弾するよりもそうした社会の中で生きている市井の人に寄り添うというアティチュードの表れのように思えて好ましい。

③ 沢登り

私は家や研究室に籠もるのが苦手で常に屋外をうろついているが、趣味は完全にインドアだ。季節かまわず屋外をうろつくせいで日に焼け、そのせいか「何かスポーツをされるんですか？」と聞かれることも多いが、スポーツは断じてしない。そんな私がこの夏、沢登りを始めた。鹿狩りや魚捕り（魚釣りではない）を趣味とする悪友の誘いだ。これで晴れてアウトドアな趣味が一つできた。

沢登りとはその名の通り、山に入り沢の流れに逆らい登っていく、ただそれだけのアクティビティである。ただし沢には水深が深いところもあれば滝もある。コースによっては建物の二階ほどの高さの滝を命綱なしで登る瞬間もあり、落下リスクなど相当な危険も伴う。滝崖の途中で進退窮まり、どうしよう助けてという悲鳴が脳内を満たすが、同行者が単独で手を貸すことはほぼ不可能、そもそも轟轟と押し寄せる落水の音で声も届かない。この瞬間が——変態認定されそうだが——ものすごく快感である。自分の苦境をいくら訴えても誰も助けてくれないという実感。「自分のせいじゃない」「こんなはずじゃない」などという戯言は一切通じない。どんなにみっともなくともとにかく手や足を先に伸ばす以外の選択肢はない。生きるとはきっとそういうものだ。何かの責任を政府や社会に転嫁したり、満ち足りた部屋の中で安寧をむさぼりながら他者に自己責任論を押し付けたりしてしまいそうなきは、沢に入って滝崖にへばりつければよい。

小島泰雄（人文地理学 中国研究）

AI（人工知能）にかかわる2点から。まずAI翻訳ツールのReadable。英文PDFをそのまま和文PDFに変換するもの。翻訳精度が格段に向上したことで、気軽に英語論文の流し読みができるようになった。読み直すべき論文かどうかの判別だけでなく、論旨を母語で把握できる意味を再認識している。

2つ目は、生成AIレポートの出現。講義を発展的に学び直す機会として、A4一枚の課題レポートの提出を求めてきたが、これまでとは異なるタイプのレポートが見られるようになった。出来のよいレポートだが、提出者の期末試験成績が不釣り合いに悪いのが特徴。これが研究論文に拡がるとしたら、と考えるだけで恐ろしい。

3点目は、Tim CresswellのGeographic Thought (Blackwell, 2013)。学生と一緒に演習で読み進めている学史研究の書。同時代として経験した人文地理学の激変を、論理実証主義やポスト構造主義といった科学哲学から再考する機会となった。今の学生は、私たちの世代に比べて多くのことを考えなければならないのだと、同情する。

吉田純（社会学）

・中島みゆきコンサート『歌会 VOL.1』（2024年2月20・22日、3月15日、東京国際フォーラム／4月25日、大阪フェスティバルホール）

コロナ禍のため中断を余儀なくされた2020年のコンサートツアー「結果オーライ」から4年を経ての再会。その空白期間をまったく感じさせない力強い声の伸びと、バックの緊密かつ滾りに満ちたアンサンブル、そして彼女個人の等身大の生活世界から、時空を超えて全世界へ、さらには異世界へと広がり往還するまなざ

しの遙かさ——それはずっと以前から変わらない表現スタイルではあるけれど、ひとつのコンサートの中でその遙かさをこれほど体感したのは初めてかもしれない。

・ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』（2024年3月29日、大野和士指揮東京都交響楽団、新国立劇場）

この楽劇の本来の意味での官能的な世界の核心へと、現実世界の全てが凝縮していくかのような求心的なワーグナー。二幕の愛の二重唱と終曲「愛の死」では、何度も全身が震えるような衝撃が走った。高水準の声楽陣の中でも、とりわけ印象深かったのが藤村実穂子 (Ms) のブランゲーネ。イゾルデの侍女として、物語内でのこの悲劇の演出者かつ客観的な観察者でもある彼女の視点が、時に繊細をきわめ、時に切迫感に満ちた歌声によって明示されていた。

・マーラー 交響曲第3番（広上淳一指揮京都市交響楽団、2024年8月23・24日、京都コンサートホール）

夏への讃歌ともいべきこの交響曲の色彩と魅力を余すところなく激しく、また繊細に描く楽器群。たとえば第3楽章での遙かな時空から響いてくるかのようなポストホルンのソロや、『ツァラトゥストラ』をテキストとする第4楽章での——3月の『トリスタン』でも名唱を聴かせた——藤村実穂子 (Ms) の強い声と深々とした歌、さらにその後半でのコンサートマスター石田泰尚との掛け合いの緊張感は、これまでCDやサブスクリプションで聴いてきたこの曲の数多くの録音でも気づけなかった何かを開示していた。

【追記】定年退職を控えた2024年は、家人からの誘いもあり、クラシック、ポピュラーを取り交えて25回もの音楽ライブに足を運んだ。これはもちろん私の生涯最多の経験である。その中には、上記3点以外にも多くの記憶に残る公演があるが、1点だけ追記すると、宮本浩次のコンサートツアー『今、俺の行きたい場所』の千秋楽（12月5日、神戸ワールド記念ホール）。どこまでも伸びてゆくハイトーンのヴォーカル、全力疾走の感覚、そして未来への肯定感に満ちたメッセージは、個人的には、定年後の第2の人生への励ましを受けたような気もした。

柳瀬陽介（英語教育）

(1) 江藤淳『海舟余波』講談社文芸文庫

「倫理」について再考した時に、私がまず想起したのが勝海舟であった。山岡鉄舟びいきの自分がなぜと訝り、彼の談話録である『水川清話』を再読すると圧倒された。海舟は、時に狂とも賊とも誇られながら、特定の個人や集団という「私」のためでなく「公」のために身を捧げた。むろん彼にも欠点が多い。だが、江藤淳の書で海舟の葛藤が少しわかった。

(2) John D. Caputo “The Weakness of God” Indiana University Press
倫理について考えたのは、ガート・ビースタ (Gert Biesta) の著作に出会ったからだ。久しぶりに共感できる教育学書に出会えた。印象的な箇所が彼が引用していたCaputoのこの書も読んだ。「創世記」には、無から存在を創造したヤハウェと、存在を善としたエロヒムの2つの神が描かれている。現代の教育に必要なのはエロヒムの創造ではないか。

(3) ナシーム・タレブ『身銭を切れ』ダイヤモンド社

だがイデオロギーの陶酔は禁物である。そこで、ここ数年、折にふれて翻訳・原著・原著朗読版でこの本に立ち返っている。多くの人文・社会科学者は自らの理屈に酔う“rationalizer”に過ぎないのではないか、“What is rational is that which allows for survival.”であり現実こそを見よ、という在野の賢人の言葉は重い。

霜田洋祐 (イタリア文学)

・コデーラ渓谷ハイキング

登山好きの友人の誘いで、ミラノの北に位置するコモ湖のさらに北、アルプスの南側の渓谷にハイキングに行く機会を得ました。徒歩かヘリでしか訪れることのできない集落で「地中海のイタリア」とはまた違う絶景を見るも、その日の夜からしばらく筋肉痛で体がガタガタになったのですが、その経験が意外にも「イタリア語中級」の授業で用いたテキストの読解に役立ったのは愉快でした。

・フィレンツェの某トラットリーアのニョッキ

YouTuber もしている日本人シェフの店でニョッキを一口食べて驚きました。これまで食べた中で一番美味しいニョッキでした。

・ダリオ・ヴォルトリーニ『寒気 Invernale』

イタリア文学界最高の賞「ストレーガ賞」の最終候補に残った作品。著者が「京都文学レジデンス」のために来日するというところで読んでみました。自伝的作品で、肉屋をしていた父親の仕事の描写は克明で生々しい。肉の解体の最中、誤って自分の指を切り落としそうになるという場面は、それを讀んだのが友人宅でのパーベキューに向かっているときだったためにいっそう記憶に残りました。

小木曾哲 (地球科学)

・I's「永遠衝動」

あのちゃん率いるパンクバンド I's の代表曲。「正解だったら幸せだったか…」という問いが心に刺さる。残念ながら令和6年限りで解散してしまったが、あのちゃんには今後もパンクロックを歌い続けてほしい。

・鍋倉夫「路傍のフジイ」

まさかこの年になって漫画にハマるとは思わなかった。40過ぎて非正規雇用の独身男、藤井。取り立てて秀でたところもなく、地味でマイペースに生きているだけのこの男に、接する人はみな惹かれていく。藤井を見ていると、自分が大切に思っていることを堂々と大切にすればいいんだな、と思えてくる。

・朝日夜「ギャルとぼっち」

よりによってギャルが出てくる漫画にまでハマるとは思わなかった。心を閉ざしがちな高校生のひなが、クラスメイトでギャルの林原に翻弄されながらも少しずつ心を開いていく日々が描かれている。がさつでデリカシーがなさそうでも、自分の好みを押し付けず相手を否定せず、等身大の相手をそのまま受け入れて尊重する、林原の姿が美しい。

柴山桂太 (経済学・経済思想)

①「空海、密教のルーツとマンダラ世界」(奈良国立博物館)

最近、修復が終わったということで展示されていた高尾曼荼羅が圧巻だった。東寺にある極彩色の曼荼羅とは違い、濃い紫地に金銀泥で描かれた高雄曼荼羅は、スケールの大きさとデザインの新しさで、見飽きることがない。極彩色の曼荼羅は情報量が多すぎて私の頭ではちょっと処理しきれないが、護摩の焚かれたお堂の真っ暗な空間でこの深紫の、巨大な曼荼羅と向き合うことを想像してみると、おそらくは宇宙の無限の広がりを陶然と感じることになるのだろう。曼荼羅は頭で理解するものというより、全身で没入すべきもの、という感覚をつかむことができたのは嬉しい体験だった。

②「関心領域」(ジョナサン・グレイザー監督)

何かと話題の「オープンハイマー」(クリストファー・ノーラン

監督)を楽しみに見たが、私には合わなかった。特に、原爆実験の大爆発シーンを何か崇高なもの(恐怖を伴う美)であるかのように描いていたのには呆れてしまった。その点、アウシュビッツを舞台とする映画でありながら、収容所内で起きた残虐行為を直接的には映さない「関心領域」の方が、心に残るものがあった。映像では収容所所長ヘスの、牧歌的にも見える家族の物語が続いているのに、音響ではずっと禍々しいサウンドが流れ続けている。その不気味さにひたすら居心地の悪い思いをしながらも、「語り得ないものを語る」のにこういうやり方もあるのかと、感心しながら見た。

③最近のヒット作に見られる悪の表象

Netflix で話題となった「地面師たち」や「極悪女王」を見ると、悪の描き方にパターンがあることに気づく。悪人は生まれつきの悪人ではない。本当は善人なのにちょっとしたきっかけで悪の仮面を被ることになった、という物語だ。元はかわいそうな善人であることが分かっている分、観客は遠慮なく悪に感情移入できる。同じようなパターンは『ジョーカー2』でも見られた。ジョーカーはあくまでも仮面でしかなく、素面は孤独で心優しいアーサーのままだった、というわけである。

今年アメリカでは、スキャンダルで悪名高い男が再び大統領に選ばれたが、その人気を支えているのも同種の想像力かもしれない。彼は憎まれ役を買ってでてるが、本当は心優しい、愛すべき善人なのだ——そう感情移入する人々が岩盤支持層を形成しているのだとしたら、現実とフィクションの境目は、もうとっくの昔に失われているのかもしれない。

前田昌弘 (建築学・まちづくり)

・エリック・クリネンバーグ著、藤原朝子訳(2021)『集まる場所が必要だ—孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』英治出版

総人の後期の演習で課題図書として学生らと読みました。本書で居場所を「社会的インフラ」と呼んでいることに最初は違和感を覚えていましたが、読み進めていくうちに社会的居場所(家でも職場・学校でもない、いわゆるサードプレイス)こそ「インフラ」だ、と納得させられるところがありました。学生にとっても居場所は身近な話題であり、かつ都市・まちづくり分野の古典や最新の研究成果を幅広く的確に参照しながら書かれており、教育効果の高い一冊です。

・宮本匠(2024)『「みんな」って誰?—災間と過疎をのびのび生きる』世界思想社

2024年は新潟県中越地震から20年の節目の年でした。学生時代から通う過疎化が進む被災集落でのアクションリサーチにもとづいて被災地の真の意味での復興を「みんな」(=空気)の力という切り口から紐解いています。平易な語り口ながら、著者の専門であるグループ・ダイナミックスの学問的なエッセンス、面白さを的確に伝えています。私が調査していたインド洋大津波からも既に20年が経過。久しぶりに現地を訪れてみたくになりました。

・平野愛 写真展(2024)「moving days in KCUA」

人生の節目に訪れる「引越し」という祝祭/儀式を取り続ける「moving days」シリーズを展開している写真家・平野愛さん。本展は、京都市立芸大の「引越し」という大規模プロジェクトに挑んだもの。写真とテキストを通じて、多様で雑多な要素が詰まった空間に目眩を起こしながらもシャッターを切る息遣いが伝わってきました。「(引越しは)どこへではなく、何から引越すのかである」という言葉は、災害等で家を失った人々を考える上でも私の心に刻まれています。

縄田浩志（資源管理学）

- ①石原正恵・赤石大輔・徳地直子編『「大学の森」が見た森と里の再生学－京都芦生・美山での挑戦』京都大学学術出版会、2024年。
- ②池田知久『荘子（上）全訳注』講談社学術文庫、2014年。
- ③梅棹忠夫『梅棹忠夫著作集第12巻 人生と学問』中央公論社、1991年。

院生のために学術越境センターが企画した「Field Encounter」の付き添いとして、芦生研究林を訪れたのは、秋分のころであった。個人的には修士1回生のゼミ合宿以来であったから、およそ30年ぶりであったが、象徴ともいわれる巨木「大カツラ」を目にしたのははじめてである。樹齢は800年くらいと考えられ、根元から複数の幹が分岐して立ちあがる樹形が特徴的で、朽ちているようにも見える幹を含めた全体ではそれ以上かもしれない、と石原正恵研究林長から説明を受けた。この老木を住みかになっている着生植物は40種にもものぼることを、枝にかかったままになっているロープをつたって調査する研究グループが明らかにしつつある。すでにスギ、ケヤキ、イロハモミジ、フジ、カヤ、カエデの6種が宿っていることが知られ、京都丹波高原国定公園内にある別のカツラの木は、7種の木が共生しているから「七色の木」と名づけられて、天然記念物に指定されているそうである。ふわっと、まるでわた菓子のような甘い匂いがした。そのカツラの香りが、半年前まで10年ほど東北地方に暮らしていた時に訪れた、世界遺産白神山地にある青池の湖畔へと私を連れ戻した。と同時に、ほんの少し前に知ったばかりの『荘子』「櫟社の散木」、まさにその大木が実際にここに！と興奮してしまった。“資源”をどう捉えていたのか気になって読み漁っていた『梅棹忠夫著作集』の中で「未来社会と生きがい」を議論する際に引用されていたのである。大工の棟梁が弟子をつれて田舎をあるいていた。すると社にそびえる神木の櫟の木を見た。クヌギの木は、枝をひろげて、うっそうとしげっている。それを大工の棟梁は、横目でみて通り過ぎていく。うしろからマサカリを担いでついできた弟子は「先生、あんないい木があるのに、なんで、知らん顔して通りすぎてしまわれたんですか」とたずねると、大工の棟梁は「バカもの、あの木は無用の大木じゃ。役にたたんからこそ、伐られもせずに、あんなに大きくなったんじゃ」という。

本誌『人環フォーラム』創刊号の対談「自然と文化の境界を越えて」において、梅棹忠夫はこんなことをいっている。「大学は実用的なことをやる場所ではない。私の三校時代に数学の教授をやっていた秋月康夫という人が、こう言うたんです。「自分のやっている数学は、何の役にも立たない。まったく応用的なものではありません」。そうしたら、「なんのためにそんな数学をやるんですか」という質問がきた。彼の答えがいいんです。「これは人類の栄光のためにやっておる」。しびれた。そういえば私なんかやってきたのは全部、人類の栄光のためだけのものである。人類という知的生物が地球上に発生して、そのエッセンスが学問だと、私は考えている」。

梅棹忠夫の「わが人生の理想」は、「役にたたなくてもよいから、ヌクヌクと生きましょう」つまり「櫟社の散木」なのだという：「材はかなわんですよ。役にたつ秀才にはなりたくない。孤独であろうと、たくさんひとといっしょであろうと、材はかなわん。ましてや英雄なんてものもまっぴらご免ということです。そういう生きかたからできるだけはなれた生きかたを、わたし自身もなにかさぐってみたい。そういう人たちは、現代でもたくさんいるとおもうんです。それに対するひそかな共感を日々おぼえている、というところでしょうな」。

じつは「櫟社の散木」の話は続き、社の櫟が夢枕に立って、大

工の棟梁にいう。「なまじ役に立つ取り柄があるために、かえって己の生命を苦しめるもの。だから、天寿を全うしないで、途中で若死にする結果にもなるわけだが、自ら世の俗人たちに打ちのめされようとするものだ。こういったことは、何も木の場合だけに限らない。あらゆる物がこうなのだ。それに、私はずっと以前から、役立たずでありたいと願ってきた。その願いは、死に近づいた今になってやっと適えられ、真に役に立つ存在になったのだ。仮りに私が世間並みの役に立つ木であったなら、一体、ここまで大きくなれたらどうか」。

原生林というフィールドでの出会いを契機に、いま一度、古典に立ち還り、往還しつつ、思索にふける…。私は「散木」になりたいのか、「材木」になりたいのか？ どちらであっても「七色の木」に、なれたりはするのか？ いや「人類の栄光のためだけ」としての学問にいそむべきなのか？ こんな自問をしている充実した時間は、何物にも代えがたい。「憤みてなんじの身を守れば、物まさに自ら壯んらん」とす（『荘子』在宥）。

戸田剛文（哲学）

昨年、息子のクリスマスプレゼントがPSだったこともあり、小学一年生の息子の教育上問題がないかどうかを確かめるべく、ゲーム嫌いの私ではあるが、やむを得ず調査を行い、その中で印象に残った3作品をここで挙げることにした。

- ・ドラゴンクエスト11 過ぎ去りし時を求めて

中学生の時に自分が（やむを得ず）遊んでいたシリーズが今でもその雰囲気を残しつつ受け継がれていることに驚愕した。華やかなグラフィックになっているが、やはりドラクエ。しかもセリフにふりがながついていて、まだ漢字力が弱い息子でも読書がわりに使える（ような気がする）のがよい。

- ・ファイナルファンタジー7リメイク

自分が大学生のときに（やむを得ず）遊んだゲームが、今でもリメイクされて（若干ストーリーは違うけれども）生産されていることに驚き。ただし超華麗グラフィックになったために、キャラクターの顔もリアルであるのだが、なんといかみんな同じような整い方の顔で、没个性的というか、偏った美意識というか、ちょっと気持ち悪いと感じた。グラフィックが綺麗になればいいというのではないということだろうか。（ゲーム自体は小1でも問題ない）

- ・ゴッド・オブ・ウォー

冒険や戦いを通して父と子が絆を深めていくという、まさに我が家にとってつけのテーマではあり、上のFF7と違って顔にも個性があり（ほぼゴリとヒゲしかでてこないが）、なかなかよかったのだが、斧で敵を切り刻みすぎるため、しばらくのあいだ息子がなんか棒みたいなものを見つけてはリアルに攻撃してくるようになるという副作用はあった。（子供にさせていいのかは賛否両論あると思われる）。

細見和之（ドイツ思想）

- ・劉燕子『不死の亡命者——野性的な知の群像』（集広舎）

20年以上の歳月をかけて提出された博士論文にもとづく、710ページにわたる大著。天安門事件によって亡命を強いられた作家・詩人たちのライフヒストリーと歴史的現実を絡み合わせて、大きなタペストリーが紡ぎ出されている。『現代詩手帖』2月号に私の長文の書評が掲載されるはずなので、そちらも参照いただきたい。

- ・長谷川唯さんのサッカー人生ノーファール

マンチェスター・シティのミッドフィールダーとして活躍して

いる長谷川唯さんは、これまでのサッカー人生をノーファールで通しているようだ。レッドカードはもとよりイエローカードももらったことがないというのである。それを知って、自分はこれまでの人生で何回ファールをしてきたかと振り返ってしまった（レッドが何回？ イエローが何回？）。

・娘の航空部への入部

4月から大学生活をはじめた下の娘。その彼女から、5月はじめに、グライダーの写真とともに航空部に入ったという連絡があった。もちろん、なんの相談もなしに、である。自動車などに引張ってもらって空に浮かび、ロープを切り離れた後は気流に乗って飛ぶのだそうだ。空を飛ぶ娘に深い感銘を受けたことは事実だが、離陸はともかく着陸は大丈夫かと気になって仕方がない。

乗山智成（英文学）

①依田義丸『連禱』（思潮社、2024年5月）

②兵庫芸術文化センター管弦楽団『ブラームス交響曲第4番』（2024年9月）

③兵庫県立ピッコロ劇団『パレードを待ちながら』（2024年4月）

①本研究科名誉教授、依田義丸先生が2024年3月14日にお亡くなりになられた。先生はシェイクスピア演劇の研究者であったが、詩人でもあられ、1991年思潮社より出版された第一詩集『けいおす』は〈詩の芥川賞〉と呼ばれるH氏賞の候補作品となった。その後も詩や小説を書き続けておられたが、公けにされることは稀であった。しかし、この度旅立たれるに際し、第二詩集『連禱』を公表された。この詩集は『けいおす』に引き続き、メタ詩としての性格を持っており、詩というジャンルに魅了されつつ、その制約や伝統から自由であろうとする詩想が鮮やかな展開を見せる。闘病の中、このようにしなやか、かつ力強い詩集を生み出され、遺されたことに、深い感銘を受けざるを得ない。

鵜飼大介（文字史、メディア史）

・芹沢俊介『「存在論的ひきこもり」論』（2010年）

著者は、「する自己」（行動の水準でとらえた自己）の基底に、「ある自己」（存在の水準でとらえた自己）があると考える。「ある自己」が傷つくと「する自己」も失調して、十分に活動できなくなる。ひきこもる人に対しては、性急に何かを「する」ように求めるのではなく、「ある自己」が修復されるのを待つ必要があるとする。「する自己」を中心に考えがちな自分にとって、重要な指摘だった。

・太宰治「きりぎりす」（1940年）

ひっそりとよい絵を描いていた画家が、出世して金持ちになるにつれて、おしゃべりになり、取り巻きたちの追従のなかで俗物化していく。ラジオから画家の声が流れてきて、「私の、こんにち在るは」という尊大な話しぶりに、画家の妻は心底愛想をつかしてしまう。素朴さを保つことは、少しばかり難しい。

・将棋界の棋士編入試験

西山朋佳女流三冠が棋士編入試験に挑戦して、初の「女性の棋士四段」が誕生するかどうか。どんな分野であれ「最初の一人」になって「それが実現しうる」ということを示すのは難しいが意義深いことだ。

合田典世（英文学）

・千早茜『雷と走る』（河出書房新社）

Kindle 読書が習性になっているはずが、珍しく単行本でジャ

ケ買い。Xに上がる写真と文が好きな作家さんだったのもある。この世の「越えられない壁」は色々な形で存在する。それでも、描き出される犬の生臭い存在感、アフリカの鮮烈な光景は、この主人公が、「壁」を越えてその生き物と確かに通じ合ったことを証立している。

・『Beautiful Life ～ふたりでいた日々～』（脚本・北川悦史子）

学部生の頃、リアルタイムで観ていたドラマをNetflixで再視聴。美容師業界、車いす業界、図書館業界（と酒屋業界）が交錯する本ドラマを四半世紀ぶりに観ると、あらゆる細部から時代が変わったことを実感して、とにかく新鮮だった。こんな感想を抱く未来が来るとは知る由もなく、ただキムタクに狂っていたあの頃の自分が懐かしい。

・『カラオケ行こ！』（監督・山下敦弘、脚本・野木亜紀子）

カラオケ好きとして一応、と大した期待もなく観始めたら、面白くて全く退屈しなかった。あとから読んだ和山やまの原作もよかったことは言うに及ばず。実写化というのは大概イマイチになりやすいが、これは主演の齋藤潤、綾野剛のキャスティングがハマっており、映画オリジナルのエピソードもいまいち面白くなっていった。

福元健之（西洋史）

・良知力『向こう岸からの世界史——一つの一八四八年革命論』（1978年、未來社）

西洋史、近現代史、スラヴ（二外がロシア語だった）に関連する卒業論文のテーマを探している中で出会った社会思想史の古典。いま手掛けているのはだいたいぶん違うテーマになってしまっているけれど、良知から受けた感銘がいまも研究の原動力で、定期的に読み直す。

・「ロマンシング サ・ガ2」（1993年、当時スクウェア）

いわずと知れた伝説の詰みゲーム。最近リメイクがでたのをきっかけに妻と遊んでみた。世代を超えて年代記を紡ぐような形式。後戻りできないのがとてもリアル。目が回るから新しい版で遊べないのが少し悲しい。

・『劇場版 忍たま乱太郎 ドクタケ忍者隊最強の軍師』（2024年、松竹、亜細亜堂）

あのほのぼのとしたギャク・アニメに、若干のスパイス＝シリアス。みんな結構、忍者してたけど、ハードボイルドになりすぎないバランスが絶妙でした。わたしは伊作先輩推しです。

菅利恵（ドイツ文学・演劇）

・キャスリン・T・ガインズ『アーレントと黒人問題』（大形 綾、百木 漠、橋爪 大輝訳、2024年）

人間の営みを独特の仕方でも分類したアーレントの思想は、近代が抱え持つ全体主義の芽を鮮やかに可視化させた。しかし本書は、この卓越した思想の死角に光を当てる。アーレントは黒人問題を恣意的に低次元の領域に分類しており、「恣意」の裏には差別的な偏見があった——こう主張するガインズの議論は説得的だ。どれほど誠実な思想にも「見えていない」部分はあり、この当然の事実もまた「見えなく」なりやすい。というより、自らが感銘を受けたその思想の死角を言語化することはとても難しいのだ。近代思想の死角は往々にして植民地主義にまつわるものである。イスラエル建国の暴力性という「死角」をいまだに消化できずにいるドイツの現状をみても、本書の重要性は明らかだ。

・ユーリ・ツェー『メトデー 健康監視国家』（浅井 晶子訳、2024年）

原題はラテン語の *Corpus Delicti*、「罪の体」。ドイツでは「物的証拠」を意味する法律用語として使われているらしい。この物語では「体」がそのまま「罪」の証拠となるのだが、それはここで「心身の健康」が宗教のように絶対視されているからだ。支配機構「メトデー」は、人びとの健康と幸せのために徹底した監視網を敷く。食べるものや寝る時間、運動量まで報告を求め、わずかな「危険」も見逃さない。「あなたのため」の優しい配慮は、いつも規律化の暴力と背中合わせだ。規律化に取り憑かれると必ず魔女狩りが始まる。苦い戒めを含んだ、リアルでスリリングな現代の魔女物語。

・琵琶湖博物館（滋賀県）

かつて琵琶湖は今の三重県にあり、長い時を経て現在の場所に落ち着いたという。しかし湖が「動く」とは？ 下の子が夏休みの自由研究に「琵琶湖」を選んだので、初めて琵琶湖博物館に遊びに行った。訪れてみると、目から鱗の連続。湖ひとつに、地球の過去や現在、未来を読むための鍵がどれほど豊かに含まれていることか。文学で湖といえば異界への入り口だろうが、実際にはそれは地球環境の現在地を「読む」ことができる極上の資料だった。同じ古代湖仲間らしいバイカル湖関連の展示も面白く（いつか行ってみたい）、帰りに立ち寄った湖畔のドイツ料理店も美味しかった。なお子どもの自由研究は「かつて三重にあり」の通説になぜか全力でツッコミを入れており、その結果なぜか入賞していた。

安部浩（哲学）

・山中千尋ニューヨーク・トリオ公演

令和五年の秋、アルバム「Dolce Vita」の発売を記念する本公演を聴く。テンポとリズムが千変するリズム・セッションを率いて疾走し、時に揺曳する山中のピアノ。W. ショーターの名作、それに優るとも劣らぬ山中の自作に感銘しきりであったが、殊に心を打ったのは、故・坂本龍一の「amore」。ブラームスの間奏曲を想わせる旋律を山中は一心に繰り返し、長嘯する。演奏ではない。魂招ぎであった。

・『陶淵明全集』（岩波文庫）

枕頭の本。何時であれ、何処であれ、誰であれ、生きることの根本的な構えをなす生死。生死海に漂没しつつ、詩人はそれを飛魚の如く跳出して正視する。生を明らめ、死を明らめ、貧に安んずる「固窮之節」。だがそこには不思議な〈のどけさ〉（「独閑」）がある。しかもこの単独者は決して孤独ではない。私淑して已まぬ「前修」も居れば、酒を酌み交わす「比鄰」も居る。そして就中「吾契」一かの桃源郷がある。

・映画「Perfect Days」（ヴィム・ヴェンダース、2023年）

白居易の所謂「中隠」。親鸞の所謂「非僧非俗」。清規の自己立法に基づく千篇一律の生活と、波瀾による揺らぎ。樹陰に木洩れ日を見る如く、俗中に真を覩る主人公。その泣き笑いを赫奕と照らす旭日。そして人生は続く。不如意なる未了の日々— imperfect days —が彼を待ち受けている。

桑野 太輔（地球科学）

・比叡山—大文字山（京都府京都市）

京都盆地から東側に目を向けると、大文字山と比叡山がそびえ、その間が少し低くなっているのが見える。これらの景色は、私たちにとって日常の何気ない風景であるが、実は地球科学的には興

味深い意味が隠されている。京都周辺の山々の地層は、深海で降り積もった泥や砂、生物の殻などでできているが、比叡山と大文字山の間には特別な地質が存在する。この場所では、はるか昔に地下からマグマが上昇し、ゆっくりと冷え固まることにより花崗岩と呼ばれる岩石が形成された。その際に、マグマによる熱の影響で周囲の地層は変化し、ホルンフェルスと呼ばれる硬い岩石に変化した。これらが長い時間を経ることで、脆い花崗岩が分布する部分は削られて低くなり、硬いホルンフェルスが分布する比叡山と大文字山だけが高く残ったのである。私は、京都大学に着任して1年ほどであるが、人類の歴史だけでなく地球の壮大な歴史を肌で感じられる京都は、自然科学的にも魅力を持つ街であると感じた。

小林哲也（ドイツ文学・精神史）

・1930年代のホルクハイマーの著作

「批判理論」の提唱者にして「フランクフルト学派」の創始者だが、戦後はアドルノに比して注目されることの少なかったマックス・ホルクハイマー。30年代の著作からは、情熱的で気概に満ちていながら、自らの理論の弱さにも正直で、その「揺れ」を隠せないホルクハイマーの姿が浮かぶ。彼が30年代に提唱した批判的「学際研究プロジェクト」、そして、当時のマルクーゼやフロム、そしてベンヤミンのホルクハイマーとの関係を再検討したくなる。

・『ザッハー＝マゾッホ集成 I～III』（平野嘉彦・中澤英雄・西成彦訳）

「マゾヒズム」の名の由来としてよく知られるドイツ語作家のマゾッホ。「エロス」をめぐる作品群（第1巻）の他、マゾッホの出身地オーストリア帝国ガリツィア地方を舞台とした「フォークロア」を多数収録している（第2巻）。スラヴ、ユダヤ、スラヴ（ロシア、ウクライナ）、ポーランドが入り混じる習俗の描写が興味深い。「カルト」と題された第3巻に見られる、ユダヤ文化やスラヴ宗教の描写も、そのバイアスマゾッホ的な演出も含めて面白い。

・学生に薦められた漫画3点

『ふつうの軽音部』（原作：クワハリ・作画：出内テツオ）——特別ではない高校の軽音部員を描く群像劇。色々な場面で共感する。5巻まで出ている。『女の園の星』（和山やま）——女子高を舞台に、国語教師「星」先生と周辺の人物が織りなす緩めのギャグ漫画。どの人物も微妙にズレているのが面白い。4巻まで出ている。『ルックバック』（藤本タツキ）——現代の『マンガ道』的な始まりから急展開する1巻。一人の主人公の（絵が下手くそなために軽視されている）4コマ漫画の良さを絵がとても上手いもう一人の主人公はよくわかっていて、という描写で一気に心を掴まれた。最初は一人の努力を表していた、ひたすら机に向かう後ろ姿が、後半で過去を背負うという意味に転じていて、作者の強い意志を感じた。映画も良かった。

吉田恭子（アメリカ文学・英語現代小説）

・Buck O'Neil, I Was Right on Time: My Journey from the Negro Leagues to the Majors (Simon & Scjister, 1996)

1911年生のニグロリーグの生き証人による傑作口述自伝。野球を通じた20世紀アメリカ政治文化史としても興味深い読み物。

・Anna Lowenhaupt Tsing, "The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins" (2015, Princeton UP) 『マツタケ——不確定な時代を生きる術』 赤嶺淳訳 マツタケのグローバルな採集・流通ネットワーク、菌類学の最先端、里山再生運動など幅広いトピックをまとめる問い立ての聡

明さ、語りの巧さ。実践される学際性。マツタケチームの続編にも期待。

・ Annie Proulx, "Barkskins" (2016, Scribner)

17世紀末に年季奉公の樵（パークスキン）としてフランスからカナダに渡ったふたりの男。その子孫の辿った道を三百年にわたって描くファミリー・サーガの「もうひとつ」の主人公は新世界を無尽蔵に覆い尽くしているかに見えた樹木。

着任に伴い十余年ぶりに共通英語科目を担当することになり、発見・再発見した本を3点。

田口かおり（保存修復・美術史）

・ デ・キリコ展

ジョルジョ・デ・キリコ（1888-1978）のおよそ70年にわたる画業を見晴らす一大展覧会が東京から神戸へ巡回した2024年。初期から晩年まで続くめくるめく技法実験に圧倒された企画。コンサベーション（作品の状態点検、修復）と翻訳を担当したこともあって、思い出深い展覧会でした。

・ 映画『アンゼルク “傷ついた世界” の芸術家』

戦後ドイツを代表する芸術家アンゼルク・キーファーを追ったドキュメンタリー。監督はキーファーの盟友でもあるヴィム・ヴェンダースがつとめている。広大なスタジオを鼻歌まじりに自転車でもわるキーファー、ガスバーナーで絵画を淡々と炙るキーファー、鉛でできた本のページをめくる静謐な朝のキーファー。同じ人間なのだな、と親密さを感じる一幕はあれど、そんなひとときの共感「いったい一人の人間にこれだけの仕事ができるものなのか」という絶望にも似た驚嘆にみるみる塗りつぶされていきました。

・ 光州ビエンナーレ

ニコラ・プリオーのディレクションのもと展示される作品たちを見に韓国へ。床に点在する果物のうっすらと熟れた気配と焚かれた香がまじりあって作品への道標となっていたガレ・ショワヌのインスタレーションが印象的だった。コロナ禍からほぼ4年ぶりの国外はなにもかもが素晴らしく、未知の土地で新しいものと出会い、普段と違うものを食べることをどれほど恋しく思っていたか、自分の心のうちがよくわかりました。

林雅行（数学（解析学））

・ フィレンツェのビステッカ

イタリアに滞在していたときに一度食べる機会がありました。海外のステーキは硬いものが多くてあまり好きではなかったのですが、このビステッカは特別に美味しく、強く印象に残っています。一人あたり400gは食べたはずなのですが、まだまだ食べれそうな感じで、海外の赤身ステーキの魅力を知りました。

・ Delibes: Lakme - Duo des fleurs, Sabine Devieille & Marianne Crebassa

ピサに住んでいたときのルームメイトだったスペイン人の教授（専門は法学）からオペラを勧められ、youtubeでこの曲に辿り着きました。二人のソプラノ歌手の歌声があまりにも美しく、最初に聴いたときは衝撃を受けました。昨年度は朝食にエスプレッソを飲みながらよく聴いていたのですが、京都に移ってからはほとんど聴かなくなってしまいました。イタリアの街の空気感やイタリア語を浴びるように聞いていた当時の状況が、オペラとよく合っていたのかもしれない。

・ Brahms: Piano Concerto NO.2, Krystian Zimerman (piano) , Leonard Bernstein (conductor)

前出のスペイン人のルームメイトから勧められたのがきっかけ

でハマり、今年度の前期はよく聴いていました。最初から最後まで完璧な構成で、聴き始めるとすぐに引き込まれてしまいます。第一楽章が特に好きです。

〈編集後記〉

▶今年度は、AIをテーマとした公開講座に関わったこともきっかけとなり、私にとってAI元年となりました。「AとBのカバンどっちがいいと思う？」みたいなしょ～もない会話から研究の相談（！）まで、いったん使い始めたら、(有料版だけに)使い倒すようになってしまいました。ともあれ、久しぶりに文理の垣根を超えて(あるいは文系が参入しやすい?)議論が盛り上がる分野爆誕につき、関連図書をつまみ食いも楽しんでいます。専門分野では、卒論で扱うという学生に導かれて、ついに『フィネガンズ・ウェイク』元年も迎えてしまいましたが、なかなかどうして、ジョイスのテキストって生成プログラムのだな、と何やらつながってきた感があります。加えて、本号掲載の座談会も、本誌発の出版記念講演会も、「専門性をあらためて問い直す」貴重な機会となり、専門を伸ばしたかったら専門外に目を向ける、という総人・人環的教訓を得られた1年でした。(合田)

▶総合人間学部の再編に関する座談会に参加しました。座談会の原稿を読み返して唐突に心に浮かんだのが、新聞に連載されていた夜間中学の話です。連載記事に書かれていた、学べることを純粹に喜ぶ生徒さんたちの姿に、学ぶ喜びを忘れてしまっていた自分を恥じたことを、苦々しく思い出しました。(小木曾)

▶編集に加わって4号目になります。今回比較的ゆったり関わらせていただきました。今号でも様々な方に記事の依頼などご協力お願いさせていただきましたが、お忙しい中、お時間を割いてご協力いただけたことに感謝申し上げます。編集長の細見先生、副編集長の小木曾先生、編集の先生方、北斗プリントの松本さんも、どうもお疲れ様でした。(小林)

▶編集委員として2年目を迎えました。大学に着任したてで一緒にさせていただいた前号に比べると、より落ち着いてフォーラムづくりに取り組むことができたように思っています。今号では、現役生・修了生の皆さまの活躍を伝える「私の受賞研究について」や「自著を語る」、書評欄などを担当いたしました。お一人お一人が、この時代にこの社会とどのように向き合い、思考を深め、それぞれのフィールドで奮闘しつつ日々をいかに生きておられるのかを知る貴重な機会となっています。研究とは時に孤独なものですが、他分野の研究者の方々のご活躍を目にするなかで、ふと自分が抱えている課題とのつながりを見出すこともあり、ひっそりと連帯感を覚えたりもしています。深いところまで潜ってみれば

あらゆる研究は繋がっているのだな、と、改めてそんなことを考える日々です。(田口)

▶今年度4月1日に着任したときに資料として昨年度発行の「総人・人環フォーラム」が入っていて、辞令式のあとに大変楽しく読ませていただいたことを憶えております。委員会を通じて特別公開講座「学問で平和はつくれるか？」が開催されることを知ったのですが、基調講演者の藤原先生のご講演は大変興味深く、また講演の上手さにも感銘を受けました。この他にも委員会の仕事に携わることで総人・人環を知る機会が少なからずあり、雑誌編集の仕事を含め、貴重な経験をさせていただきました。今号も完成版を読むのが楽しみです。(林)

▶2024年が終わったなんて信じられない。いまはまだ12月32日なのではないか…。そう思っただけで数週間。私は、自分のことに関してはいつも過去を引きずらない忘却の達人と思っているのですが、この正月はなぜかこのように感じました。先生方にはご迷惑をおかけしつつ、多々ご教示をいただきました。そのおかげで、京都大学での仕事のリズムもなんとなくつかめてきた気がいたします。本フォーラムへのご協力も含めて、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私の今年の目標は、次の正月に、「この一年は二年分に相当した」と思えるよう丁寧に生きることです。じつは過去にそうした感覚を体験していて、それは北海道大学での学部学生時代でのことですが、一日48時間くらいはあるような気がしました。あのときはとにかくなにかもが新しく、珍しく、面白かった。まだルーティーンがなかったからなのかもしれませんが、もちろん、いまや学部学生のように時間を過ごせるわけありませんが、当時は持っていなかった経験に基づいて、大学教員としていま可能な丁寧な生き方について、もう一度反省したいと思います。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。(福元)

▶今号には、公開講座の記事にくわえて、総合人間学部の再編に関わる座談会を掲載しています。お互い同じ職場で仕事をしていてもなかなかコミュニケーションの機会がすくないのだということ、あらためて感じました。くわえて、国際交流セミナーの記録も掲載しています。今号でも多くのかたのご協力を得られたことに感謝いたします。(細見)

編集委員会 委員長 細見和之
副委員長 小木曾哲
委員 合田典世・小林哲也
田口かおり・林雅行
福元健之

総人・人環フォーラム 第43号

令和7年2月28日発行

編集 『総人・人環フォーラム』編集委員会
表紙デザイン 倉本修装幀事務所
発行 京都大学大学院人間・環境学研究所
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
FAX 075-753-7908
印刷製本 (株)北斗プリント社

『総人・人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間の共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究所(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかかわりを模索してゆくため、「総人・人環フォーラム」を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつけてゆきたいと考えています。

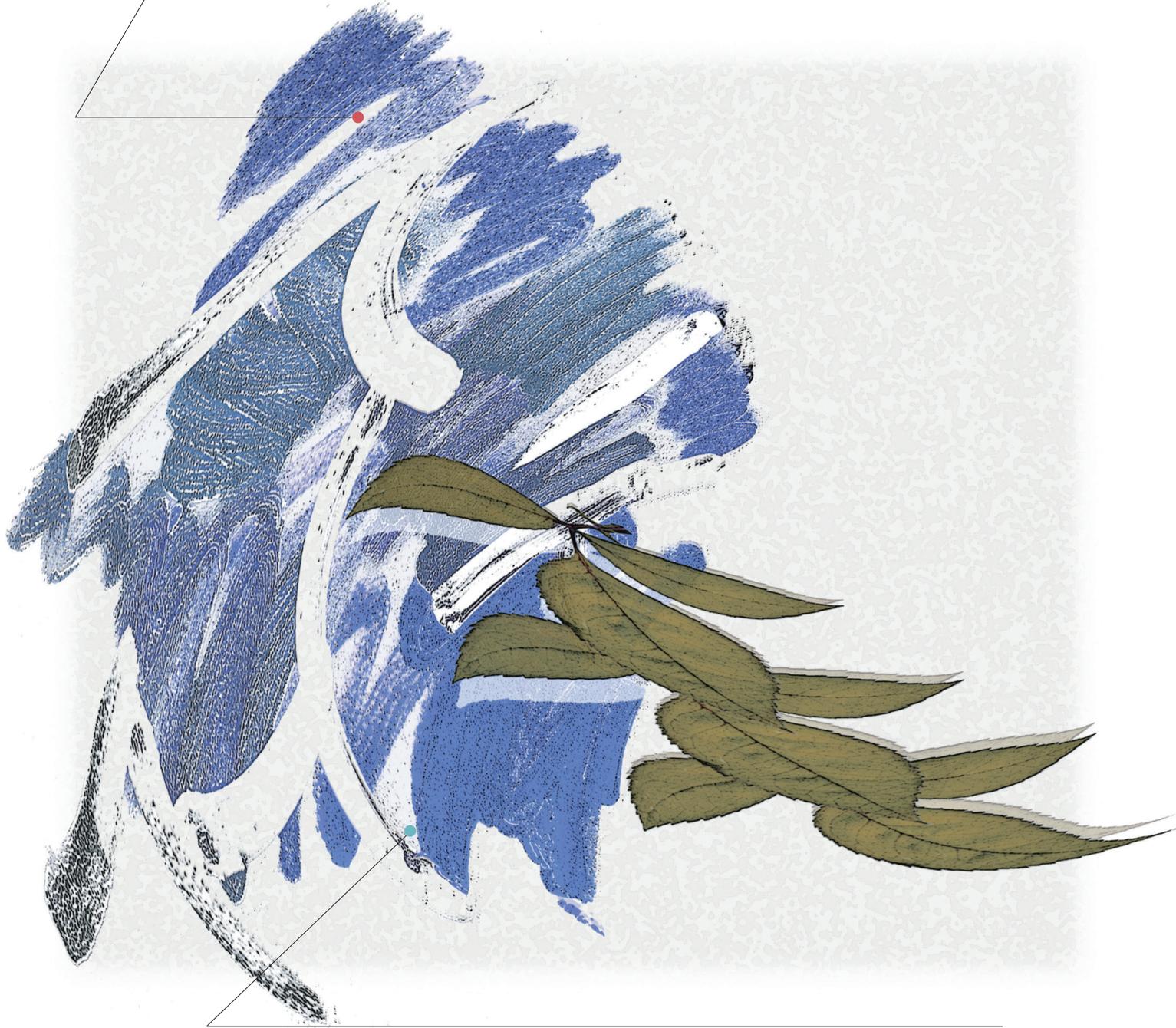
HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

総人・人環フォーラム 43号

特集 AI時代の教育と文化

日置尋久「AIがあふれ出した世界でわれわれはAIをAIするのか」

金丸敏幸「生成AIは教育の黒船？」



座談会 専門性をあらためて問い直す 総合人間学部再編のめざすもの
宮下英明・戸田剛文・船曳康子・松江崇・小島泰雄・小木曾哲